鹿児島大学リポジトリ
Kagoshima University
Repository

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ : 平成元年度

雑誌名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報
巻	5
ページ	1-106
発行年	1990-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031504

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ

平成元年度

〒890 鹿児島市郡元一丁目21番24号
鹿児島大学
埋蔵文化財調査室
TEL099－285－7270
FAX099－285－7271

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

１９９０年３月

序

平成元年度の鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ｖをお届けすることになった。本年度は、施設整備に伴う本調査３件、予備調査２件と、工事に際しての立会い調査13件が行われた。新しい事実が明らかになったもの、また今後の調査に期待を持ち越したものもあった。さらに調査結果から遺物包含層保存のために，工事計画の一部を変更したものもある。年度当初の予算成立の事情もあって、本調査の着手が７月になり、全ての調査が終わったのは年度末であった。その間、時間に追われながら業務を続けられた調査室，並びにこれをバックアップする施設部の関係職員の方々の労苦に敬意を表する次第である。

発掘調査を済ませてから建築工事に取りかかるわけであるが、一連の仕事の中で１つでも歯車が狂うと建築の完成時期に大きな違いが生じる。広い大学のキャンパスの中での施設整備を順調に進めるためには、発掘調査の体制を整えておくことが必要になる。その意味から今回井形学長をはじめ関係各位のご理解とご尽力を得て、平成２年度から調査室に助手１名の増員を実現して頂けることになった。それと共に調査室が発足して５年経過し、調査室経費の見直しをする時期にも当たっている。

地下に眠る文化財への対応と、大学の施設整備という問題の調和を取って行くために、今後とも関係各位のご理解とご支援をお願いする次第である。

平成２年３月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会
委員長　　難　波　直　彦

例　　言

1．本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成元年２月１日から平成２年１月31日までに行なった調査活動の成果をまとめたものである。調査報告は昭和63年度分（平成元年２～３月）を第Ⅰ部、平成元年度分（平成元年４月～平成２年１月）を第Ⅱ部とする。

2．昭和60年６月１日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。

その設置基準は以下のようである。

(1)　郡元団地では、国土座標第２座標系（X＝－158.200, Y＝－42.400）を基点として一辺50ｍの方形地区割を行なった（図版１参照）。

(2)　宇宿団地では、国土座標第２座標系（X＝－161.600, Y＝－44.400）を基点として一辺50ｍの方形地区割を行なった（図版２参照）。

3．本年報において報告を行なった調査地点については、立合調査地点を除き、図版１・２にその位置を示している。

4．本年報の執筆は、第Ⅰ部については第１章を松永幸男が、第２章を松永・砂田光紀が担当した。また、第Ⅱ部については第１章を松永が、第２章を砂田・松永・中村直子が、第３章を松永・砂田が、第３章を松永が、第４章を松永・砂田が担当した。

5．遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は中村・砂田・松永が行なったが、大学院連合農学研究科校舎建設地の調査においては遺構の実測について、黒木綾子・末吉奈津子・安部聡子・有馬孝一・栫井正人・神園日菜子・前幸雄・富元佳子・松村みどり・園田淑子・長尾聡子・中村由美子・福永裕暁・峰山いづみ（以上、鹿児島大学法文学部考古学研究室）諸氏の御協力を得た。また、遺物の実測にあたっては、雨宮瑞生氏（筑波大学大学院生）の御協力を得た。

6．医学部ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設地の調査に際し、森脇広（鹿児島大学法文学部助教授）・成尾英仁（鹿児島市立玉竜高等学校教諭）の諸氏には本調査区検出の火山灰層の観察を中心として多くの御教示を賜った。また、本田道輝氏（鹿児島大学法文学部助手）には上記調査及び大学院連合農学研究科校舎建設地の調査において、調査期間中数々の御教示を賜った。

7．医学部ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設地内の調査において出土した石器については、鹿児島大学理学部大庭昇教授に石材の鑑定をお願いし、懇切丁寧な御教示を賜ることができた。

8．遺構断面図及び土層図横の数値はすべて海抜高である。

9．本書の編集は上村俊雄の指導を受けて、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行なった。

目　　次

第Ⅰ部　昭和63年度（平成元年２月～３月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告
第１章　昭和63年度（平成元年２月～３月）調査の概要 …… 3
第２章　昭和63年度（平成元年２月～３月）鹿児島大学構内における立合調査報告 …… 4

第Ⅱ部　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告
第１章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）調査の概要 …… 13
第２章　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区における発掘調査報告 …… 15
１．調査に至る経過 …… 15
２．調査体制 …… 15
３．調査の経過 …… 16
４．基本層序 …… 20
５．遺構 …… 23
６．遺物 …… 28
７．まとめ …… 35
第３章　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区における発掘調査報告 …… 39
１．調査に至る経過及び調査体制 …… 39
２．調査の経過 …… 42
３．基本層序 …… 42
４．遺構 …… 45
５．まとめ …… 59
第４章　鹿児島大学郡元団地Ｑ－９・10区における発掘調査報告 …… 61
１．調査に至る経過 …… 61
２．調査体制 …… 61
３．調査の経過 …… 62
４．基本層序 …… 62
５．遺構 …… 64
６．まとめ …… 65
第５章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）鹿児島大学構内における立合調査報告 …… 66

・鹿児島大学構内遺跡調査要項 …… 68
・受贈図書目録 …… 71

挿　図　目　次

・昭和63年度立合調査
第１図　農学部動物用焼却炉設置工事及び農学部附属家畜病院裏放牧場舗装工事地点位置図 …… 4
第２図　教養部・法文学部周辺舗装工事地点位置図 …… 4
第３図　農学部４号館玄関前その他側溝新設及び改修工事地点・農学部塵置場新設工事地点位置図 …… 5
第４図　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点位置図 …… 6
第５図　出土遺物（１） …… 8
第６図　出土遺物（２） …… 9
第７図　教養部講義棟北側道路鉄柵工事地点位置図 …… 10
・宇宿団地Ｅ－８・９区における発掘調査
第８図　調査地点位置図 …… 15
第９図　調査区東壁土層図 …… 16～17
第10図　調査区西壁土層図 …… 18～19
第11図　調査区南壁土層図 …… 20～21
第12図　調査区北壁土層図 …… 22～23
第13図　Ⅱ層上面検出遺構 …… 25
第14図　Ⅲａ～Ⅳ層上面検出遺構 …… 26
第15図　Ⅳ層上面検出土坑 …… 28
第16図　出土土器（１） …… 30
第17図　出土土器（２） …… 31
第18図　出土土器（３） …… 32
第19図　出土石器（１） …… 33
第20図　出土石器（２） …… 34
・郡元団地Ｆ－３・４区における発掘調査
第21図　調査地点位置図 …… 39
第22図　調査区中央ベルト南面壁土層図 …… 40～41
第23図　調査区西壁土層図（１） …… 43
第24図　調査区西壁土層図（２） …… 44
第25図　Ⅱｂ層上面検出遺構 …… 46
第26図　Ⅱｂ層上面検出円形遺構（１） …… 48
第27図　Ⅱｂ層上面検出円形遺構（２） …… 49
第28図　Ⅲａ層上面検出遺構 …… 51
第29図　Ⅲｃ～Ⅴ層上面検出遺構 …… 53

第30図　ＳＫ20遺構図 …… 55
第31図　ＳＫ22・ＳＫ23遺構図 …… 58
・郡元団地Ｑ－９・10区における発掘調査
第32図　調査地点位置図 …… 61
第33図　No.２・５・９・12トレンチ土層図 …… 63
第34図　No.６トレンチ検出遺構及びNo.６トレンチ東壁土層図 …… 64
・平成元年度立合調査
第35図　農学部２号館西側及び５号館北側駐車場舗装工事地点・農学部附属家畜病院紫友之碑建立工事地点位置図 …… 66
第36図　学生部掲示板取設工事・大学院連合農学研究科校舎建設予定地内フェニックス移植工事地点位置図 …… 66
第37図　教育学部グランド東側樹木移植用掘削工事地点位置図 …… 67

表　目　次

・宇宿団地Ｅ－８・９区における発掘調査
表　1　Ⅲ層～Ⅳ層上面検出ピット観察表 …… 27
表　2　土器観察表 …… 36～37
表　3　石器計測表 …… 38

図　版　目　次

図版１　鹿児島大学郡元団地構内図 …… 79
図版２　鹿児島大学宇宿団地構内図 …… 80
・昭和63年度立合調査
図版３　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点出土遺物（１） …… 81
図版４　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点出土遺物（２） …… 82
・宇宿団地Ｅ－８・９区における発掘調査
図版５　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（１） …… 83
①調査区西壁土層　②調査区北壁土層　③調査区東壁土層
図版６　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（２） …… 84
①Ⅱ層上面検出状況（南東から）　②ＳＫ３完掘状況（北から）
③現代攪乱坑（北から）　④ＳＤ17完掘状況（東から）
⑤ＳＤ４完掘状況（東から）　⑥ＳＤ４埋土

図版７　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（３）…… 85
①ＫＤ１（北から）　②ＫＤ２（北から）　③ＫＤ３（南から）
図版８　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（４）…… 86
①ｅ－③区北壁検出局部断層　②ｇ－①区西壁検出局部断層
③ｇ－②・③区西壁検出局部断層　④ｄ－⑨区東壁検出局部断層
⑤ｄ－②区東壁検出局部断層　⑥ｄ－⑧区東壁検出局部断層
図版９　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（５）…… 87
①Ⅳ層上面検出遺構（南から）　②ＳＫ４完掘状況（西から）
③ＳＫ４埋土　④ＳＫ５完掘状況（北東から）
⑤Ⅴ層掘り下げ状況（北から）　⑥Ⅴ層掘り下げ状況（南西から）
図版10　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（６）…… 88
①第19図１～15（外面）　②第19図１～15（内面）
図版11　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（７）…… 89
①第20図１～11（外面）　②第20図１～11（内面）
③第20図12～20（外面）　④第20図12～20（内面）
図版12　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（８）…… 90
①第20図21～23（外面）　②第20図21～23（内面）
③第21図１～11（外面）　④第21図１～11（内面）
図版13　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（９）…… 91
①②第22図１～５　③④第22図６　⑤⑥第23図２
・郡元団地Ｆ－３・４区における発掘調査
図版14　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（１）…… 92
①ｂ－④区北壁土層　②ｇ－④区西壁土層
③ｇ－②・③区西壁土層　④ｇ－②区西壁土層
図版15　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（２）…… 93
①Ⅱｂ層上面検出状況（西から）
②Ⅱｂ層上面検出畦畔（ＡＺ２）及び畝（南西から）
③Ⅱｂ層上面検出畦畔（ＡＺ１）横断面
図版16　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（３）…… 94
①ＳＫ１完掘状況（北から）　②ＳＫ１中央ピット半截状況
③ＳＫ２完掘状況（南から）　④ＳＫ２中央ピット半截状況
⑤ＳＫ３完掘状況（西から）　⑥ＳＫ４完掘状況（東から）
⑦ＳＫ５完掘状況（北から）　⑧ＳＫ６完掘状況（東から）
図版17　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（４）…… 95
①ＳＫ７完掘状況（西から）　②ＳＫ８完掘状況（南から）
③ＳＫ９完掘状況（北から）　④ＳＫ10完掘状況（東から）

⑤ＳＫ11完掘状況（西から）　⑥ＳＫ12完掘状況（南から）
⑦ＳＫ13完掘状況（北から）
図版18　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（５）…… 96
①Ⅲａ層上面検出遺構（西から）　②Ⅲａ層上面検出畦畔（ＡＺ６）横断面
③ＡＺ３（北西から）　④ＡＺ５（東から）
⑤ＡＺ５（西から）　⑥ＡＺ６（北から）
図版19　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（６）…… 97
①北側段落ち部検出ライン（東から）②Ⅲｃ層～Ⅳ層上面検出遺構（東から）
③ＳＫ15完掘状況（北から）　④ＳＫ16・ＳＫ17完掘状況（北から）
⑤ＳＫ24完掘状況（東から）　⑥ＳＫ19完掘状況（東から）
⑦ＳＫ21完掘状況（東から）
図版20　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（７）…… 98
①ＳＫ20全景（南東から）　②ＳＫ20全景（東から）
③ＳＫ20Ａ群（東から）　④ＳＫ20Ｂ群（西から）
⑤ＳＫ20Ｃ群（Ｃ1～Ｃ3）（北から）⑥ＳＫ20Ｈ群（Ｃ４）（東から）
図版21　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（８）…… 99
①ＳＫ20Ｄ（南から）　②ＳＫ20Ｅ（東から）
Ｆ④ＳＫ20Ｆ群（北から）　④ＳＫ20Ｇ群（東から）
⑤ＳＫ20Ｈ群（Ｈ1～Ｈ3）（南から）⑥ＳＫ20Ｈ群（Ｈ４）（南から）
図版22　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（９）…… 100
①ＳＫ22完掘状況（東から）　②ＳＫ22埋土
③ＳＫ23完掘状況（東から）　④ＳＫ23埋土
図版23　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（10）…… 101
①②出土陶磁器（１）
図版24　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（11）…… 102
①②出土陶磁器(2)　③④石鍋
図版25　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（12）…… 103
①②出土土師器・黒色土器（１）　③④⑤黒色土器（２）
図版26　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（13）…… 104
①②出土銭貨　③④出土土製品
・郡元団地Ｑ－９・10区における発掘調査
図版27　鹿児島大学郡元団地Ｑ－９・10区（１）…… 105
①調査区全景（南東から）　②№５トレンチ北壁
③№５トレンチⅤ層遺物出土状況（北から）
図版28　鹿児島大学郡元団地Ｑ－９・10区（２）…… 106
①№６トレンチⅥ層上面遺構検出状況（東から）

②№.6 トレンチⅥ層上面検出遺構完掘状況（東から）
③№.3 トレンチⅤ層中検出ライン（東から）

第Ⅰ部　昭和63年度（平成元年２～３月）
鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　昭和63年度（平成元年２～３月）調査の概要
第２章　昭和63年度（平成元年２～３月）鹿児島大学構内における立合調査報告

第１章　昭和63年度（平成元年２～３月）調査の概要

平成元年２月から３月にかけては、農学部（４件）、教養部～法文学部（１件）、教育学部（１件）、教養部（１件）において掘削を伴う工事が実施されたため、これに伴って立会い調査を行った。これらの工事は掘削深度が浅く、埋蔵文化財への影響が認められたものは少なかった。しかし、教養部では鉄柵設置工事に伴う40㎝程の掘削で既に遺物包含層へ達し、また、教育学部においては附属小学校校庭を南北に縦断するように配管のための掘削が行われ、本地域一帯に良好な遺物包含層が存在することが知られた。特に、教育学部附属小学校での立合調査においては、成川式土器を多量に包含する黒色土層の存在が確認された。教育学部には、古墳時代の住居址が検出された、学史上著名な「附属中学校敷地内遺跡」[1)] が存在するが、今回掘削を受けた包含層はこれと同時期のものであり、附属中学校敷地内遺跡に連続するものである可能性も高い。

註

１）河口貞徳「付編Ⅰ，教育学部附属中学校敷地内遺跡」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1987年

第２章　昭和63年度（平成元年２～３月）鹿児島大学構内における立合調査報告

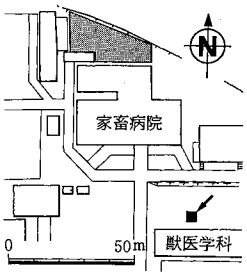
昭和63年２～３月においては下記の工事に伴い、立合調査を実施した。

農学部動物用焼却炉設置（更新）工事（平成元年３月７日、郡元団地Ｃ－５区）
教養部・法文学部周辺舗装工事（平成元年３月８・９・14日、郡元団地Ｌ－３～９区）
農学部４号館玄関前その他側溝新設及び改修工事（平成元年３月24・30・31日、郡元団地Ｄ・Ｅ－７～10区）
農学部塵置場新設工事（平成元年３月24日、郡元Ｅ－６区）
教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事（平成元年３月27～29日、郡元団地Ｒ～Ｔ－５～７区）
教養部講義棟北側道路鉄柵工事（平成元年３月29日、郡元団地Ｉ－４～６区）
農学部附属家畜病院裏放牧場舗装工事（平成元年３月30日、郡元団地Ａ・Ｂ－６区）

以下、順に調査結果について報告を行う。

農学部動物用焼却炉設置（更新）工事に伴う立合調査（第１図矢印部分）

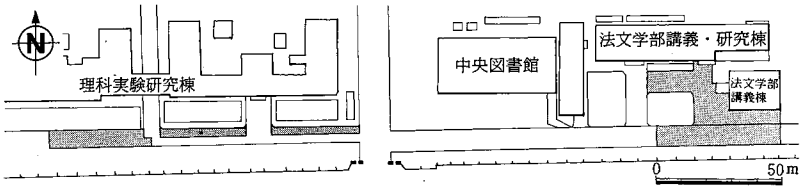
本工事地点は既存の焼却炉を撤去した部分に重複するが、上屋面積の拡大に伴い周縁部に新たな掘削部分を生じることとなった。掘削は基礎用柱穴を設けるために行われたもので、深さ50～60㎝、一辺70㎝ほどの方形掘削部が５ヶ所設けられたが、これらの掘削部は現代の陶器片・土管片・針金などを含む客土中に留まっており、埋蔵文化財への新たな影響は認められなかった。



第１図　農学部動物用焼却炉設置工事及び農学部附属家畜病院裏放牧場舗装工事地点位置図　（１／3000）

教養部・法文学部周辺舗装工事に伴う立合調査

本舗装工事は教養部３号館理科実験研究棟及び理科実験棟の南側、法文学部講義研究棟南側、法文学部講義棟西側及び南側において行われた（第２図）。これらの工事に伴う掘削は、法文学部講義棟南側において一部地表下70㎝に及んだのを除けば、ほぼ地表下20㎝ほどの範囲でおさまってお



第２図　教養部・法文学部周辺舗装工事地点位置図　（１／3000）

り、埋蔵文化財への新たな影響はなかった。しかしながら、攪乱土中にブロック状に存在する褐色シルト質土（大粒のパミスを含む）には成川式土器片が含まれており、本地点付近に古墳時代の遺物包含層が存在することが推測される。今後、本地域において施設計画を進めるにあたっては、埋蔵文化財に対する充分な配慮が必要であろう。

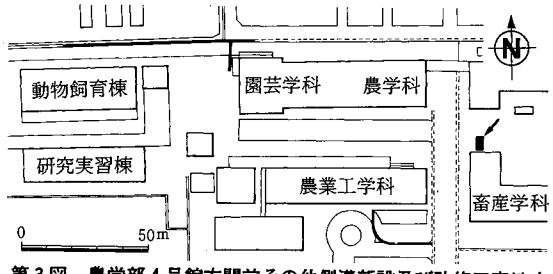
農学部４号館玄関前その他側溝新設及び改修工事に伴う立合調査

工事は農学部４号館南側・農学部５号館西側・同北側～温室群南側において行われた（第３図）が、このうち前二地点においては掘削深度が30㎝ほどと浅く、埋蔵文化財包含層への影響は認められなかった。これに対し、５号館北側から西へ延びる側溝改修部分においては既掘部に重ねて掘削が行われたものの、深度が85㎝と深くプライマリーな層に掘削が及ぶこととなった。工事中、遺物の出土はみられなかったが、次のような層序が観察された。

Ⅰ層：客土（層厚約30㎝）、Ⅱ層：灰色砂混じりシルト層（層厚約10㎝）、Ⅲ層：灰色砂混じりシルト層（層厚約40㎝、Ⅱ層より灰色味が強く鉄分の浸透を受けているため褐色味を帯びている）、Ⅳ層：明褐色シルト層

農学部塵置場新設工事に伴う立合調査（第３図）

本工事に伴い５ｍ×２ｍの範囲が掘削されたが、深度が10㎝と浅く埋蔵文化財包含層への影響はなかった。



第３図　農学部４号館玄関前その他側溝新設及び改修工事地点・農学部塵置場新設工事地点位置図　（１／3000）

教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事に伴う立合調査（第４図）

本工事によって、附属小学校敷地内の西縁部と北縁部にかけて４ヶ所のマンホール及びこれらと既設のマンホールとをつなぐ溝の掘削が行われた。本工事地点は学史上著名な附属中学校敷地内遺跡の東方約150ｍに位置しているが、掘削の結果、附属小学校グランド南半部においては約80㎝ほどの客土の直下に黒色の古墳時代遺物包含層が存在することが確認された。また、この部分については掘削部壁面において溝状遺構ないし土壙と考えられる落込みが確認されている。附属小学校敷地北半部においても須恵器大甕肩部片・土師器坏底部片をはじめとする遺物が出土しており、本地域にも良好な遺物包含層が拡がっていることが推測される。なお、附属小学校校舎北側における掘削部においては、マンホール部分を除いて埋蔵文化財包含層への新たな影響は認められなかった。

立合調査においてはマンホール敷設のための掘削部、及びグランド内掘削部において遺構検出地点を含んで任意に設けた10地点において土層の観察を行った。ここでは、これらの土層観察地点における土層の観察結果、及び立合調査時出土遺物についてこの順に報告を行う。なお、上記の諸遺構については、土層観察結果と併せて報告する。

①土層観察結果

・マンホール部（便宜的に南から北へ番号を付す）

No. 1 マンホール

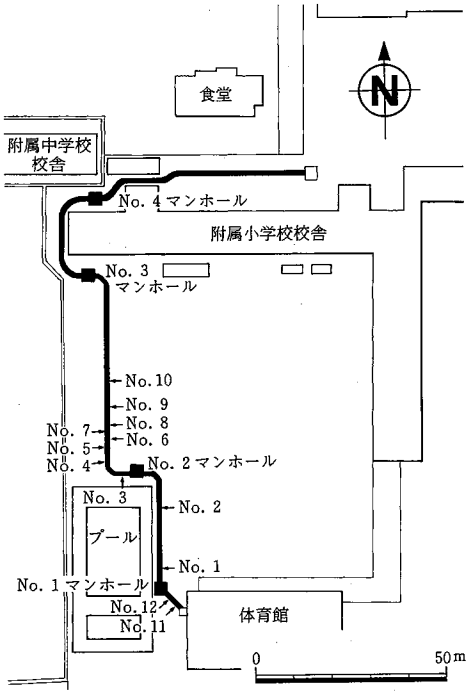
Ⅰ層：客土、Ⅱ層：灰色砂混じりシルト層（層厚約10cm）、Ⅲ層：灰色砂混じりシルト層（層厚約40cm、Ⅱ層より灰色味が強く鉄分の浸透を受けているため褐色味を帯びている）、Ⅳ層：明褐色シルト層

No. 2 マンホール（地表下約160cmまで掘削）

Ⅰ層：客土（層厚約85cm）、Ⅱ層：粗砂層

No. 3 マンホール（地表下約150cmまで掘削）

Ⅰ層：客土（層厚約90cm）、Ⅱ層：灰色シルト層（層厚約５cm）、Ⅲ層：灰色砂混じりシルト層（層厚約14cm）、Ⅳ層：灰色砂混じりシルト層（Ⅲ層より灰色味が弱く褐色味が強い、層厚約14cm）、Ⅴ層：粗砂混じり灰色シルト層（層厚約11cm）、Ⅵ層：粗砂混じり濃灰色シルト層（砂の含有量がⅤ層に比べて著しく多い、層厚約14cm）、Ⅶ層：淡濁褐色粗砂層



第４図　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点位置図　（１／2000）

No. 4 マンホール（地表下約180cmまで掘削）

Ⅰ層：客土（層厚約53cm）、Ⅱ層：灰色シルト・褐色シルト・濁褐色シルトからなる混土（攪乱の可能性あり、層厚約24cm）、Ⅲ層：濁灰色砂混じりシルト層（軽石を含みやや粘性あり、層厚約24cm）、Ⅳ層：暗灰色砂混じりシルト（やや固くしまった層で軽石を含む、層厚約31cm）、Ⅴ層：暗灰色粘質土（層厚約31cm）、Ⅵ層：砂層

・土層観察地点部分（観察地点位置については第４図参照）

No. 1 地点

Ⅰ層：客土、Ⅱ層：暗灰色砂混じりシルト層、Ⅲ層：淡褐色砂層

No. 2 地点

Ⅰ層：客土、Ⅱ層：やや濁った褐色砂層

No. 3 地点

客土の直下に現存幅88cm・現存深度18cmの断面凸レンズ状の溝状遺構が存在している。本落込みの埋土は黄色軽石を多量に含む暗濁褐色砂混じりシルトである。

No. 4 地点

灰褐色砂混じりシルトの落込みが存在するが、これは人為的なものではない。

No. 5 地点

暗灰色シルトの落込みが存在するが、これについても人為的なものではないと考えられる。

No. 6 地点

No.5地点の落込みと同質の土を埋土とする幅20cm・深さ28cmほどの柱穴状遺構が芯芯間40cmほどの間隔を開けて2基存在する。

No.7地点

軽石礫を多量に含む暗濁褐色砂混じりシルトを埋土とする断面凸レンズ状の溝状遺構の南半部が残存している。埋土の状況はNo.3地点の溝状遺構とほぼ同様である。

No.8地点

黒褐色シルトを埋土とする溝状遺構が存在する。No.3・6・7地点確認の遺構とは埋土の土質が異なり、これらとは存在時期をことにする可能性が高い。

No.9地点

Ⅰ層：客土、Ⅱ層：淡褐色砂層

No.10地点

Ⅰ層：客土、Ⅱ層：軽石小粒を含む灰色砂混じりシルト（瓦片・ガラス・コンクリート塊等を含み、土質はNo.4地点と類似する。）

No.11地点

Ⅰ層：客土、Ⅱ層：軽石を多量に含む暗褐色砂混じりシルト層（遺物を多量に含んでおり、何等かの遺構の埋土の一部である可能性が考えられる）、Ⅲ層：黄褐色砂層

No.12地点

客土下に柱穴状の落込みを二基検出している。体育館寄りの落込みは幅17cm・現存深度20cm、No.1マンホール寄りの落込みは幅11cm・現存深度25cmを測る。前者の埋土は砂粒を多量に含むやや暗い灰色砂混じりシルト、後者の埋土は濁灰色砂混じりシルトである。また、体育館よりの落込みは輪郭がやや曖昧であるが、No.1マンホール寄りの落込みは輪郭も明確である。また、No.1マンホール寄りの落込みの埋土はNo.4地点の土質と類似している。

②出土遺物（第5～6図）

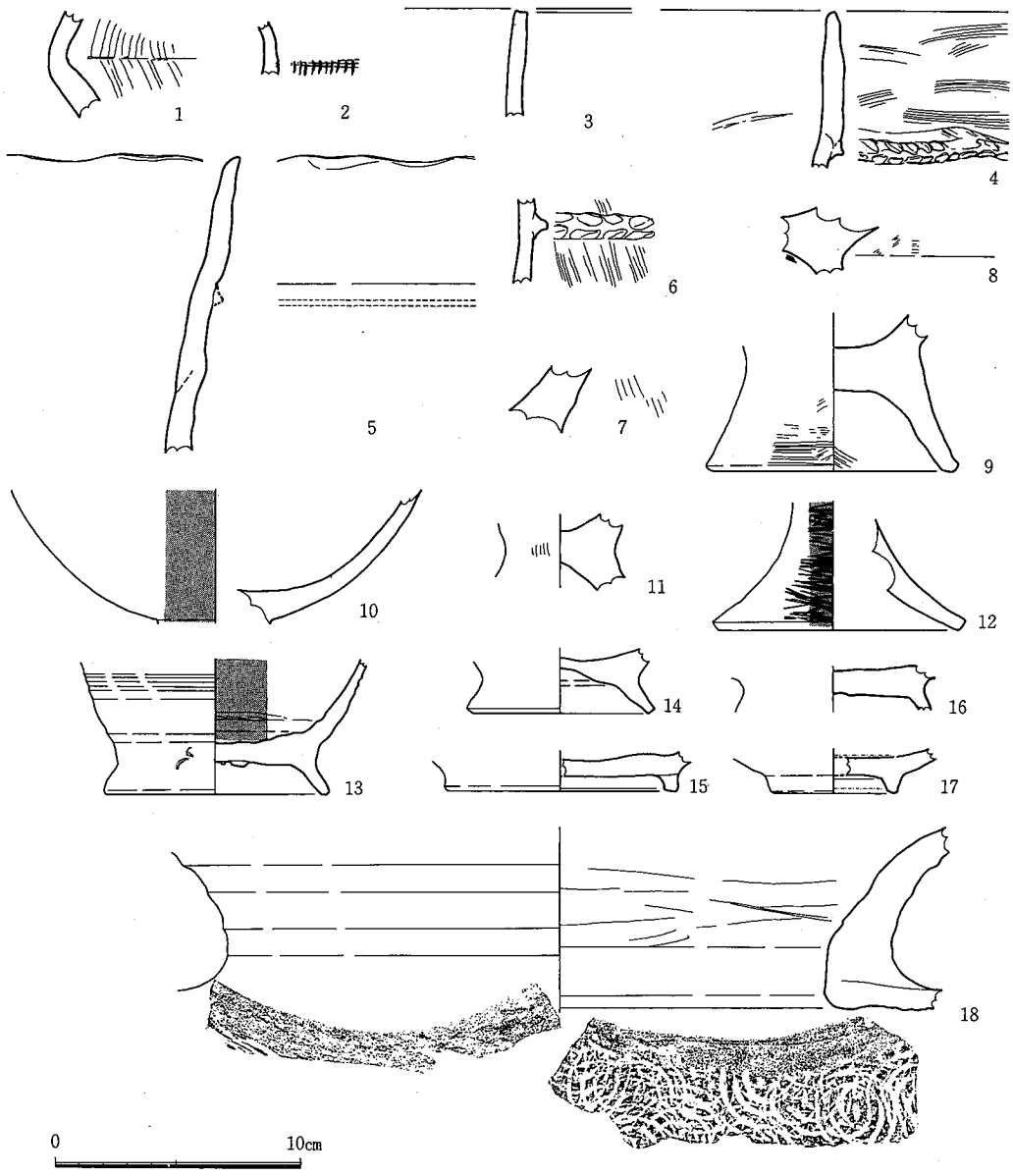
本立合調査の際に検出した遺物には土器・石器がみられるが、体育館とプールとの間の部分を中心に多数出土している。出土遺物の総数は約160点に達するが、ここではこれらのうち図化可能な19点について報告を行う。なお、第5図に掲載した資料のうち、2・4～6・8・10・12・19は体育館～No.1マンホール間において、3・7はNo.1マンホールから、16はNo.3マンホールから、1・15・18はNo.4マンホールから、11・13・14はNo.4マンホール～既設マンホール間においてそれぞれ出土している。報告は土器（成川式土器・土師器・陶磁器・須恵器）・石器の順に行う。

・土器

成川式土器（第5図1～12）

1・2は壺と考えられるもので、1は頸部付近で「く」字状に屈曲した形状を呈している。内面は剝落しているが、外面には屈曲部に鈍い稜線がつく。2は胴部に当たると考えられる小片であるが、縦短沈線列に重ねて横走沈線を施している。

3～9は甕である。3は端部に稜線を持つ口縁部片で、外面にはススが付着している。小片のた



第5図　出土遺物（1）　S＝1／3

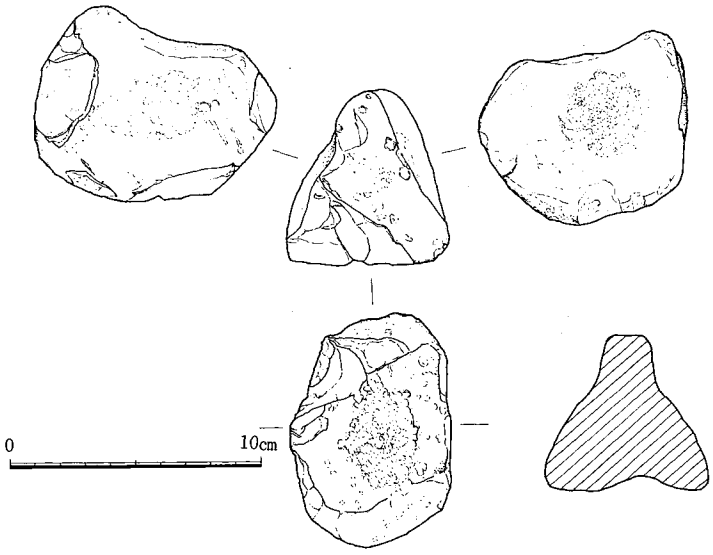
め、傾きなどについては不明である。4はやや内湾気味の直立した口縁部片で、口唇部は丸くおさめている。口縁部下方の突帯はいわゆる「絡縄突帯」で、粘土帯接合部を覆うように貼付されており、突帯上縁部には突帯圧着の際に付いたと思われる爪痕が認められる。5は、口縁部から胴上半部の破片である。口縁部はやや内湾気味に直立しており、口縁部外縁は若干波状を呈している。口

縁部下方の突帯は剝落しているものの、わずかな残存部からこれが「絡縄突帯」ではないことが看取される。6は「絡縄突帯」を貼付する甕の胴部片である。突帯の仕上げ調整はやや雑で、また、突帯下方の胴部外面には斜位の擦過痕が明瞭に残っている。7～9は、いずれも脚台付き甕の底部から脚部にかけての破片である。9は中空の脚台で、胴部内面はススが付着している。わずかに裾が広がる形状を呈し、脚端部は外側に鈍い稜線を持つ。

10～12は高坏である。10は椀状に湾曲しながら立ち上がる坏下半部で、外面には丹塗りを施している。また、坏底面と立ち上がり部との境には、段の形成や沈線はみられない。11は坏脚部の上端部片で、上面には坏底面が残存している。器面が若干摩耗している。12は裾部を一部欠いた脚部片である。若干短いながらも、裾が緩やかに広がる脚部外面には端部接地面直上にまで丹が塗られている。上記の10とは出土地点も近く、胎土・調整も類似していることなどから同一個体である可能性も高い。

土師器（第5図13～16）

13は底部に低い脚台状の高台を付す椀で、体部下半が若干張り出す。体部底面にはヘラ切り離し後にナデ調整を加えた痕が認められ、また内面見込みには指頭でナデつけた痕跡が二条みられる。体部内面には全面に丹塗りが施されており、外面にも丹塗りの痕が部分的に認められる。体部・脚部ともにロクロを利用した回転ナデにより仕上げられているが、両部の接合部分にはユビオサエの痕が認められる。14はやや長い外開きする高台が付く底部片で、内外面ともに丁寧な回転ナデ調整が施されている。15は断面台形状の高台を付す底部片で、外底面には同心円状の砂粒移動痕が認められる。16は、やや外開きする低い高台が付いた底部片である。内外面ともに若干摩耗しており器面調整などについては不明であるが、外底面にはヘラ切り離し痕がわずかながら残存している。



第6図　出土遺物（2）　S＝1／3

陶磁器（第５図17）

椀の底部片で、高台の畳付け部と体部内面見込み周縁部が無釉のまま残されている。高台は台形状を呈するが、端部を内側から若干削り取っており先端がやや細くなる。

須恵器（第５図18）

大甕の口縁部下半から肩部にかけての破片で、かなり肩が張った器形を呈している。口縁部もかなり強く外反するようであり、頸部外面には格子状の、内面には同心円状のタタキ痕が認められる。

・石器（第６図）

横断面形が三角形をなし、この三側面に明瞭な凹部認めることができる凹み石である。これらの凹部を中心に多数の敲打痕が認められる。

教養部講義棟北側道路鉄柵工事に伴う立合調査（第７図）

本工事においては既設ポール撤去と鉄柵新設のために一辺70㎝深さ40～50㎝の掘削が、33ヶ所において行われた。当該地点は鹿児島大学構内遺跡において最も密に埋蔵文化財の包蔵が認められる地域であり、この工事が事前に埋蔵文化財調査室へ連絡されず実施されたことは極めて残念であった。偶然、工事現場近くを通りかかった埋蔵文化財調査室長から連絡を受け調査室員が現地へ赴いた時にはすでに掘削作業は終了しており、辛うじて土層の観察、及び遺物の採集を行うことができたのみであった。

各掘削部の北側25㎝ほどは、これらの掘削坑列に平行する側溝の敷設時に既に掘削されている。残存部分を中心に堆積層の観察を行った結果、20～30㎝ほどの客土層の下に成川式土器を包含する黄褐色シルト層が存在することが確認された。

本地点は鹿児島県教育委員会の調査によって古墳時代の集落址の存在が明らかにされている地域で、先述のように埋蔵文化財が密に包含されていることが充分周知されている地域でもある。本地域においては、今回の掘削工事の例からも示されたように、ごく浅い掘削でも埋蔵文化財包含層に影響を与える可能性が高く、今後の開発事業の実施にあたっては埋蔵文化財に対するより一層の配慮が求められよう。

第７図　教養部講義棟北側道路鉄柵工事地点位置図　（１／3000）

農学部附属家畜病院裏放牧場舗装工事に伴う立合調査

本工事は第１図に示す地域において実施されたが、掘削深度が15～20㎝と浅く、埋蔵文化財への新たな影響はなかった。

第Ⅱ部　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）調査の概要
第２章　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区における発掘調査報告
第３章　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区における発掘調査報告
第４章　鹿児島大学郡元団地Ｑ－９・10区における発掘調査報告
第５章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）鹿児島大学構内における立合調査報告

第１章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）調査の概要

平成元年４月～平成２年１月においては、下記の本調査（３件）、及び下記の工事に伴う立合調査（５件）を実施した。

・本調査

医学部附属病院ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設地における埋蔵文化財発掘調査（平成元年７月24日～９月27日、宇宿団地Ｅ－８・９区）

大学院連合農学研究科校舎建設地における埋蔵文化財発掘調査（平成元年10月２日～平成元年12月18日、郡元団地Ｆ－３・４区）

教育学部附属中学校プール上屋取設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成元年12月18日～12月26日、郡元団地Ｑ－９・10区）

・立合調査

農学部２号館西側及び５号館北側駐車場舗装工事（平成元年４月６・７日、郡元団地Ｃ－６、Ｄ－６～８区）

学生部掲示板取設工事（平成元年４月19日、郡元団地Ｆ－４区）

大学院連合農学研究科校舎建設予定地内フェニックス移植工事（平成元年７月26日、郡元団地Ｅ・Ｆ－４区）

教育学部グランド東側樹木移植用掘削工事（平成元年８月17日、郡元団地Ｏ・Ｐ－８区）

農学部附属家畜病院紫友之碑建立工事（平成元年11月２日、郡元団地Ｃ－６区）

医学部附属病院ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設予定地における調査は、平成元年１月に行われた試掘調査[1]の成果を受けて実施されたものである。残念ながら造成時にアカホヤ火山灰層中まで既に削平されていたものの、アカホヤ火山灰層残存部上面において溝状遺構や土坑等を検出したほか、縄文時代早期の包含層中からは少なからぬ量の貝殻文円筒形土器が出土し、さらに土坑・ピット・局部断層等が検出された。特に注目されたのは「薩摩」火山灰層下のいわゆる「チョコ層」中からメノウ製の石鏃一点が出土したことである。本石鏃はその出土層位及び形態から、縄文時代草創期の所産である可能性が高いもので、この石鏃の存在は宇宿団地内所在遺跡の上限をさらに古くさかのぼらせるものである。今回の調査地点は旧地形において平坦部から傾斜面へと移行する地点に存在するためか遺構の検出が少なかったが、縄文時代早期の遺物の出土は比較的多く、近傍に該期の集落址が存在した可能性も高い。「薩摩」火山灰層の文化層の内容については、今後の調査によって徐々に明らかになって行くであろう。

一方、郡元団地構内においては、大学本部東側において大学院連合農学研究科校舎建設地及び教育学部附属中学校プールにおいて事前の埋蔵文化財発掘調査が実施された。大学院連合農学研究科

校舎建設予定地周辺はこれまで本格的な発掘調査がなされておらず、わずかに立合調査によって地表下約１m以下にプライマリーな土層が存在することが知られていたに過ぎなかった。今回、約600㎡を対象とした発掘調査を行なった結果、江戸時代～明治時代の所産と考えられる水田面二面及びそれより下層ではあるが、おそらくこれと近接する時期に比定されると思われる方形土坑群等が検出された。前者は水田址の存在を考古学的に捉えたという点において重要であり、後者についてはその有する諸特徴が京都大学構内遺跡において「土取り穴」とされた遺構[2)]と類似していることが注目される。本遺構についても「土取り穴」と認定することが妥当であるならば、採取された土の用途及びこれを原料として運び込んだ地点の追求等が今後の問題となってこよう。また、本調査地点からは陶磁器・土師器をはじめとする土器の他に、古銭・石鍋・型作りの土製品等も出土している。これらについては、整理期間の都合上、来年度年報において報告を行なう予定である。

教育学部附属中学校プールは昭和38年に河口貞徳氏によって古墳時代住居址が検出された「附属中学校敷地内遺跡」[3)]の東に近接して存在している。このため、何らかの開発行為が行なわれた場合、埋蔵文化財への影響は避けられないものと考えられてきた地域である。今回の工事においては、壺掘り状に２m×３mの範囲を14ヶ所掘削することとなり、工法上可能であれば遺構に影響を与えない深度で掘削をとどめるよう設計変更されることが望まれた。調査の結果、プールサイド上面から約1.7m程下に厚さ約60cmの古墳時代の遺物包含層が存在することが確認された。河口貞徳氏が住居址を検出した「砂層」上面は本層の直下に位置する。このため、施設部との協議の結果、本工事に伴う掘削がプールサイド上面から２mでとどまるよう設計変更がなされた。なお、古墳時代遺物包含層は附属中学校プール底面よりもさらに30cm程下に存在する。このことから考えて、本地域一帯には古墳時代の遺物包含層が近年の攪乱を受けることなくかなり良好な状況で保存されていることが予想される。

立合調査は上記の５地点において実施されたが、教育学部グランドにおける掘削以外については、今回は埋蔵文化財への影響はほとんどなかった。教育学部においては樹木移植のため武道館の南側において掘削が行なわれたが、表土下の淡濁灰色シルト層から土師器坏底部片をはじめとする土器小片が出土している。

註

1）「第Ⅱ部　第３章　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８区における試掘調査報告」
『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅳ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1989年

2）泉拓良・三宅由美「第Ⅰ部 第３章 京都大学北部構内ＢＥ33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』京都大学埋蔵文化財センター　1986年
五十川伸矢「第Ⅰ部 第４章 京都大学医学部構内ＡＮ20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』京都大学埋蔵文化財センター　1986年
五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫「第Ⅰ部 第２章 京都大学病院構内ＡＪ18・ＡＪ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』京都大学埋蔵文化財センター　1989年

3）河口貞徳「付編Ⅰ．教育学部附属中学校敷地内遺跡」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1987年

第２章　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８・９区（ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設地）における発掘調査報告

１．調査に至る経過

鹿児島大学においては、医学部附属病院北側のライナックに隣接してＭＲＩ－ＣＴ装置棟を新設することが計画された。これを受けて、鹿児島大学埋蔵文化財調査室では平成元年１月９日～19日に建設予定地において試掘調査を実施したが、その結果、既に報告しているように縄文時代早期の遺物包含層が存在することが確認された。[1] このため平成元年７月24日から９月27日にかけて、ＭＲＩ－ＣＴ装置棟建設地全域を対象として、建設工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査を行なうこととなった。

２．調査体制

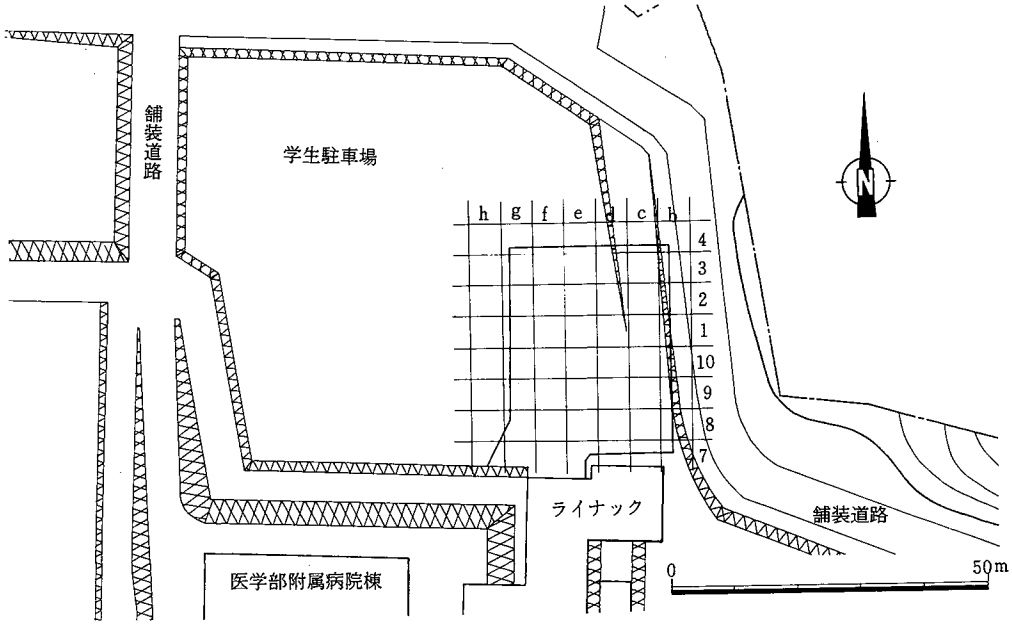
本発掘調査は、以下の体制で行なった。

調査主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　上村　俊雄

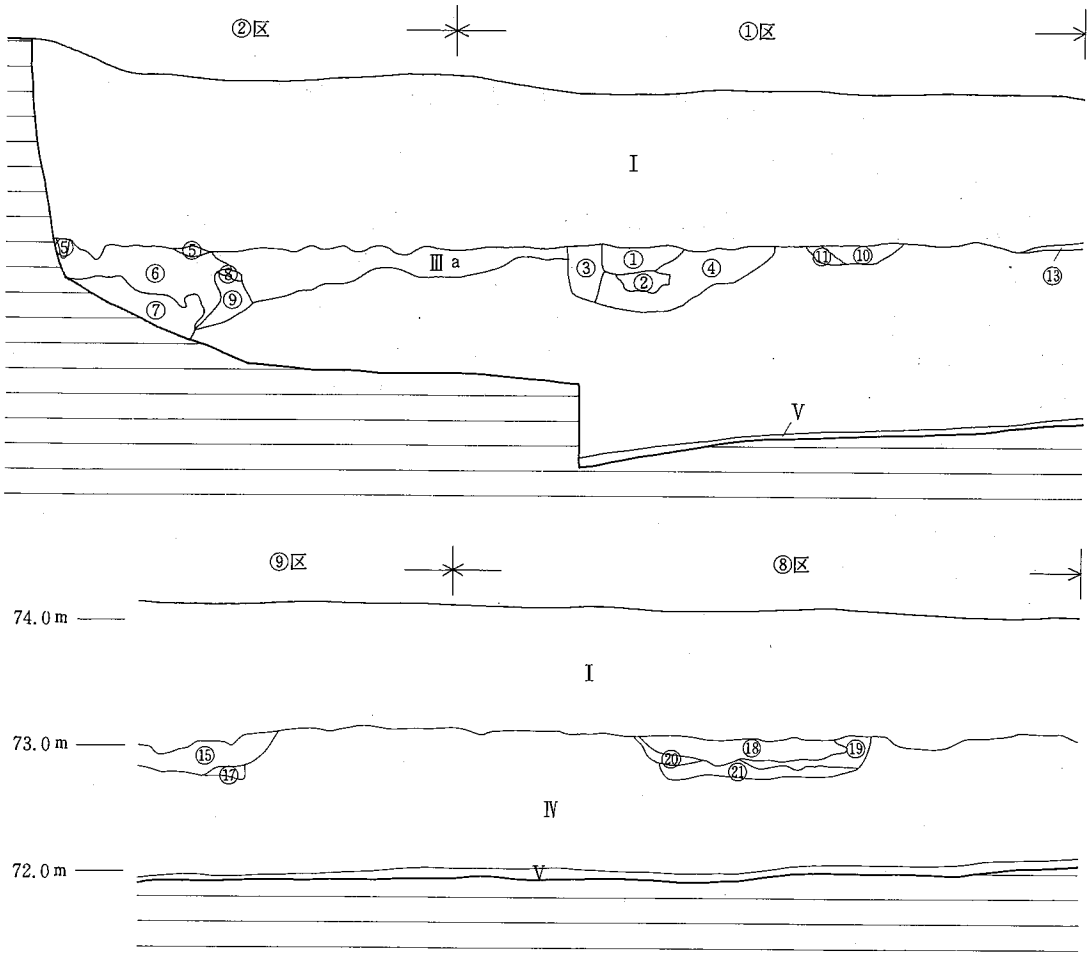
調 査 担 当　鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長　上村俊雄

室員　松永幸男・砂田光紀・中村直子



第８図　調査地点位置図（１／1,200）



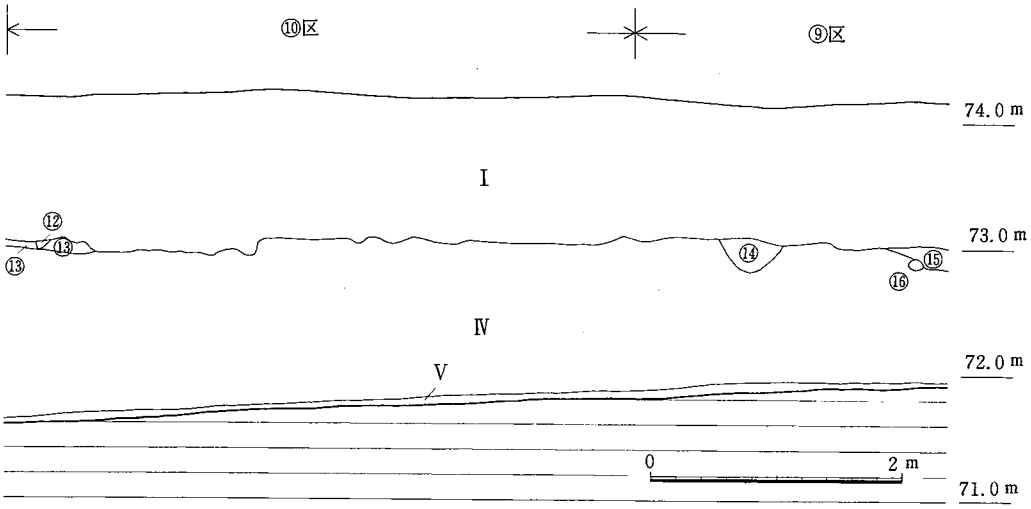
第9図　調査区東壁

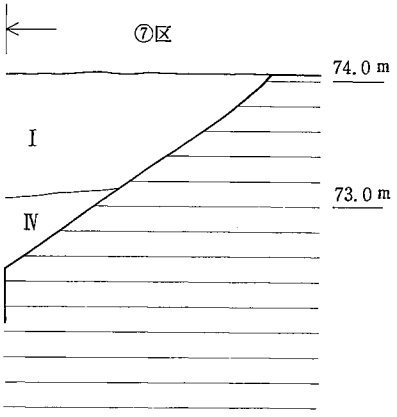
発掘調査作業員

石谷サチコ・岩戸エミ子・金子千穂枝・狩集ミエ子・坂口ミエ子・寺光ミツコ・東條フミ・名越ヒデ子・福永花江・野下チリ子・野下萬里子・野下ヨシエ・野下ヨブ子・前田スガ・盛満アイ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子

3．調査の経過

調査は平成元年7月24日から同年9月27日にかけての約2ヶ月間にわたって実施された。本調査区は医学部附属病院本館の北側に位置し、ライナック北側壁に接する駐車場の南東側の一角を占める。旧地形は東側の脇田川が形成する谷間に向かって若干傾斜しており、そこに盛土を施して造成





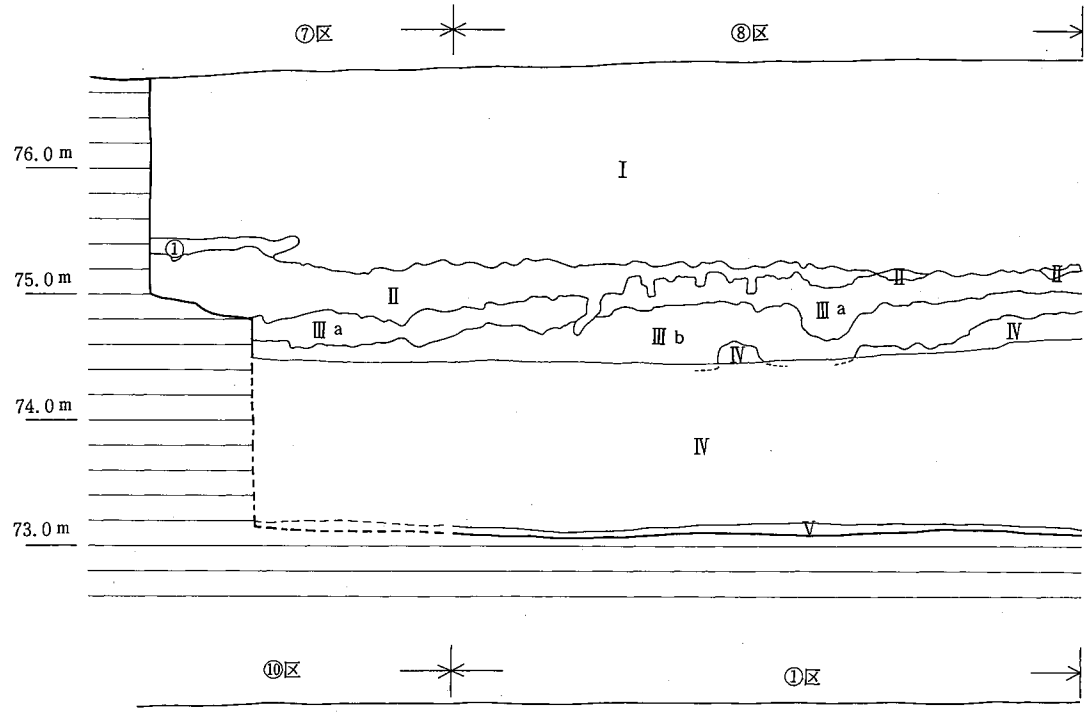
※Ⅰ～Ⅴは基本層のⅠ～Ⅴ層に対応

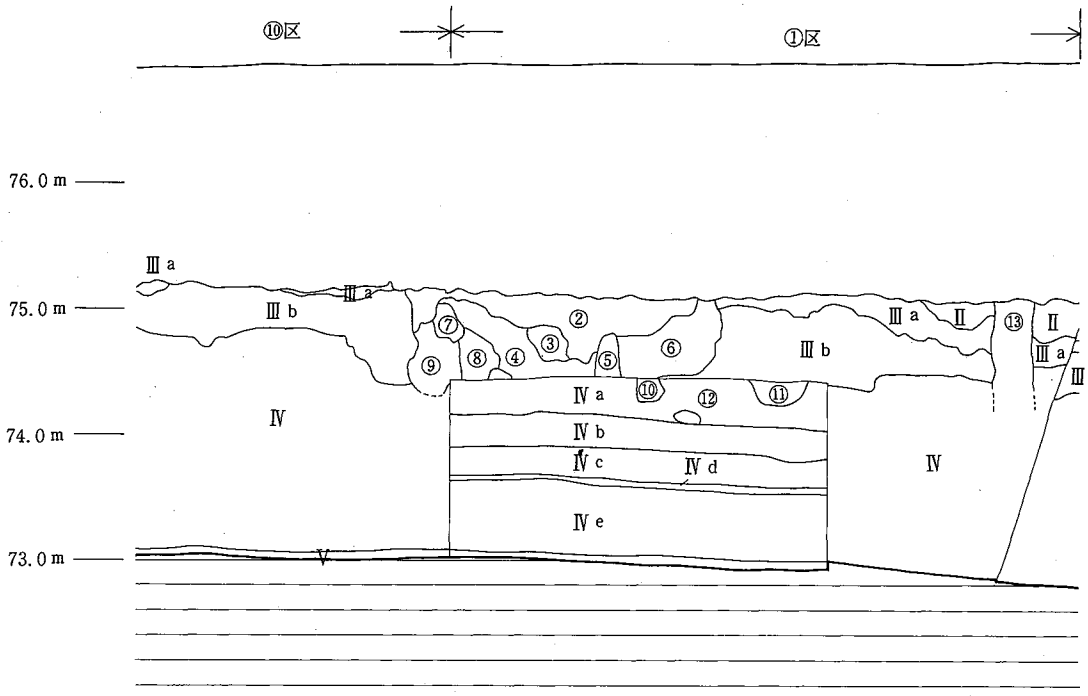
① 淡濁黄褐色シルト混じり粗砂（Ⅳ層土対応土で，黄色軽石を多量に含む）
② 濁黄褐色粗砂混じりシルト（粗砂を多量に含み，Ⅳ層土をブロック状に含む）
③ ①と同質の層であるが，「薩摩火山灰」層土を多量に含んでいる
④ Ⅲａ層土対応土
⑤ 明濁褐色砂混じりシルト層（黄色軽石をわずかながら含む）
⑥ 濁灰褐色砂混じりシルト層（黄色軽石を若干含む）
⑦ 濁褐色粗砂混じりシルト層（黄色軽石を含む）
⑧ ⑦と同質の層を基調とするが，黄色軽石及び「薩摩火山灰」層中の粗砂を含む
⑨ 淡濁褐色シルト混じり粗砂
⑩ Ⅲｂ層対応土
⑪ 濁褐色砂混じりシルト層（わずかに黄色軽石を含む）
⑫ Ⅱ層対応土
⑬ Ⅲｂ層対応土
⑭ 淡濁褐色粗砂層（「薩摩火山灰」層土を基調とする）
⑮ Ⅲｂ層対応土
⑯ 「薩摩火山灰」層土中の硬質土のブロック
⑰ 淡濁灰褐色粗砂混じりシルト層（黄色軽石を含む）
⑱ Ⅱ層対応土
⑲ Ⅲａ層対応土とⅢｂ層対応土との混土
⑳ 明濁褐色粗砂混じりシルト（黄色軽石を含む）
㉑ Ⅳ層対応土

土層図　（1／60）

が行なわれている。この盛土部分は試掘調査の結果、約1.5m程に達することが知られており、このため調査開始にあたっては重機によってこの盛土層の除去を行なった。グリッド設定時の調査区総面積は約700㎡に及び、調査区地表面の標高は海抜約76m、調査終了時点での最深部の標高は海抜約71mであった。調査区には東西・南北方向に５m四方のグリッドを設定し、便宜的に東からａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ、南から⑦・⑧・⑨・⑩・①・②・③の順に呼称している。

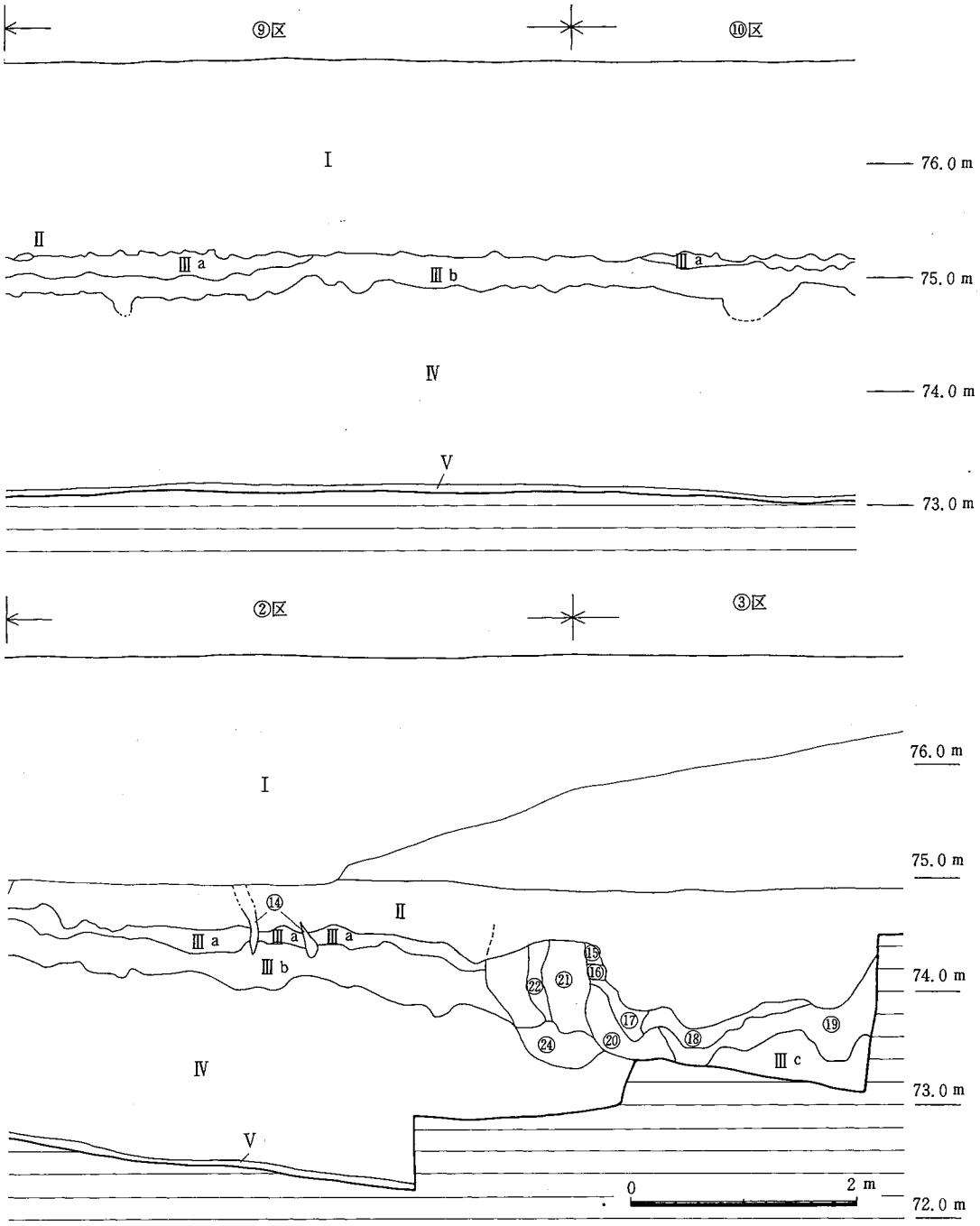
上述のように、まず重機によって現存するアカホヤ火山灰層の上面近くまで盛土を掘り下げたが、この時点で調査区北東部においては盛土層がさらに下方へ厚く堆積していることが知られた。このためとりあえずアカホヤ火山灰層上面が検出された調査区南西半部において残存遺構の調査を進めるとともに、調査区北東半部において盛土層の堆積状況の確認作業を行なった。この結果、調査区





① 暗褐色シルト層（部分的に褐色味が強い）－臨床研究棟建設地において検出した弥生～古墳時代の遺物包含層に対応する
② 濁褐色砂混じりシルト層（１～２cmの黄色軽石礫と白色細粒を含む）
③ Ⅲｂ層対応土ブロック
④ やや色調が暗い濁褐色砂混じりシルト層
⑤ Ⅲｂ層対応土ブロック
⑥ 粗砂混じり灰白色シルト
⑦ Ⅲｂ層対応土ブロック
⑧ 濁褐色砂混じりシルト（黄色軽石礫を含む）
⑨ 粗砂混じり灰白色シルト（黄色軽石を多量に包含）
⑩ 暗褐色土，軽石・白色の細かい粒子を多く含み，かたい
⑪ 埋土（Ⅲｂ層）細かい軽石を含む
⑫ 黒褐色土軽石を含む，砂混じりのシルト質
⑬ 柱穴埋土，濁灰褐色砂混じりシルト（１cm以下の黄色軽石小礫を含む）
⑭ 樹痕

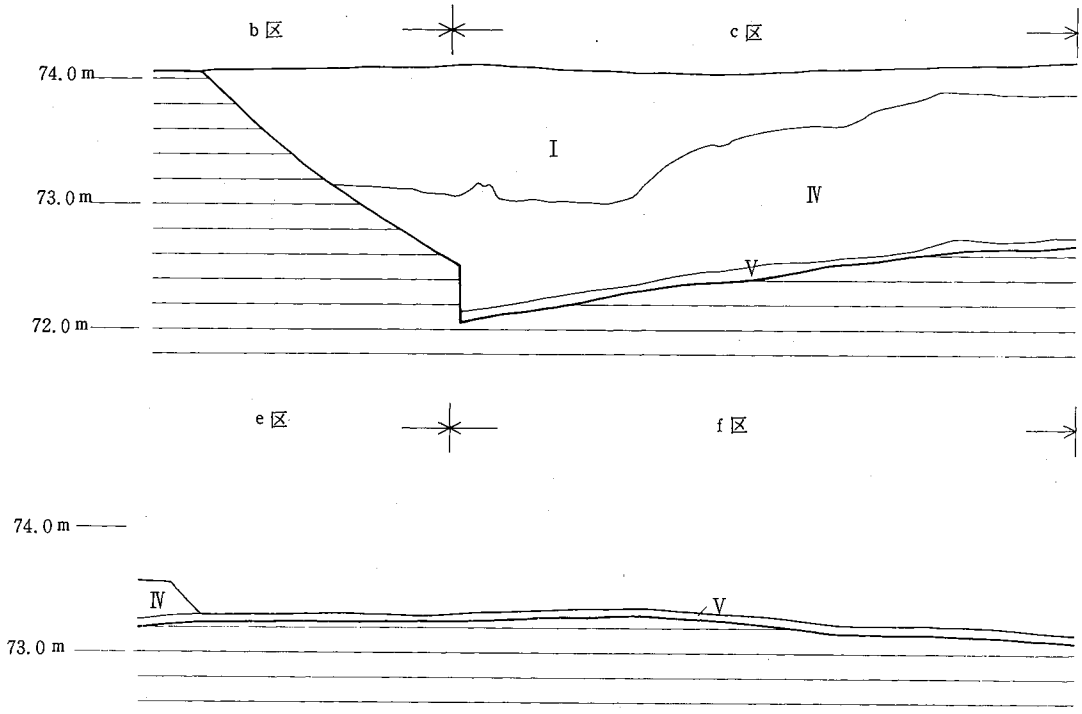
第10図　調査区



⑮ 濁灰褐色，粗砂混じりシルト
⑯ Ⅲb層対応ブロック
⑰ 濁灰褐色粗砂混じりシルト（⑮より若干黒味を帯びる）
⑱ 淡濁色シルト（灰白色土が斑状に混入し粘性を帯びる）
⑲ 濁灰色粘質シルト（8～10cm大の軽石礫数個を含む）
⑳ Ⅲb層対応土
㉑ 荒い砂質（南側に5cm大の軽石を含む，北側Ⅲb層との境界付近にⅣd層を含む）
㉒ Ⅲb層対応土
㉓ Ⅲa層対応土
㉔ 明茶褐色砂質混じりシルト（下部に軽石を含む）

※Ⅰ～Ⅴは基本土層のⅠ～Ⅴ層に対応

西壁土層　（1／60）



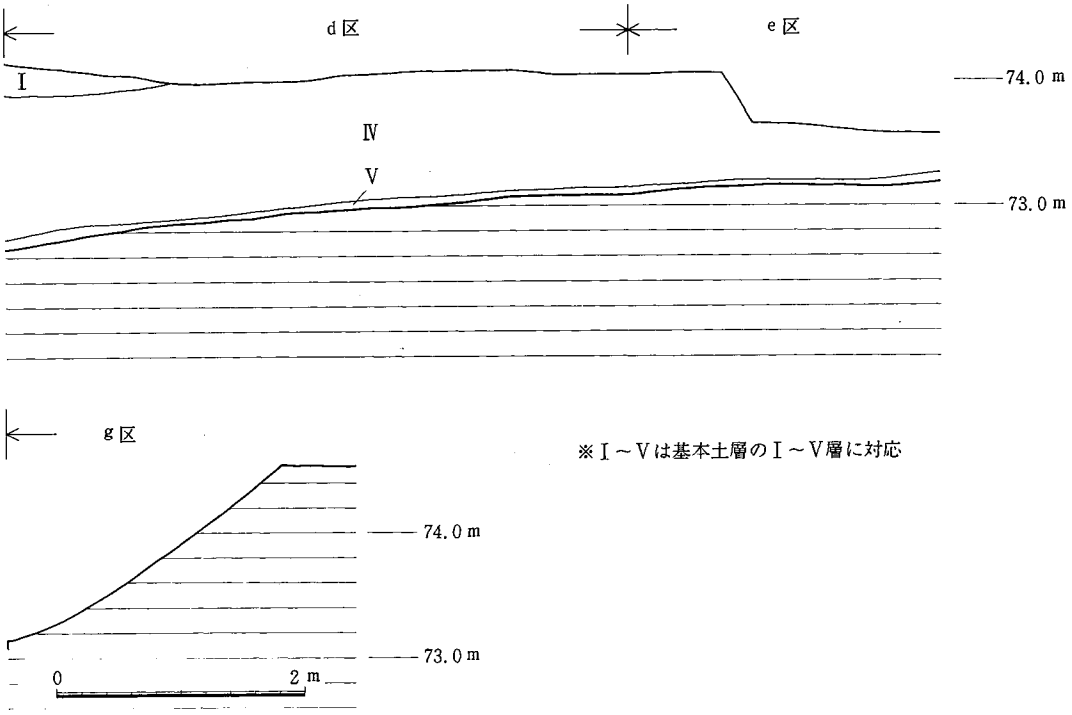
第11図　調査区

北東半部においてはほぼ「薩摩」火山灰層中まで削平されていることが確認された。

調査の結果、アカホヤ火山灰層上面において溝状遺構、土坑、ピット等が、また、アカホヤ火山灰層除去後、「薩摩」火山灰層上面まで掘り下げを進める間に多数のピット、土坑、いわゆる「局部断層」等が検出された。さらに、厚さ約1.5mの「薩摩」火山灰層を重機によって除去した後、いわゆる「チョコ層」の調査を行なった結果、本層からメノウ製の石鏃一点を検出することができた。

4．基本層序

調査区は西側の山系から続く舌状台地の北東端部に位置しており、地形が大きく傾斜を始める部分である。今回、本調査に先立って、調査区に隣接する民間の造成工事現場において、土層断面を観察する機会を得た。現場は調査区北東側の傾斜面であるが、「薩摩」火山灰層及びその直下のいわゆる「チョコ層」も急斜面をなしており、旧地形についても調査区が東側に谷を控えた台地の端部に位置していたことが確認された。本調査区における基本的な土層はほぼ安定して観察され、次のような結果を得た。



南壁土層　（1／60）

第 Ⅰ 層　盛土（造成時の客土、転圧を受け非常に固くしまっている。）

第 Ⅱ 層　アカホヤ火山灰層（黄橙色または黄褐色の火山灰層で、黄橙色・黄色のパミス小粒を若干含む）

第Ⅲａ層　淡濁褐色砂混じりシルト層（アカホヤ火山灰に近い質であるが、粘性が若干強く部分的に黄色パミスを多量に含む）

第Ⅲｂ層　暗褐色砂混じりシルト層（黄色パミスを多量に含み、径１～５㎜の白色の小粒を含む）

第Ⅲｃ層　暗濁灰褐色砂混じりシルト層（Ⅲｂ層より多く砂粒を含み、また大粒の黄色パミス及び径１～５㎜の白色の小粒を含む）

第Ⅳａ～Ⅳｅ層　いわゆる「薩摩」火山灰層

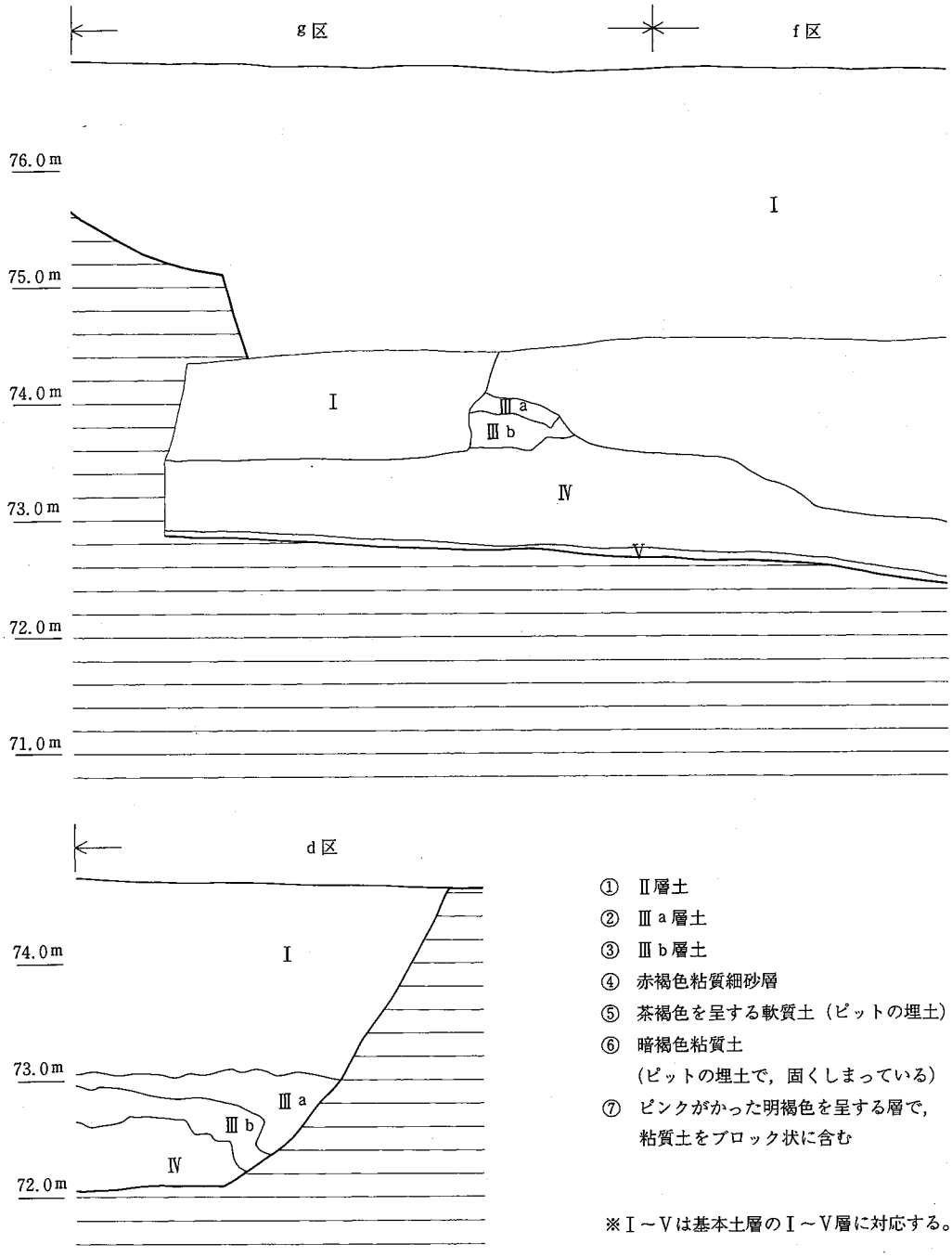
Ⅳａ層　黄褐色を呈する砂質土層で黄色の軽石（３～７㎝大）を非常に多く含む

Ⅳｂ層　明褐色砂質シルト層（２～３㎝大の軽石を含む）

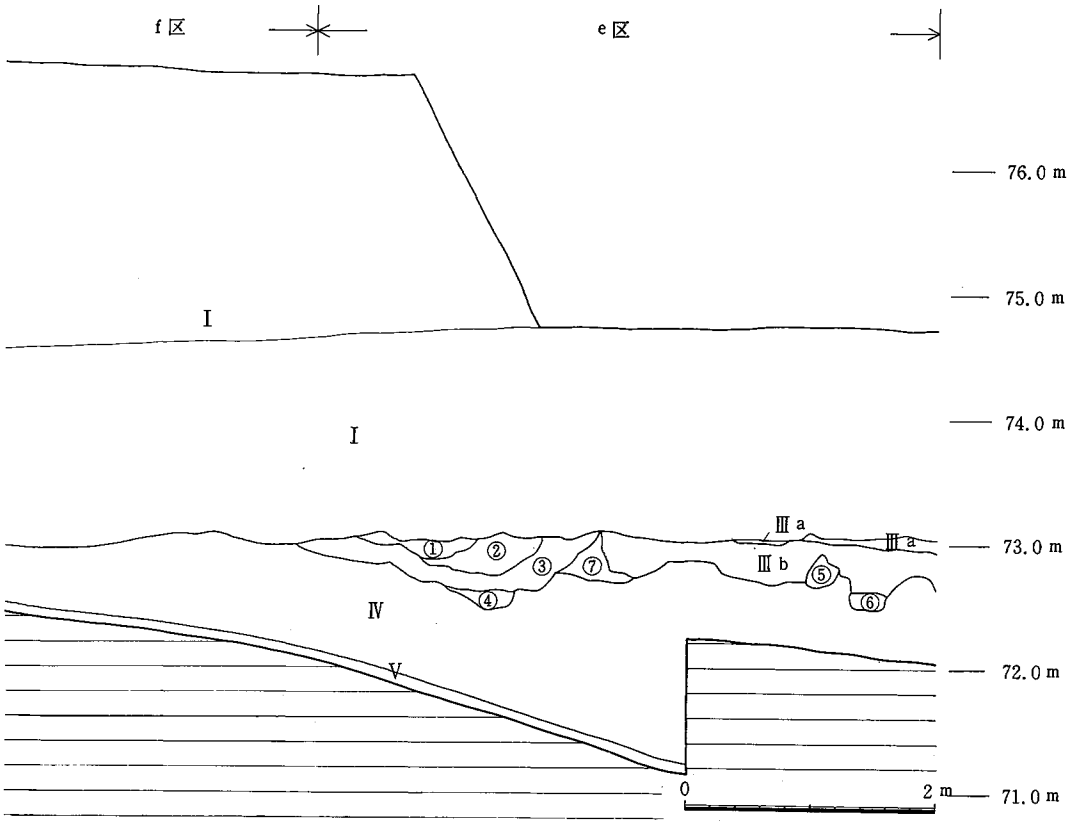
Ⅳｃ層　黄灰色砂質土層（２～３㎝大の軽石を含む）

Ⅳｄ層　上方はピンクがかった褐色を呈し、下方は灰色を帯びたシルト質土層（軽石を含む）

Ⅳｅ層　明黄色粗砂層（黒色の砂粒を含む）



第12図　調査区北壁土層図　（1／60）



第 Ⅴ 層　いわゆる「チョコ層」（水分を多く含む褐色シルト質土）

5．遺構

今回の調査においては第Ⅱ層上面において溝状遺構・ピット・小土坑等の存在が確認され、また、第Ⅲ・Ⅳ層上面においても土坑及び多数のピットを検出した。鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和62年に調査した医学部臨床研究棟増築地と同様に、本調査区においても「局部断層」の存在が確認された。以下、各検出面ごとに遺構の説明を行う。

（a）第Ⅱ層上面検出遺構

溝状遺構

調査区南側において、南北－北東方向の溝状遺構二条を検出した。便宜上、北側の溝状遺構をＳＤ17、南側をＳＤ４とした。

ＳＤ４は上場幅約50㎝下場幅約20㎝を計り、断面形状は「Ｕ」字形を呈する。東側は既に削平されており、西側は調査区外へさらに延びる。埋土は濁灰褐色シルトで、アカホヤ火山灰をごくわず

かに含み、底部に近づくに従って若干黄色味を増す。また、第Ⅲａ層土を小ブロック状に含んでいる。埋土中から土器片８点を検出し、うち１点は弥生土器の底部片である。検出面では明瞭な輪郭を確認したが、埋土完掘後の溝状遺構内面には多数の凹凸が認められた。

ＳＤ17はＳＤ４の北側で、ほぼこれに平行するように南西－北東方向に延びる。上場幅約50～60㎝、下場幅約20～30㎝、深さ約10～15㎝を計る。検出長は約５ｍで、削平を受けた東側と西側調査区外にはさらに延びていたものと考えられる。埋土中から時期不明の土器片２点と、いわゆる「石鹸石」様の４面に磨痕を有する砂岩製石器１点が検出された。ＳＤ17においてもＳＤ４同様に、完掘後の遺構底面には多くの凹凸の存在が認められた。

ＳＤ17、及びＳＤ４の性格については明確ではないが、前述の医学部臨床研究棟増築地における発掘調査の際に、アカホヤ火山灰層の上面から同様の溝状遺構７条を検出しており、規模・形態・検出レベル等について様相を同じくすることから、これらと同時期に形成された可能性が高い。

土坑

第Ⅱ層上面においては土坑３基を検出し、検出順にＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３とした。ＳＫ１はｆ－⑧区において検出された土坑で、西側を攪乱坑によって切られており全容は明かでない。輪郭は明瞭で、検出部分での直径は約50㎝を計る。ＳＫ２はほぼ円形を呈するが、ＳＫ１と同様にやはり西側部分を攪乱坑によって切られている。輪郭は不明瞭であるが、直径は約50㎝を計る。ＳＫ１に隣接して、ｆ－⑧区において検出されている。ＳＫ３はｆ－②区において検出されたほぼ円形の土坑である。直径約50㎝、深さ約20㎝を計り、断面形状は底部が平坦な「Ｖ」字形である。各土坑からは遺物が出土しておらず、性格・時期等については不明である。

ピット

第Ⅱ層上面ではｆ－⑧区において近接した位置に６基のピットを検出し、Ｐ１～Ｐ６とした。検出面での形状は円形もしくは長円形を呈し、直径20～30㎝を計る。同層上面の他の区ではピットが全く検出されておらず、またＰ１～Ｐ６が溝状遺構ＳＤ17の西側延長上に南西～北東方向に帯状に連続して検出されていることから、溝状遺構ＳＤ17との関連も考えられる。

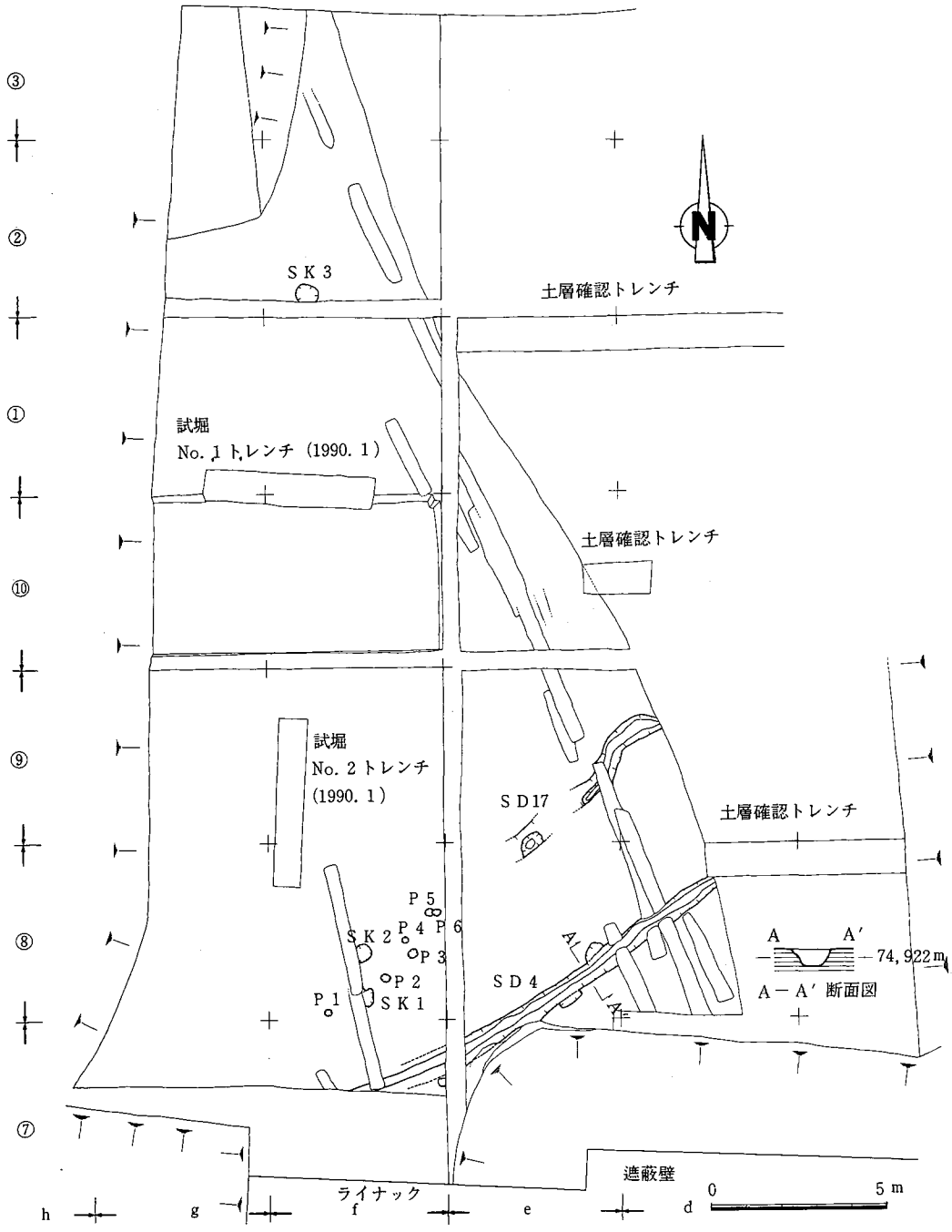
（ｂ）第Ⅳ層上面検出遺構

土坑

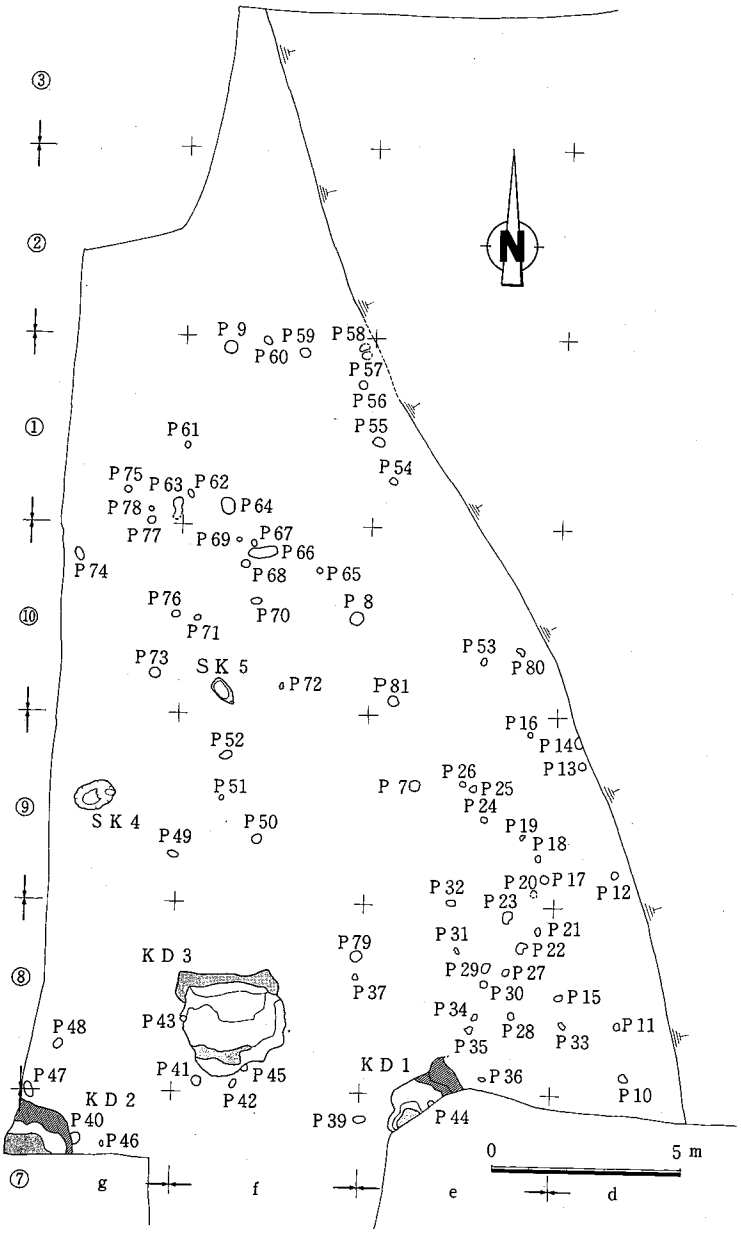
第Ⅳ層上面においては２基の土坑を検出し、検出順にＳＫ４・ＳＫ５とした。ＳＫ４はｇ－⑨区に検出された長円形を呈する掘り込みで、長径90㎝、短径65㎝を計る。深さは約50㎝を計るが、西半部は深度約35㎝と東側より浅くテラス上の平坦面が形成される。埋土は濁褐色を呈し、底面付近では炭化物（最大で５㎝程の塊）が検出された。ｆ－⑩区検出のＳＫ５は長軸を北西～南東方向にとる不定形の土坑であるが、検出面では北西側に二つの角部を有する長い隅丸の三角形を呈する。長径約95㎝、短径約60㎝を計る。深さは南東側の最深部で約40㎝、浅い部分で30㎝を計り、底面は若干傾斜している。第Ⅲｂ層土を埋土とする。

ピット

第Ⅲ層を第Ⅳ層まで掘り下げる過程においてピット75基を検出している。これらについては整理



第13図　Ⅱ層上面検出遺構　(1／200)　　A－A'断面図のみ (1／80)



第14図　Ⅲａ～Ⅳ層上面検出遺構（1／200）

の都合上便宜的にＰ７～Ｐ81と命名し、平板実測によって平面的な位置関係の記録や埋土の観察を行なった。その結果については別表に示す通りである。

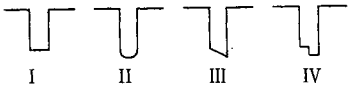
局部断層

局部断層は鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和62年に調査した医学部臨床研究棟増築地における発掘調査の際に、13～14ヶ所で存在が確認された。これについてはアカホヤ火山灰層堆積後、その

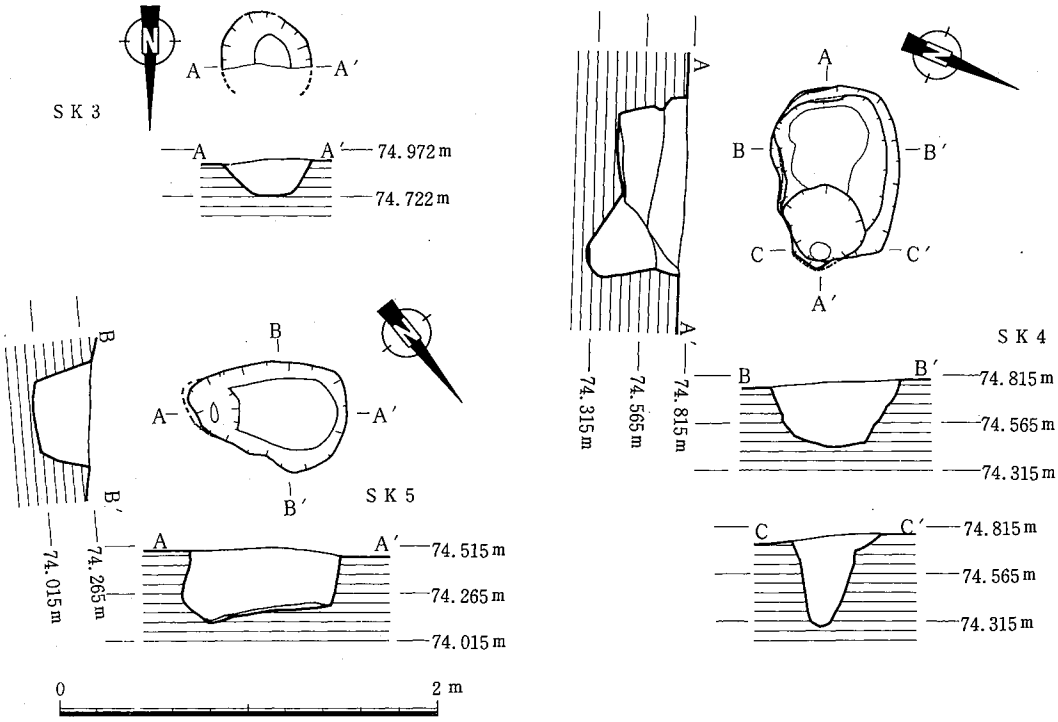
表1　Ⅲ層～Ⅳ層上面検出ピット観察表

No.	断面形態	埋土の種類	備考
7	Ⅲ	濁	
8	Ⅳ	濁	遺物検出
9	Ⅰ	濁	袋状
10	Ⅱ	Ⅱ質	
11	Ⅲ	濁	
12	Ⅰ	濁	
13	Ⅱ	濁（色調Ⅲbに近くパミス多し）	
14	Ⅰ	濁	
15	Ⅰ	濁	
16	Ⅳ	黒褐色	
17	Ⅱ	濁	
18	Ⅱ	濁	袋状
19	Ⅰ	濁（若干のパミス）	
20	Ⅰ	Ⅱ層混じり軟質	
21	Ⅲ	濁	
22	Ⅰ	濁	
23	Ⅳ	濁	
24	Ⅰ	濁	
25	Ⅰ	濁	遺物検出
26	Ⅰ	濁	
27	Ⅰ	混土	
28	Ⅱ	濁（黒褐色）	
29	－	混土	
30	Ⅲ	濁（黒褐色）	
31	－	Ⅱ層土	樹根？
32	Ⅱ	Ⅲc質（黒褐色）	
33	Ⅳ	濁	
34	Ⅳ	濁	
35	Ⅱ	濁（黒褐色）	
36	－	濁（Ⅱ層・黄色パミス混入）	
37	Ⅱ	黒褐色（濁に近い質・パミス少）	
38	－	濁	樹根
39	－	Ⅲc質（黒褐色）	
40	Ⅳ	Ⅲb質（黄色パミス・白色粒）	
41	Ⅰ	濁（黄褐色を帯びパサパサした質）	
42	Ⅱ	濁褐色（アカホヤ質パミス混入）	
43	Ⅱ	混（パミス含む）	
44	Ⅰ	－	
45	Ⅰ	Ⅲa質	
46	Ⅰ	濁（アカホヤ・パミス混入）	
47	Ⅰ	濁	
48	Ⅰ	Ⅲb質	
49	Ⅲ	Ⅲb質	遺物検出
50	Ⅰ	黒褐色粘質土（濁と同質）	
51	Ⅱ	Ⅲb質	
52	－	濁	
53	Ⅲ	濁	
54	不定形	濁	樹根？
55	Ⅱ	濁	
56	Ⅰ	濁	柱穴状
57	Ⅱ	Ⅲb質	
58	Ⅳ	Ⅲb質	未完堀
59	Ⅳ	濁	袋状
60	Ⅰ	Ⅲb質	底部平坦
61	Ⅰ	－	
62	Ⅰ	濁	
63	Ⅰ	Ⅲb質	
64	Ⅰ	Ⅲc質	
65	不定形	濁	
66	Ⅲ	濁	遺物検出
67	Ⅰ	濁	
68	Ⅰ	濁	
69	Ⅰ	濁	
70	Ⅰ	濁	
71	Ⅲ	濁	
72	Ⅰ	濁	
73	Ⅰ	濁	
74	Ⅰ	濁	
75	Ⅰ	濁	
76	Ⅰ	濁	
77	Ⅰ	濁（黄色パミス多く含む）	
78	Ⅰ	濁（黄色パミス多く含む）	
79	Ⅰ	濁（色調明るい）	
80	Ⅲ	濁	
81	Ⅰ	濁	

凡例



※埋土の「濁」は濁褐色シルト質土
※埋土のⅠ～Ⅲは基本土層のⅠ～Ⅲ層に対応



第15図　Ⅳ層上面検出土坑（1／40）

直上に弥生～古墳時代の包含層が堆積する以前に形成されたものであろうと推測された。また、これらの報告を行なうにあたっては仮に風倒木成因説に従って説明を加えた。[2)]

今回検出の局部断層に関しても、最初に観察されたのは第Ⅲａ～Ⅲｃ層掘り下げの時点であったが、先の調査成果を踏まえて掘り下げを継続し、第Ⅳ層上面において平面的な断層の形状が明確になった時点で平面的な記録作成を行なった。平面的な観察が可能であった局部断層は３ヶ所で、検出順にＫＤ１～ＫＤ３とした。なお、調査区各壁面においても局部断層の存在を確認しているが、これについては土層図を参照されたい。

ＫＤ１はｅ－⑦・⑧区において検出され、南側は調査区外のため検出し得なかった。南西から北東にかけて、「Ⅱ層土」・「Ⅲａ層土」・「Ⅲｂ層土とⅢｃ層土との混土」・「Ⅳ層土」の順に平面的に並んだ状態で観察されている。ＫＤ２は調査区南西隅に位置し、一部を検出したに留まったものの、やはり南西から北東にかけて、「Ⅱ層土」・「Ⅲｂ層土」・「Ⅳ層土」がこの順に平面的に並んだ状態で検出された。ＫＤ３はｆ－⑧区において検出された。北側から順に「Ⅱ層土」・「Ⅲａ層土」・「Ⅲｂ層土」・「Ⅲａ層土」・「Ⅱ層土」・「Ⅲｂ層土」が観察されたが、そのほとんどに黄色のパミスが検出されており、地層の回転時に何らかの原因によって混入したものと考えられる。

６．遺物

今回の調査においては、アカホヤ火山灰層、及び「薩摩」火山灰層を除く各層から遺物が出土し

ている。以下では、土器・石器の順に報告を行なう。なお、各遺物の出土層位等については、遺物観察表を参照されたい。

（a） 土器（第16～18図）

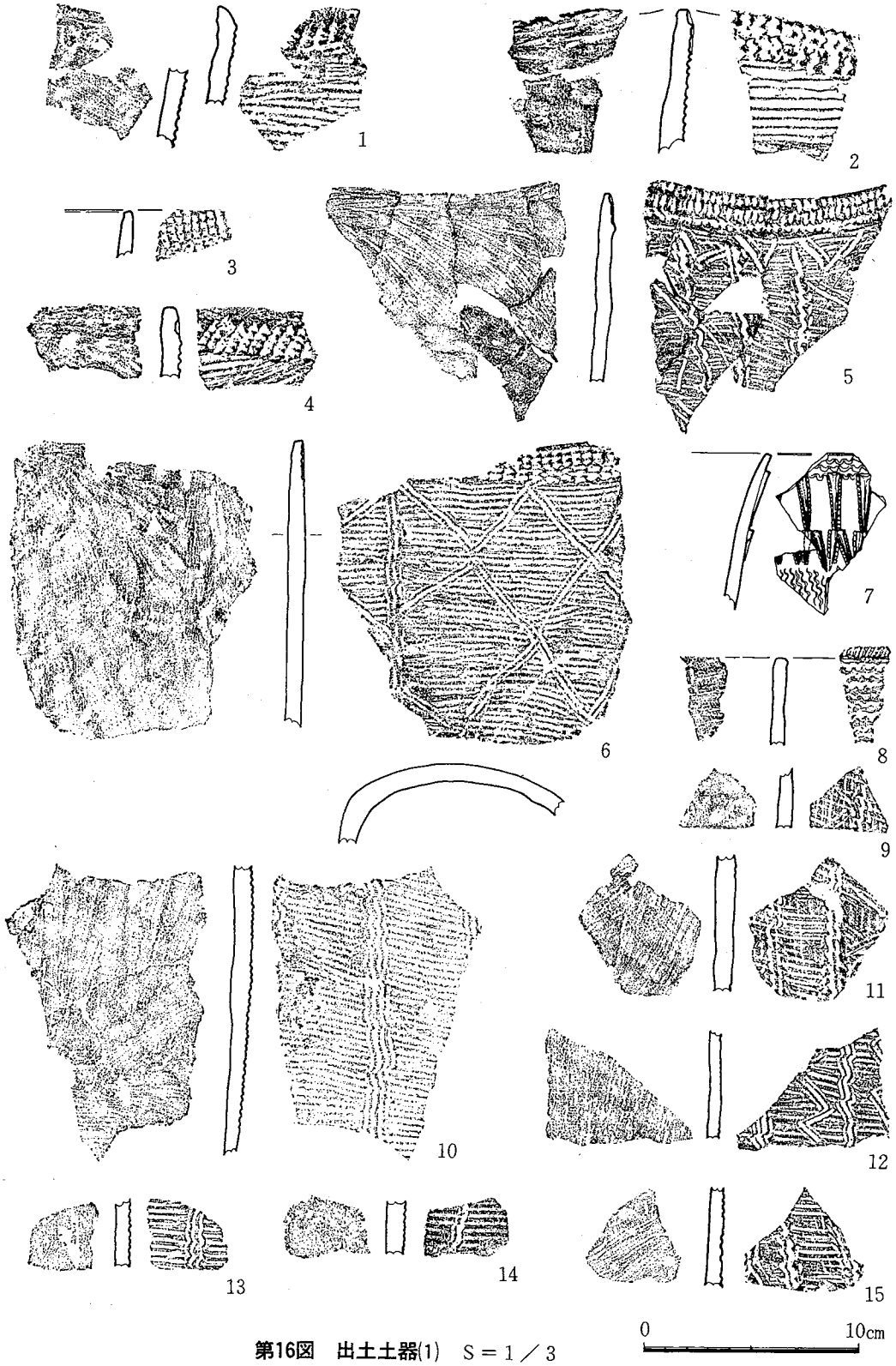
貝殻文円筒形土器（第16図１～第17図20）

第16図１～４は口縁上端部に縦位ないし斜位の貝殻腹縁刺突を横位に連続的に施すもので、小片である３を除いて、この口縁部文様帯以下には横位の二枚貝腹縁による条痕が認められる。１は、幅１㎝程の原体によって上位から下位へと二段の刺突列が施されたもので、口縁部が若干波状を呈する可能性もある。２・４は口縁部に左下がりの斜位の貝殻腹縁刺突を連続的に横位に施す土器で、胴部には横位ないしやや左下がりの貝殻条痕が認められる。２は口縁部外面が若干外方へ傾斜し内面には顕著なユビオサエ痕が認められるが、このため口縁部形態が若干内湾気味にみえる。３を除いて、内面には条痕並びにユビオサエ痕が著しい。

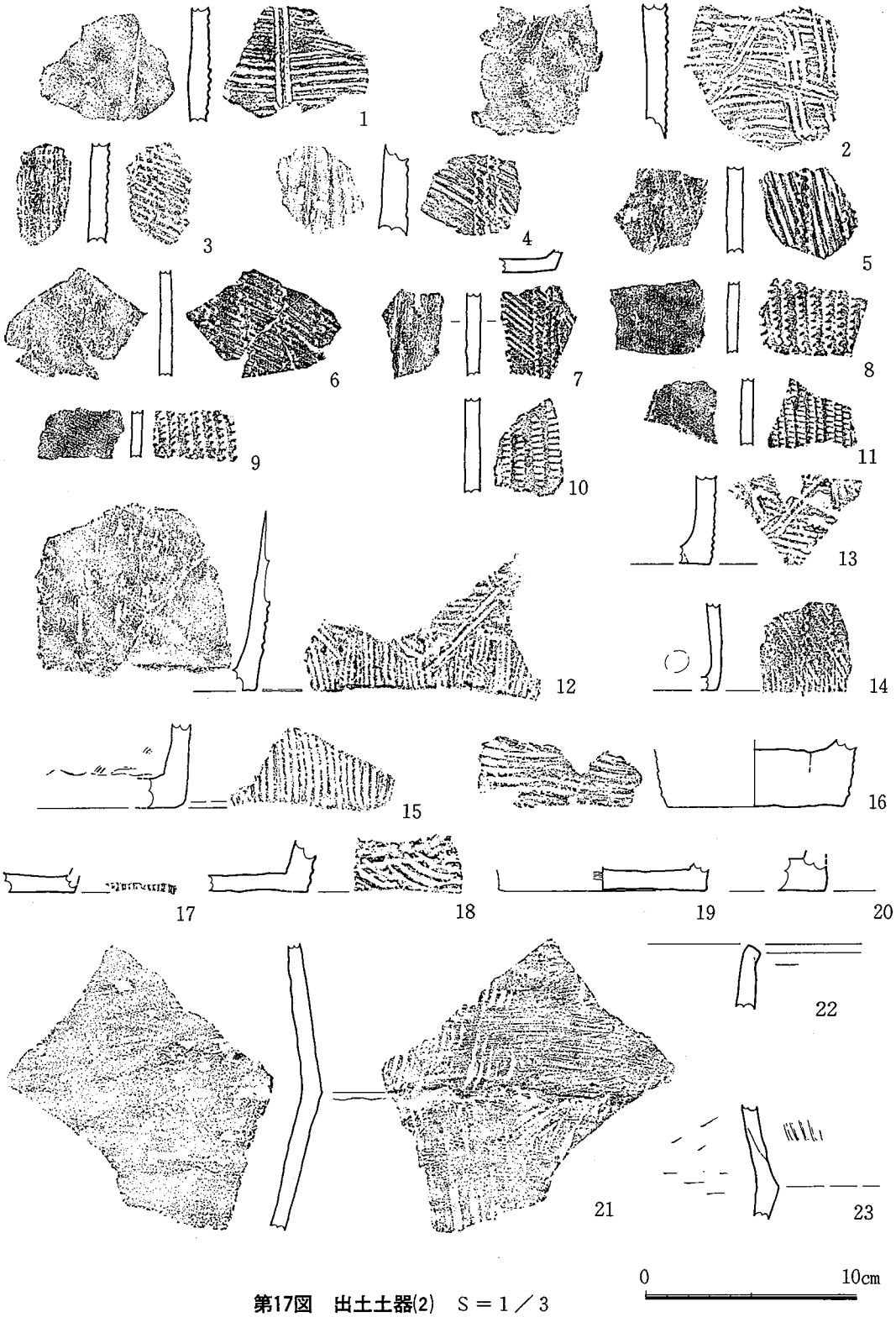
第16図５～第17図９は「前平式」ないし「榕ノ原タイプ」の範疇に含まれると考えられる土器群をまとめたものである。第16図５・６は口縁部に縦位の刺突列を施すもので、５には三段の縦位短沈線列が、６には二段の貝殻腹縁縦位刺突列が認められる。胴部文様も共にほぼ横走する貝殻腹縁による条痕に重ねて幅５㎝程の二枚貝腹縁原体による施文が行なわれるものであるが、５は口縁部文様帯直下に断続的に描かれた下向きの山形文の間から波状文を垂下させている。これに対して、６は口縁部文様帯直下に連続する山形文を配し、この下に頂点が接するように斜格子文を描いている。また、６は若干丸みを帯びた「角筒形」土器であるが、各面の境にはわずかに波状を呈する垂下線文が施されている。５・６共に内面にはケズリ痕、及びユビオサエ痕が明瞭に残る。７はやや外反する口縁部上端に横位の貝殻腹縁文が施された土器で、その直下には細身の「楔形突帯」が貼付されている。内面は横方向のケンマによって平滑に仕上げられており、焼成も良好である。８は口唇部に刻み目を、また口縁部外面には横位の貝殻腹縁刺突を多重に施した土器である。第16図９～第20図９には胴部片を一括して示している。これらは小片が多く文様構成等について詳細を知ることができないが、大きく分けて、横位の貝殻条痕に重ねて波状線文を施すもの（第16図９～15）、直線文を施すもの（第17図１・２）、貝殻腹縁刺突線文を施すもの（第17図３～７）、そしてナデ調整が行なわれた器面に縦位の貝殻腹縁刺突を密にほどこすもの（第17図８・９）といった４つのヴァリエーションが認められる。

第17図10・11は二枚貝腹縁「原体を器面に押しつけ、移動の際には密着度を弱くするか、一度器面から離すことをくり返すことによって文様を施」[3] している土器で、吉田式土器の胴部片であると考えられる。内面はナデ調整によって比較的丁寧に仕上げられている。

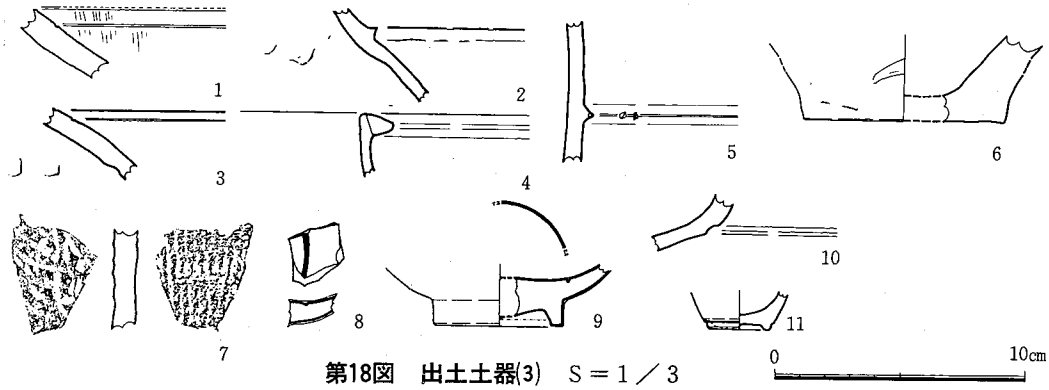
第17図12～20には、便宜的に貝殻文円筒形土器の底部片を一括して示している。12～14はわずかに知られる胴部文様から、前平式ないし「榕ノ原タイプ」の範疇に含まれると考えられるもので、内面はナデ調整によって比較的丁寧に仕上げられている。12・14の外面には密に施された縦位の短沈線が、また13の外面最下部には横位の貝殻条痕が認められる。なお、12は各片が若干丸みを帯びた角筒形土器の底部片である。15も角筒形を呈すると考えられる土器の底部片で、外面には縦位の沈線が密に施されている。内面はユビオサエ痕を認めることができるものの、ナデ調整によって比



第16図　出土土器(1)　S＝1／3



第17図　出土土器(2)　S＝1／3



第18図　出土土器(3)　S＝1／3

較的丁寧に仕上げられている。16は底部の器壁厚がかなり厚い土器で、外面には横位の貝殻条痕がみとめられる。内底面にはユビオサエの痕が著しい。17は内外面共に非常に平滑に仕上げられた土器で、器壁も他の土器に比べかなり薄く、外面には縦位の沈線が密に施されている。18は外面に弧状を呈する二枚貝条痕が認められる土器で、比較的薄い底部の外面にはケズリの痕跡が比較的明瞭に残存している。19はわずかに残る外面に横位の条痕を認めることのできる土器で、底部の器壁は比較的薄い。内底面にはケズリ及びユビオサエの痕跡が、また外底面においてはユビオサエの痕が比較的よく観察できる。20は接地面も含めて外面が平滑に仕上げられており、焼成も良好な土器である。現存部分については無文であり、また内面の仕上げは外面の丁寧さと比べてかなり雑である。

縄文時代後期・晩期土器（第17図21～23）

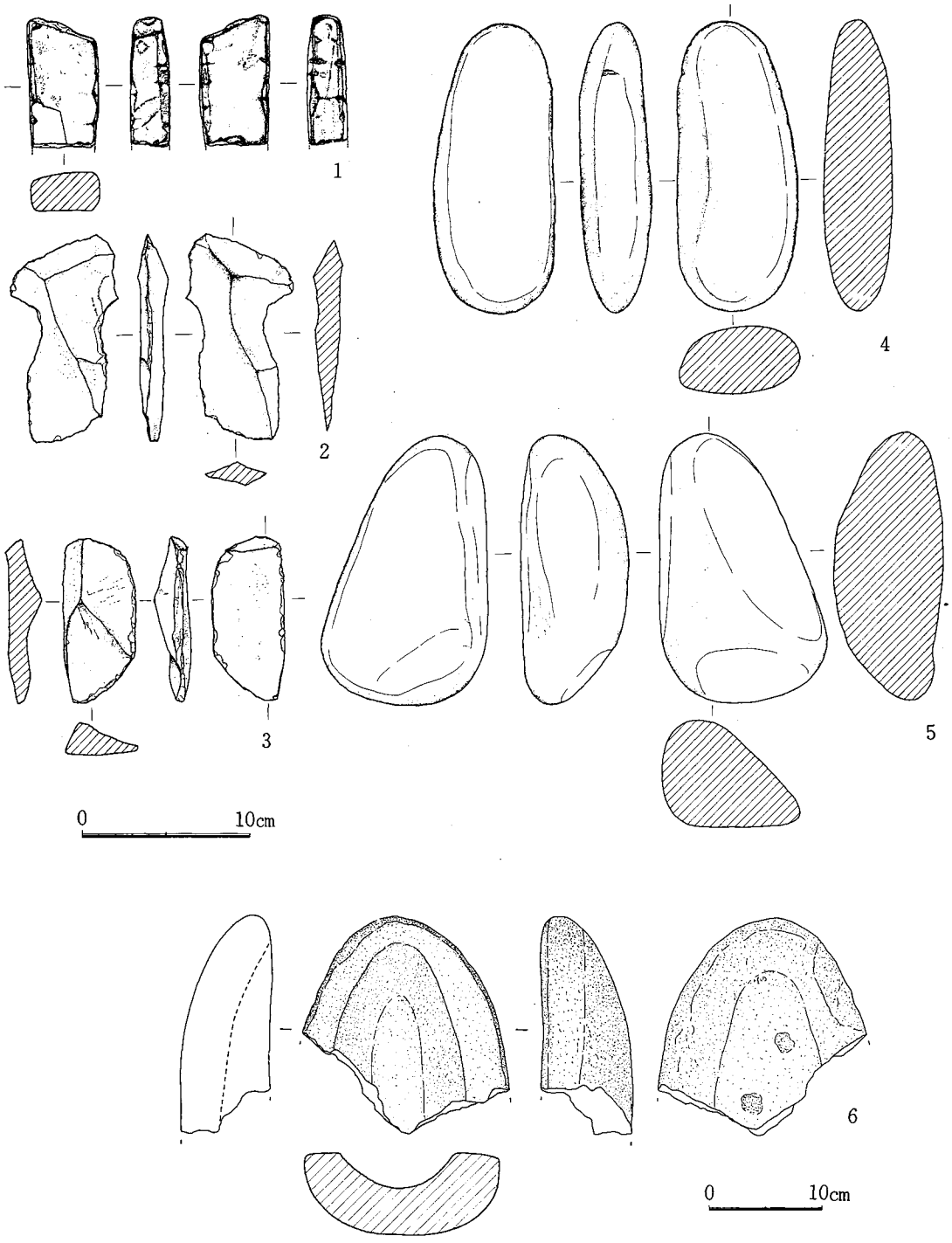
21はおそらく鉢形ないし浅鉢形を呈すると考えられる土器の胴部片で、屈曲部外面には粘土の接合痕が明瞭に認められる。外面にはユビオサエの痕跡や縦位の二枚貝条痕が観察されるが、屈曲部より上位においてはさらにこれらの調整の後に施されたと考えられる植物繊維束様の原体による擦過痕がみられる。22は器種等については不明であるが、おそらく鉢ないし深鉢の口縁部と考えられる小片である。23も鉢ないし深鉢と考えられる土器の胴部片である。屈曲部で若干肥厚し、外方へ張り出す。屈曲部より上部においてはナデ調整以前に施された縦位の二枚貝条痕が認められる。

弥生土器（第18図１～６）

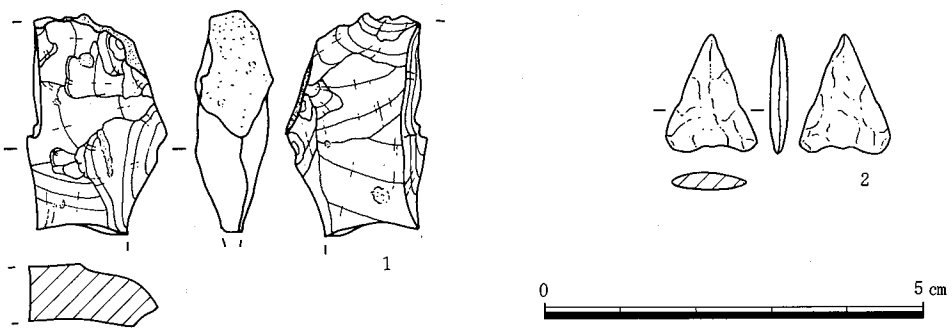
１～３は壺の肩部片である。１・３には二条の横走細線が施され、２には断面三角突帯が一条貼付されている。１は横走細線施文部付近に縦方向のケンマが施されているが、その際に細い帯状を呈するケンマされない部分を断続的に残しており、これによって文様効果を高めていると考えられる。１～３ともに外面は丁寧なケンマによって平滑に仕上げられている。４は小型の甕の口縁部片で、端部が外方へ張り出す。内外面共にナデ調整によって仕上げられている。５は壺胴部中位付近の破片と、また６は壺の底部片と考えられる破片である。５には刻み目を施した、断面三角形の小振りの突帯が一条貼付されている。

中近世の土器（第18図７～11）

７は大甕と考えられる須恵器の胴部片で、外面に平行叩き痕が、内面に同心円叩き痕が認められる。８・９は陶磁器碗の底部付近片である。８は高台直上部にあたるが、黒色の極微細粒を含む淡



第19図　出土石器(1)　1～5は1／4，6は1／6



第20図　出土石器(2)　S＝1／1

灰白色の磁胎にやや淡い緑色の釉薬がかかっている。9は内面見込み部から外面は高台の畳付部まで緑色の釉薬が施されており、内面には見込み部と体部との境に圏線がめぐっている。磁胎は濁った灰白色を呈し、やはり黒色の細粒を含む。10は瓦質の土器で、器形等は不明である。内外面ともナデ調整によって仕上げられており、屈曲部外面には幅広の沈線が一条めぐっている。11は小壺の底部片と考えられる陶磁器で、底面には削り出しの低い高台がみられる。内外面にやや濁った白色の釉薬が施されている。

（b）石器（第19・20図）

本調査区では、石鏃・磨石・石皿・剥片を8点出土している。第19図1の磨石と第20図2の石鏃以外はいずれもⅢ層から出土しており、同層から伴出する土器型式からほぼ縄文時代早期に該当するものと思われる。

磨石（第19図1・4・5）

第19図1はいわゆる石鹸石様の形態を呈している。正面形は台形を呈し、表裏側面はいずれも平坦である。角は部分的に面を持ち、さらにわずかにくぼんだ紐ずれ状を呈した部分を2カ所確認できる。時期については、Ⅱ層より上から出土しているが、その形態から、ほぼ縄文時代早期に該当すると考えられる。第19図4は上端と下端にわずかに敲打痕が認められる。また、表裏面中央部は平坦面を形成し、一部は側面に向かって擦っている。第19図5は断面三角形を呈する。表面は丁寧に擦っていて、それぞれ平坦面を形成している。上部が部分的に赤色に変色しており、火を受けた可能性がある。

石皿（第19図6）

半分欠損しているが、正面形は縦長の楕円形を呈していたものと推定できる。中央部は断面レンズ状にくぼんでおり、その面は非常に滑らかである。欠損部は赤色に変色しており、火を受けた可能性がある。

剥片（第19図2・3・第20図1）

第19図2・3は縦長の剥片を利用したものである。2は縁辺部に細かい剥離がみられるが、摩耗状につぶれている。3は、両側面中央部に二次加工が施されており、T字状を呈する。二次加工は

片側からのみ施されており、縁辺部は鋭い。

第20図１も縦長の剥片を利用しているが、他の２つに比べて小形で、自然面を残す。

石鏃（第20図２）

下辺がわずかにくぼんだ、二等辺三角形状を呈する。縁辺部に二次加工が施されているが、全体が摩耗しておりその剥離面は不明瞭である。刃部も鈍い。石材は白色を呈する瑪瑙で、本調査区近辺では、鹿児島市鈴山を産地として挙げられる。

７．まとめ

今回の発掘調査地点は、鹿児島大学宇宿団地の北東部にあたり、東側は紫原台地との間に形成された谷へとつづく。旧地形も北側及び東側へ傾斜しており、平坦面は調査区の南西部を中心に広がっていた。調査区域内はほぼこの自然地形の傾斜方向に合わせてかなり深く削平されており、「アカホヤ」火山灰層下の縄文時代早期の遺物包含層は調査区の北西隅と南東隅とを結ぶ対角線の北東側を既に失っていた。

本発掘調査は、平成元年１月に実施した試掘調査の結果を受けて行なうこととなったものである。試掘調査時に縄文時代早期の遺物包含層の存在が確認されていたが、今回の調査によってさらにアカホヤ火山灰層上面においても上部をかなり削平されながらも遺構が残存していること、「薩摩」火山灰層下のいわゆる「チョコ層」から石鏃が一点ではあるが出土し、本層にも遺物が包含されていることが確認された。これは鹿児島大学宇宿団地構内で検出された最古の遺物であり、本遺跡の上限をさらにさかのぼらせるものであった。

今回の調査においては、各層上面で検出された遺構の数は決して多いものではなかった。これは調査区の旧地形が傾斜面にあたることと関連するものと考えられ、本調査区出土の遺物は、東側に存在したであろう平坦地からの流れ込みである可能性が高い。特に、縄文時代早期については、出土した遺物も多く、他の同時期の遺跡の様相を考えた場合、鹿児島大学宇宿団地構内には該期の集落址が存在していることも予想される。

註

１）「第Ⅱ部　第３章　鹿児島大学宇宿団地Ｅ－８区における試掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅳ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1989年

２）「第Ⅱ部　第３章　鹿児島大学宇宿団地Ｉ－８区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1988年

３）本田道輝「縄文時代」『鹿児島考古20号』鹿児島県考古学会　1986年

表2　土器観察表

図番号	区	層	出土No.	器種	色調	胎土	調整・施文	備考
16－1	g－⑧	III	135	深鉢	外面：黒灰色．内面：灰褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，S，W．	口縁部：外面斜位の連続貝殻刺突文，胴部外面：横方向の貝殻条痕．内面：(ケズリ) のちナデ．	
16－2	f－②	IIIb	78	深鉢	外面：黒褐色．内面：明褐色．	砂粒・細砂粒を多く含む．S，W．	口唇部：ナデ．外面：上部　縦位の貝殻腹縁による刺突，下部　横位の貝殻条痕．内面：上部条痕のちナデ，下部：ナデ．	
16－3	e－⑧	IIIa	82	深鉢	暗灰褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：縦位の貝殻腹縁による水平方向の押し引き文．内面：ナデ．	
16－4	f－③	II	－	深鉢	外面：黒灰色．内面：明褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，S，W．	口唇部：ナデ．外面上部：斜位の貝殻腹縁による刺突．外面下部：斜位の貝殻条痕．内面：条痕のちナデ．	
16－5	g－⑨	IIIa	6	深鉢	外面：暗褐色～明褐色．内面：明褐色～褐色，一部黒灰色．	砂粒・細砂粒を含む．K，R，S，W．	口唇部：ナデ．口縁部外面：3列の刺突文．外面：刺突文より下部　貝殻条痕文．刺突文直下から波状の貝殻腹縁線（3㎜）とその両わきの刺突文を一単位として縦方向に一定の間隔をおいて施す，そのあいだの刺突文の直下に貝殻腹縁線をV字状に施す．内面：条痕のちナデ．	
16－6	g－②	IIIb	107	深鉢	外面：上部暗褐色，下部　褐色．内面：褐色～灰褐色．	粗砂粒～細砂粒を多く含む．K，R，S，W．	口縁端部：ナデ．口縁部外面：縦2列の押し引き気味の連続刺突文．胴部外面：横方向の貝殻条痕文．貝殻腹縁線（5㎜）による鋸歯文を横方向に巡らし，それを縦方向に繰り返すことによって，菱形の文様を構成する．外面屈曲部：縦方向の貝殻腹縁線（5㎜）．内面：ケズリのちナデ．	
16－7	e－⑨	IIIa	116	深鉢	外面：黒色(スス？)，一部暗灰褐色．内面：茶褐色～暗褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，W．	口縁部上面：ミガキ，細沈線．口縁部外面：縦2列の水平方向の貝殻刺突線．胴部外面：2段の楔形突帯．内面：横方向のミガキ．	
16－8	g－⑧	III	23	深鉢	外面：黒灰色．内面：明褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，R，W．	口縁部上面：連続刺突文，外面：縦方向に連続した水平方向の貝殻刺突線．内面：上部　ナデ．	
16－9	f－⑨	IIIa	17	深鉢	外面：黒褐色．内面：茶褐色．	細砂粒を含む．K，S，R，W．	外面：横位の貝殻条痕のち縦方向に連続した刺突文．内面：ケズリのちナデ．	
16－10	北　壁	－	2	深鉢	外面：黒灰色～灰褐色．内面：上部茶褐色，下部暗褐色．	粗砂粒・砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕のち一定の間隔をおいた縦位の波状貝殻腹縁線．内面：上部　斜位のケズリ．	
16－11	f－⑨	P49埋土中	－	深鉢	外面：暗灰褐色．内面：茶褐色～暗褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕を施したのち2個を一単位とした刺突文を縦に連続的に施す．その両脇に刺突文と対応して細い刺突を観察できる．内面：ケズリのちナデ．	
16－12	f－⑨	III	7	深鉢	外面：黒灰色．内面：暗褐色．	砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕のち縦位の波状と鋸歯状の貝殻腹縁線を交互に施す．内面：縦位のケズリのちナデ．	
16－13	盛土中	－	202	深鉢	外面：明黄灰色．内面：明灰色～明黄灰色．	砂粒・細砂粒を含む．K，W．	外面：横方向の貝殻条痕，3列一単位の貝殻腹縁線を縦に施す．内面：(ケズリ？) のちナデ．	
16－14	f－③	IIIb	119	深鉢	外面：茶褐色．内面：茶褐色～暗灰褐色．	砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕のち波状の貝殻腹縁線（5㎜）を縦方向に施す．内面：ナデ．	
16－15	f－⑨	IIIa	4	深鉢	外面：暗灰褐色．内面：茶褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，S，W．	外面：横位の貝殻条痕のち縦位の2条の一単位とした貝殻刺突線．内面：ケズリのちナデ．	
17－1	e－⑧	IIIb	80	深鉢	外面：暗褐色．内面：黒褐色．	砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕を施したのち貝殻腹縁線（7㎜）を縦に施す。内面：ケズリのちナデ．	
17－2	d－⑧	盛土	－	深鉢	外面：明灰色，一部明褐色．内面：明黄灰色．	砂粒を含む，K，S，W．	外面：横方向の貝殻条痕のち縦2条，斜位1条，横1条の貝殻腹縁線（10㎜）．内面：ナデ？．	
17－3	e－③	IIIa	81	深鉢	外面：茶褐色．内面：黒色．	砂粒・細砂粒を含む．K，W．	外面：横位の貝殻条痕のち縦位の2条一単位の貝殻刺突線を一定の間隔をあけて施す．内面：ナデ？．	
17－4	－	盛土	－	深鉢	茶褐色．	砂粒・細砂粒を含む．K，S，W．	外面：貝殻条痕のちナデ，縦位の3条を一単位とした貝殻刺突線．内面：条痕のちナデ．	
17－5	e－⑧	盛土	－	深鉢	外面：明灰褐色．内面：明褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：斜位の貝殻条痕，縦位の2列を一単位とした貝殻刺突線．内面：ナデ？．	
17－6	e－⑧	IIIb	93	深鉢	暗灰褐色．	砂粒を含む，K，S，W．	外面：貝殻条痕のちナデ，縦位の2条を一単位とした貝殻刺突線．内面：ケズリのちナデ．	
17－7	e－⑦	盛土	－	深鉢	外面：黒灰色～明褐色．内面：暗灰褐色．	砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：斜位の貝殻条痕，縦位の3条を一単位とした貝殻刺突線．内面：ナデ？．	
17－8	f－⑦	IIIb	49	深鉢	外面：暗灰褐色．内面：褐色～灰褐色．	粗砂粒・砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：貝殻腹縁による押し引き文．内面：ナデ．	
17－9	f－⑦	IIIb	48	深鉢	暗灰褐色．	細砂粒を含む．K，S，W．	外面：貝殻腹縁による連続押し引き文．内面：ナデ．	
17－10	－	盛土	－	深鉢	外面：橙褐色，内面：明灰褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：貝殻腹縁による押し引き文．内面：ナデ．	
17－11	e－①	IIIa	72	深鉢	外面：灰褐色．内面：茶褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：貝殻腹縁による押し引き文．内面：ナデ．	
17－12	f－③	IIIc	117	深鉢	外面：灰褐色～灰橙色．内面：黒褐色．	砂粒を多く含む．K，S，U，W．	外面：立ち上がり部　横方向の貝殻条痕のち縦位の貝殻腹縁線，上部　菱形の貝殻腹縁線．	

図番号	区	層	出土No.	器種	色調	胎土	調整・施文	備考
17－13	d－⑧	IIIa	128	深鉢	外面：明黄灰色．内面：黄褐色．	細砂粒を含む．S，W．	外面：横方向の貝殻条痕のち鋸歯状の貝殻腹縁線（5㎜），内面：ケズリ？のちナデ．	
17－14	g－①	IIIa	192	深鉢	外面：黄褐色．内面：黒灰色．	砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：斜位の貝殻条痕のち立ち上がり部約8㎜ 縦方向の貝殻条痕，胴部 2条一組の貝殻刺突線．内面：ナデ．	
17－15	f－⑧	II	139	深鉢	外面：明褐色．内面：灰褐色．底面：明灰褐色．	粗砂粒・砂粒を多く含む．K，S，W．	外面：縦方向の貝殻条痕．内面：条痕のちナデ，立ち上がり部 ユビオサエ．	角筒．
17－16	e－⑧	IIIa	84	深鉢	外面・底面：明灰褐色．底面中央部：白色，内面：茶褐色．	砂粒を多く含む．K，R，S，W．	外面：貝殻条痕．内面：あらいナデ．底面：ナデ．	底径(8.2)cm．底面に黄白色の細かい粉末状の付着物あり．
17－17	f－⑦	II上	－	深鉢	外面・底面：茶褐色．内面：明茶褐色～黒灰色．	砂粒を多く含む，K，R，S，W．	外面：縦位の貝殻条痕．内面：ナデ．	
17－18	g－②	IIIb	96	深鉢	外面：明灰褐色．内面：明褐色．底面：灰褐色．	砂粒を含む，K，R，S，W．	外面：斜位の貝殻条痕．内面：ナデ．底面：ケズリのちナデ．	内面：スス付着？．
17－19	北 壁	－	1	深鉢	外面：橙褐色．内面：褐色～明褐色．底面：灰褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：条痕？のちナデ．内面：あらいナデ．底面：あらいナデ？．	底径（9.8）cm
17－20	f－⑦	IIIb	57	深鉢	外面：灰褐色．内面・底面：茶褐色．	砂粒を含む，S，W．	外面・底面：丁寧なナデ．内面：ナデ．	
17－21	d－⑩	－	15	深鉢	外面：黒褐色，内面：茶褐色．	粗砂粒・砂粒を含む．K，S，R，W．	外面：縦方向の貝殻条痕のち横方向のあらいナデ．内面屈曲部付近：横方向のナデ．他：ナデ．	
17－22	f－③	盛土	－	深鉢	口唇部：明灰色．外面：黒色（スス？）．内面：明褐色．	砂粒を多く含む．K，S，R，W．	口唇部：ナデ．外面・内面：横方向のナデ．	
17－23	e－⑨	－	126	深鉢	暗灰褐色．	砂粒を多く含む，K，R，W．	外面：上部 条痕のち横方向のナデ，屈曲部付近 横方向のナデ．内面：（ケズリ）のナデ．	
18－1	d－⑧	盛土	－	壺	外面：橙褐色．内面：明灰褐色．	砂粒を含む．K，S，W．	外面：ハケ（6本／cm）のちミガキ，2条の沈線．内面：丁寧なナデ．	
18－2	－	盛土	－	壺	外面：明橙褐色～明茶褐色．内面：明橙褐色．	細砂粒を含む．K，S，R，W．	外面：突帯より上位 ヨコナデ，突帯より下位 ミガキ．内面：上部 ヨコナデ，下部 ナデ．	
18－3	－	盛土	－	壺	明茶褐色．	砂粒を多く含む．S，R，W．	外面：ミガキ．内面：ナデ．	
18－4	e－⑧	盛土	－	甕	外面：黒色．口縁部上面・内面：茶褐色．	砂粒・細砂粒を含む．S，R，W．	外面：ヨコナデ．内面：ナデ．	外面：スス付着．
18－5	－	盛土	－	壺？	橙褐色．	細砂粒を含む．K，S，W．	外面：突帯部付近 ヨコナデ．他：ナデ．	
18－6	d－⑧	sd4	39	壺？	外面：橙褐色～明褐色．内面：明褐色．底面：明灰褐色．	粗砂粒・砂粒を含む．K，S，R，W．	外面・底面：ナデ．内面：上部 工具による調整のちナデ．下部 ナデ．	
18－7	e－①	盛土	－	－	灰色．	砂粒を少し含む．W．	外面：格子状のタタキ．内面：同心円状のタタキ．	
18－8	d－⑧	盛土	－	椀	（釉調）透明釉，淡緑白色，貫入あらい．	白色，細砂粒を含む，W．	内面見込：片堀の刻線文．	
18－9	d－⑩	盛土	－	椀	（釉調）透明釉，明青灰色．	明灰白色，細砂粒をわずかに含む．	内面見込～立ち上がり部分：弧状の刻線文．高台見込部分：無釉．	底径（5.2）cm
18－10	d－⑩	P8埋土中	－	－	外面：黒灰色．内面：灰色．	細砂粒を含む．S，R，W．	外面：ナデ．内面：ヨコナデ．	
18－11	e－①	盛土	－	－	（釉調）外面：不透明釉，灰白色．内面：不透明釉，明灰色．	細砂粒をふくむ．R，W．	外面底部～内面見込：無釉．	底径（1.7）cm

凡 例

胎土：K－カクセン石，R－赤色粒，S－石英，U－金雲母，W－白色粒．
　　砂粒の大きさを［粗砂粒・砂粒・細砂粒・微細な砂粒］の4段階で示した．
法量：（ ）付きは復元したもの．

表3　石器計測表

図番号	器種	出土区・層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
19－1	磨石	e－⑨・sd17	7.7	5.1	2.5	141	細粒砂岩	
19－2	剝片	e－⑧・Ⅲb	12.2	6.3	1.85	85	安山岩	s－13
19－3	剝片	g－②・Ⅲb	9.7	4.2	2.15	78	安山岩	s－18
19－4	磨石	g－②・Ⅲc	17.1	7.1	4.0	750	砂岩	s－19
19－5	磨石	g－⑧・Ⅲb	15.9	8.85	6.4	1150	砂岩	s－14
19－6	石皿	e－①・Ⅲb	19.3＋α	18.4	7.4	2420	カコウ岩質粗粒砂岩	s－5
20－1	剝片	f－⑩・Ⅲa	1.6	1.3	0.25	5.385	黒曜石	
20－2	石鏃	d－⑩・Ⅴ	3.0	1.85	0.9	0.417	メノウ	

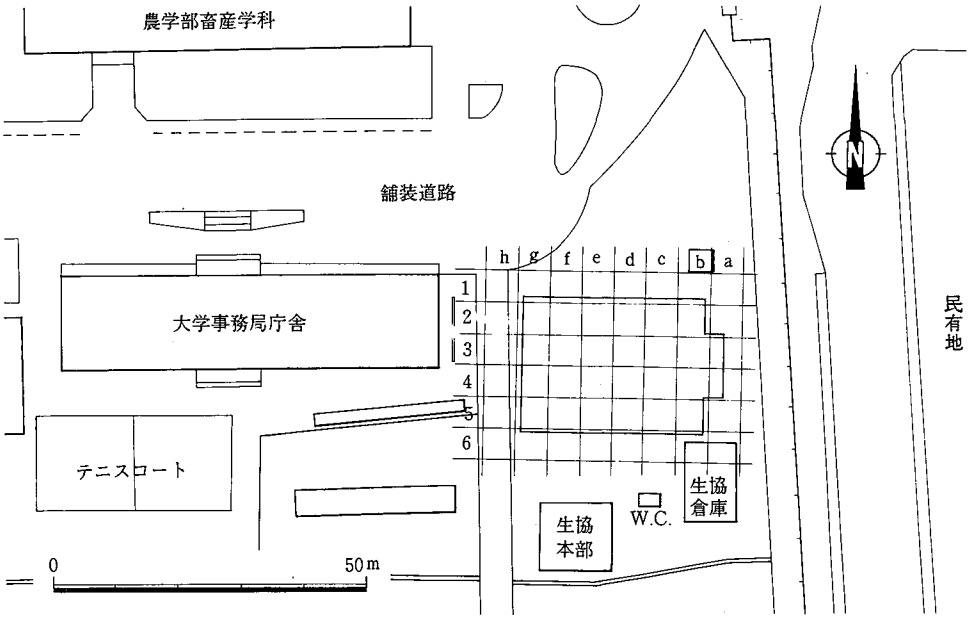
第３章　鹿児島大学郡元団地Ｆ－３・４区（大学院連合農学研究科校舎建設予定地）における発掘調査報告

１．調査に至る経過及び調査体制

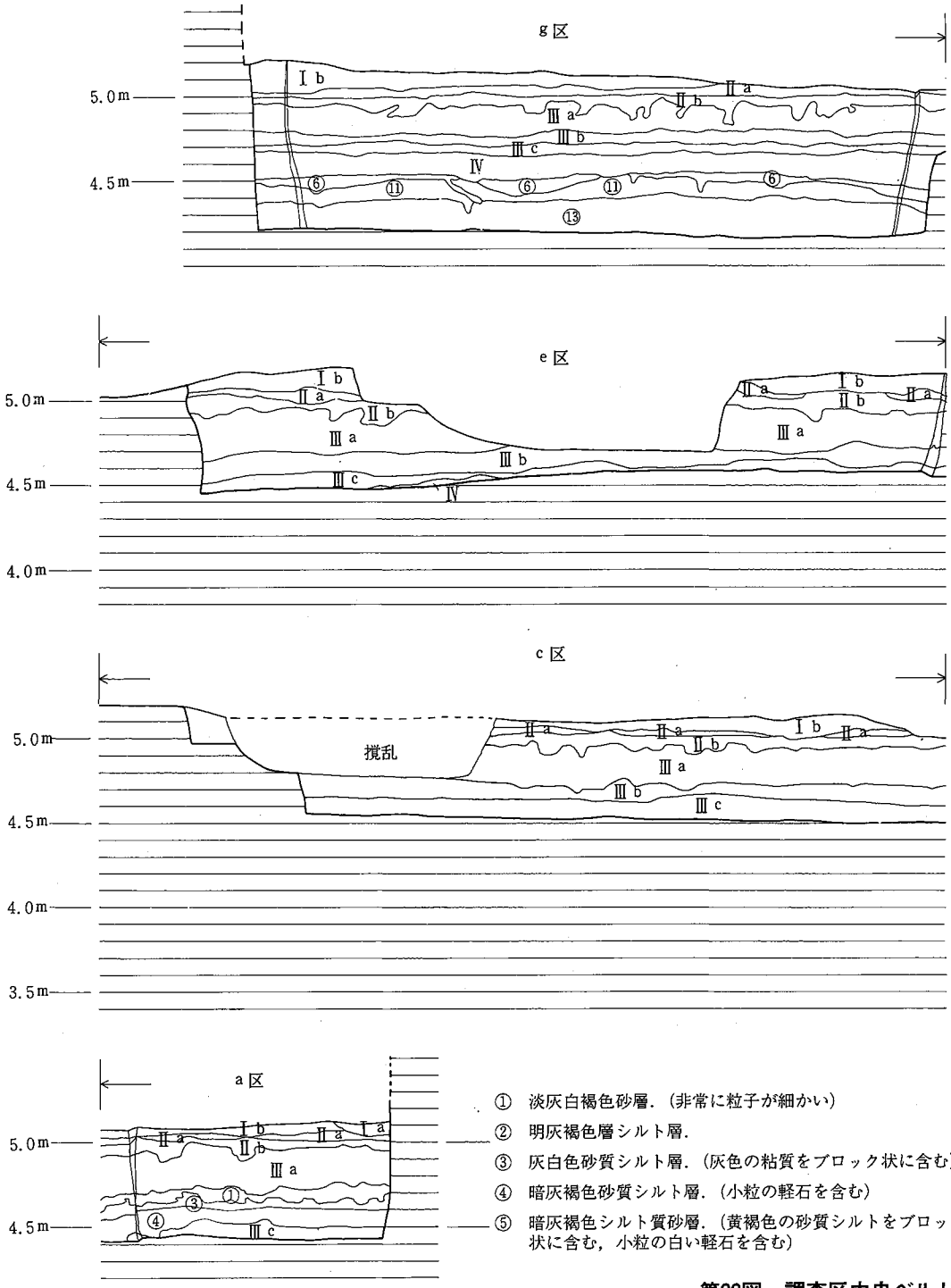
鹿児島大学では、大学院連合農学研究科校舎の建設が計画された。建設予定地は大学本部棟東側に位置するが、本地域を含む鹿児島大学郡元団地一帯は古墳時代の集落址や中近世の水田址を中心とした複合遺跡として著名である。このため、何らかの開発工事が計画された際には常に埋蔵文化財に対する配慮が必要とされおり、今回の建設予定地においても事前の埋蔵文化財発掘調査が実施されることとなった。

調査は平成元年10月２日から12月18日まで、下記の体制で行なった。

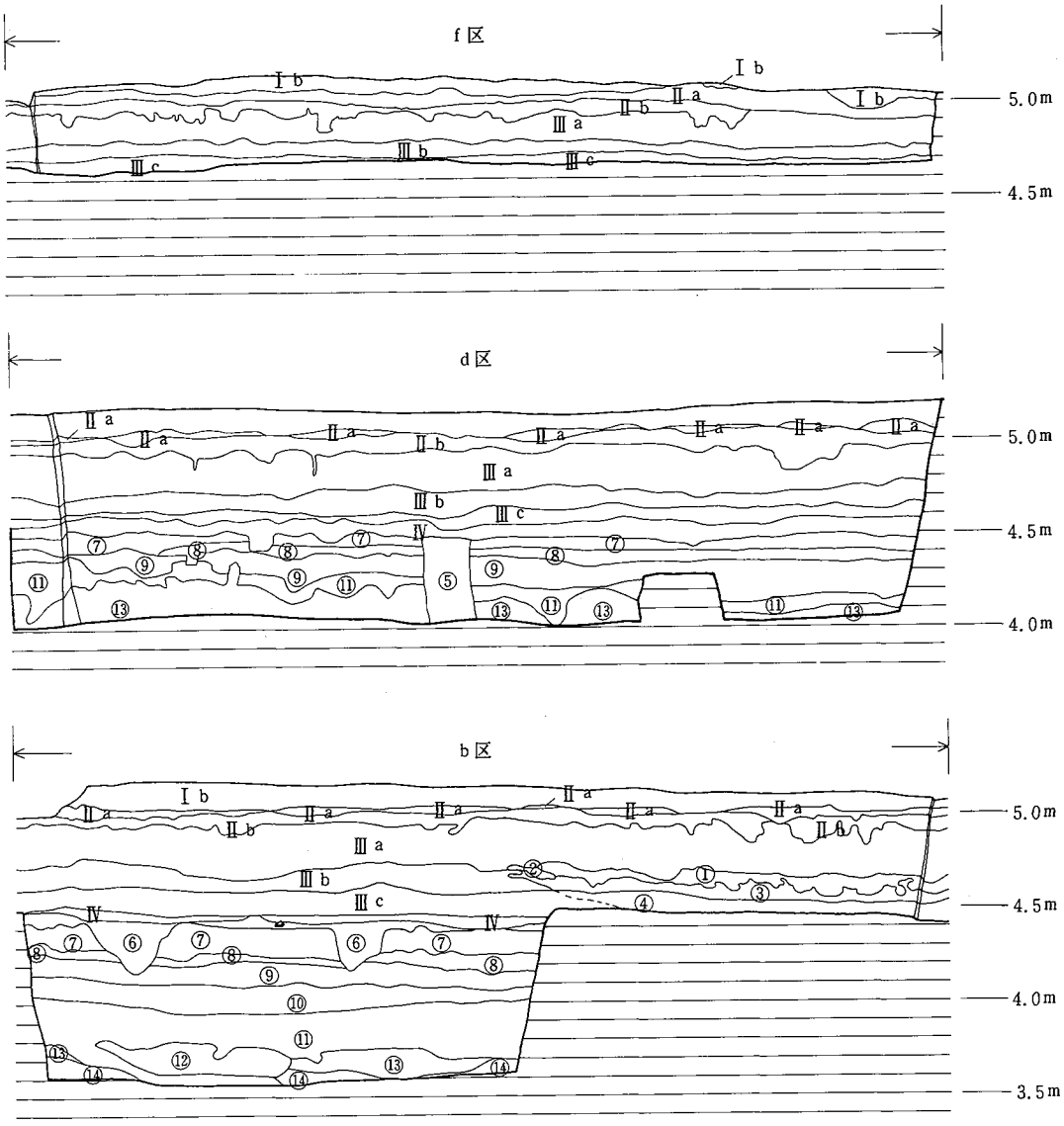
調査主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　上　村　俊　雄



第21図　調査地点位置図　（１／1,200）



第22図　調査区中央ベルト



0　　2 m

⑥　黄白色砂質シルト層．（ただし上部は明黄褐色）

⑦　暗茶褐色砂質シルト層．（小粒の白色の軽石を含む）

⑧　暗褐色砂質シルト層．（白色の軽石を含む）

⑨　暗灰褐色シルト質砂層．（白色の軽石を多く含む）

⑩　黒褐色シルト質砂層．（砂子があらい，白色の軽石を多く含む）

⑪　黒色砂混じりのシルト層．（茶褐色のシルト質砂をブロック状に含む）

⑫　明灰白色砂層．（砂粒があらい，３～４cmの大の白色の軽石を含む）

⑬　黄白色粘質土層．

※Ⅰ～Ⅳは基本土層Ⅰ層～Ⅳ層に対応

南面壁土層図　（１／40）

調査担当　　鹿児島大学埋蔵文化財調査室
室長　上村俊雄
室員　松永幸男　砂田光紀　中村直子

調査作業員

石谷サチコ・岩戸エミ子・請園アキエ・請園チリ・金子千穂枝・狩集エミ子・坂口ミエ子・寺光ミツコ・諏訪田フサエ・東條フミ・名越ヒデ子・西村チエ子・福永花江・野下チリ子・野下萬里子・野下ヨシエ・野下ヨブ子・前田スガ・増満ミエ子・盛満アイ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子

2．調査の経過

調査にあたってはまず重機によって上土の除去を行なうこととしたが、掘削可能な深さを知るため調査対象地の四隅に一片２ｍの方形の小トレンチを設けた。この結果、現表土下約１ｍ程まで客土が存在することが判明したが、その際に調査区南西隅に設けた小トレンチにおいて土坑もしくは溝状遺構と思われる落込みの存在が確認され、この落込みの埋土にあたる部分から陶磁器底部片が出土している。

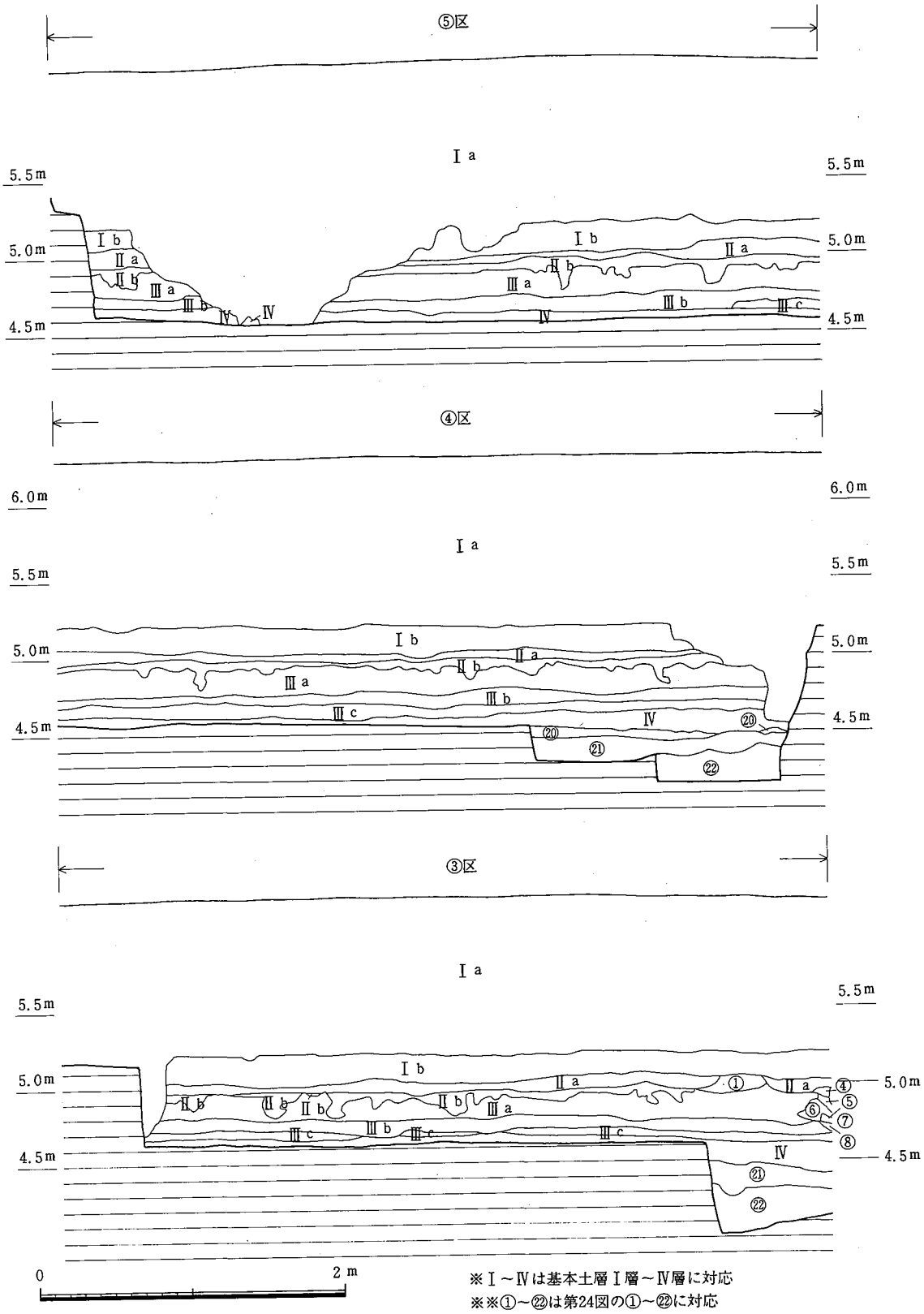
重機による上土除去後、一辺５ｍ四方のグリッドを東西に７列、南北６列にわたって設定し、東から西へ順にａ～ｇ区、北から南へ順に①～⑥区とした。土層観察用のベルトは③区南側、及びｃ区・ｅ区の西側に設定した。

調査の結果、畦畔及び畝を伴う水田址を２面検出した他、これらのさらに下層から方形の連続的に掘り込まれた土坑群等が検出された。

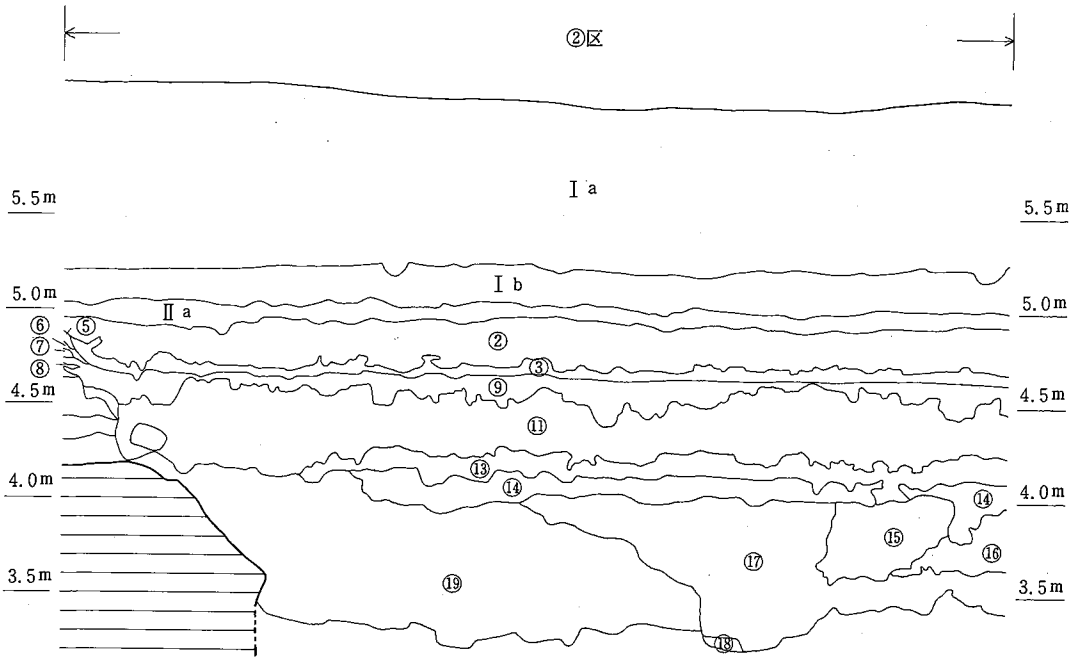
3．基本層序（第22～24図）

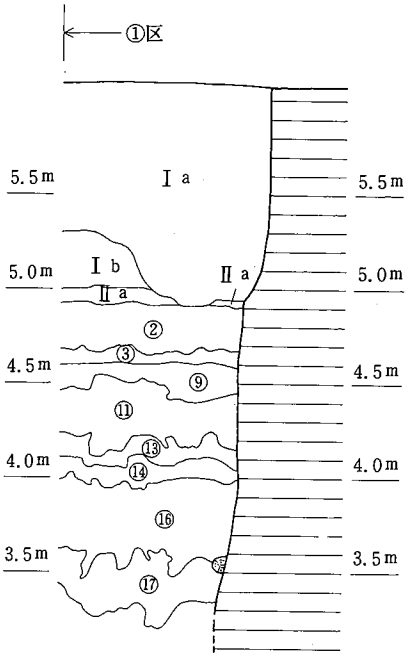
今回の調査においては、基本土層として16層を設定することとなった。各層は調査区北側の段落ち部を除いてほぼ全域に堆積している。まず、これらの基本土層を示すならば、以下のようである。

Ⅰａ層　造成に伴うものと考えられる客土
Ⅰｂ層　明灰褐色シルト質砂層（軽石小粒を含む、ガラス片も含まれる）
Ⅱａ層　明黄灰色極細砂層
Ⅱｂ層　上部に黄白色砂が、下部に灰褐色の粘質土が認められる層であるが、両土は各所で部分的に混在しており同一層として把握される。
Ⅲａ層　灰褐色シルト質砂層（赤褐色の鉄分を斑点状に含む、土質が漸移的に変化しており西側では粒子が若干粗くなり灰色味が強くなる）
Ⅲｂ層　灰色シルト質砂層（小粒の軽石及び鉄分を含む）
Ⅲｃ層　灰褐色シルト質砂層（小粒の軽石及び鉄分を含む）
Ⅳ　層　暗黄褐色を基調とした灰色混じりのシルト質砂層（小粒の軽石を含む）
Ⅴａ層　黄白色砂質シルト層（上部が明黄褐色味を帯びる）
Ⅴｂ層　暗茶褐色砂質シルト層（小粒の白色軽石を含む）
Ⅵ　層　暗褐色砂質シルト層（１.５㎝大の軽石を含む）



第23図　調査区西壁土層（1）　S＝1／40





西壁層位断面図

① 白～淡褐色細砂層.
② 淡褐白色砂層.（微細砂からなる．水性作用を受けたあとあり）
③ 灰色シルト質粘土層.（鉄分の浸透がみられる，ほぼ中位に灰色粘土の薄層を挟む）
④ 淡灰色粘土と淡褐色砂との混土.
⑤ Ⅲc層土.
⑥ 白～淡褐色細砂.（軽石小粒及び粗砂が混じる）
⑦ ⑤に同じ.
⑧ ⑥に同じ.
⑨ 灰色砂混じりシルト層.（鉄分の浸透がみられる）
⑩ 灰色粗砂混じりシルト層.
⑪ 濁青灰色粘土層.（微細砂ブロックを含む，鉄分の浸透がみられる）
⑫ ⑳・21層土
⑬ 淡褐白色砂層.（微細砂からなる，水性作用を受けた痕あり）
⑭ 濁灰色粗砂混じり粘土層.（軽石小粒を含む，鉄分の浸透がみられる）
⑮ 暗灰～灰色粘土層.
⑯ 暗灰色粘土層.（軽石礫散見）
⑰ 暗濁灰色粗砂混じりシルト層.（黒色泥炭層土をブロックとして含む，軽石小粒・礫を含む）
⑱ 黒色泥炭層ブロック.
㉙ 灰色シルト層と軽石礫混じりの粗砂層とが互層をなす層.（人為的に埋め戻された部分）
⑳ 暗褐色砂混じりシルト層.（軽石礫を多数含む，硬質）
㉑ 淡褐色粗砂層.（軽石礫を多数含む）
㉒ 明灰白色砂層.（砂粒あらい，軽石を含む）

0　2 m

※Ⅰ～Ⅳは基本土層Ⅰ層～Ⅳ層に対応

第24図　調査区西壁土層（2）　S＝1／40

Ⅶ　層　黒褐色シルト質砂層（軽石を多数含む）
Ⅷ　層　明灰白色粗砂層（３～４㎝大の軽石を含む）
Ⅸ　層　黄白色粘土層
Ⅹ　層　黒色粘土層
Ⅺ　層　黒褐色粘土層（植物繊維を多量に含む層で粘性があまり強くない泥炭質を呈する）

客土であるⅠａ層直下のⅠｂ層、及びⅡｂ層・Ⅲａ層は水田耕土であり、上面を削平されたⅠｂ層を除き、水田層上面から畦畔・畝・足跡等が検出されている。調査地点を含む鹿児島大学郡元キャンパスは明治42年に鹿児島高等農林学校が設立される以前は水田として利用されていた地域であるが、これらの水田遺構は出土遺物などから考えてこれをさほど遡らない時期に連続的に営まれた水田と思われる。なお、これらの水田耕土中には江戸時代～明治時代の遺物が包含されていたが、器物・建物等を象った型作りの土製品が多数出土していることが注意を引いた。

Ⅳ層は中世の遺物を中心とした遺物包含層で、白磁・青磁・黒色土器・土師器・石鍋等が出土している。また、Ⅵ層からは成川式と考えられる土器小片が数点出土している。Ⅴ層上面においては柱穴状ピットを数基検出したが、これらの間に何らかの規則的な配列は見出せなかった。

Ⅷ～Ⅺ層は、これらよりさらに下方に存在する砂層とともに、鹿児島大学郡元キャンパス内各地点において広く認められる層であるが、現在までのところ遺物の出土はみられない。後述の「土取り穴」の可能性も考えられる方形土坑群の多くはⅨ・Ⅹ層を掘り抜き、Ⅺ層中に下底部を持つ。Ⅸ・Ⅹ層部においては外方へ拡張している土坑もみられ、上記の想定が妥当なものであるならば、両層土が何らかの用途に供された可能性が考えられる。

４．遺構

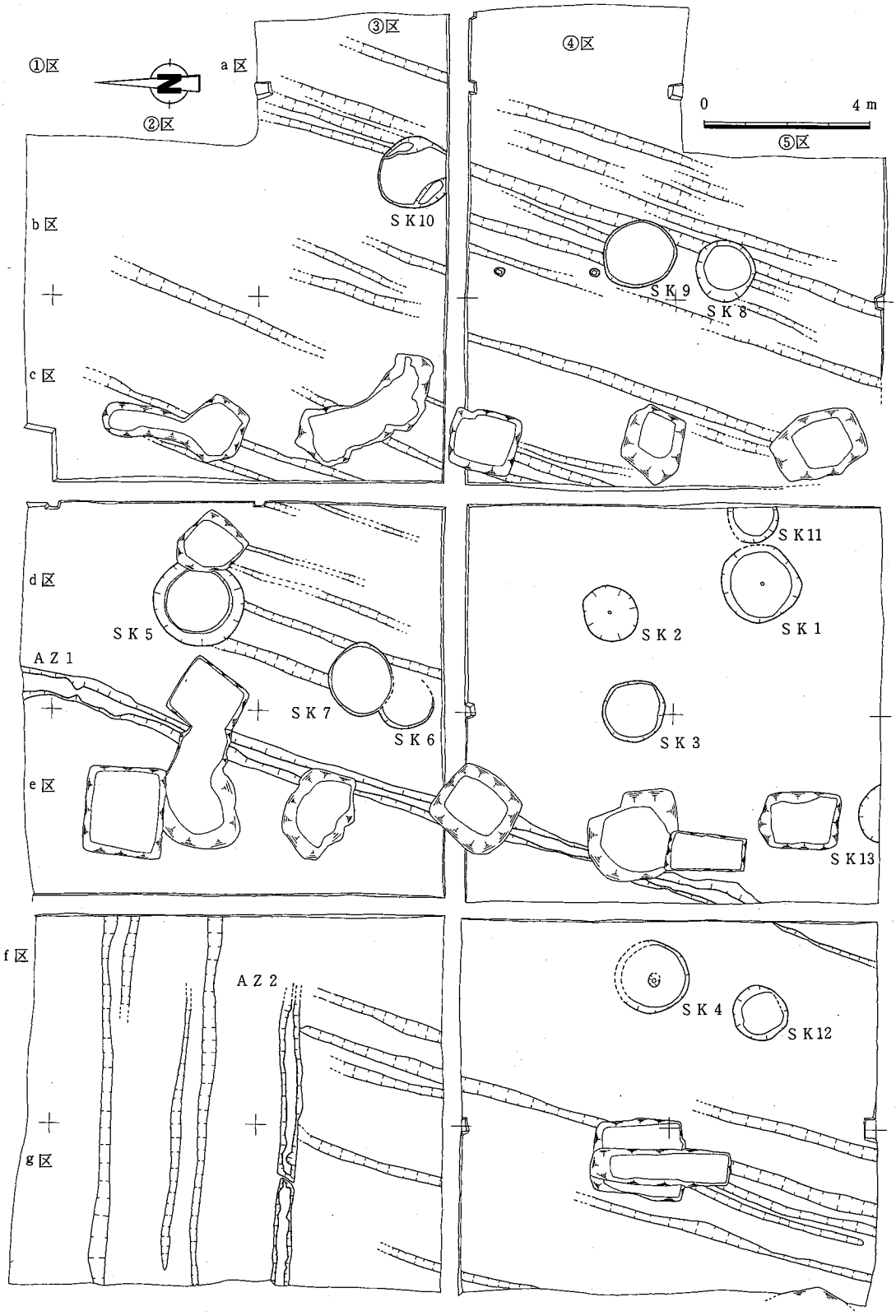
今回の調査においては、Ⅱｂ層・Ⅲａ層・Ⅲｃ層・Ⅳ層・Ⅴ層上面から、それぞれ各種の遺構が検出されている。ここでは各検出面ごとに遺構の説明を行なっていく。

（ａ）Ⅱｂ層上面検出遺構（第25図）

今回の調査では、Ⅱｂ層上面において水田址、及びこれと関連して機能した可能性が考えられる円形の掘り込み13基が検出されている。以下、各遺構について順に説明を行う。

水田遺構（第25図）

本水田遺構は基本土層Ⅱｂ層を耕土とし、調査区全域に広がっている。基本土層Ⅱｂ層土は灰褐色粘質土を基調とするが、黄白色砂がブロック状に含まれたり、両土が混土状を呈する部分がみられたりする。畦畔はｄ－①区からｆ－⑤区にかけてほぼ南北方向に設置されたもの（以下、ＡＺ１とする）に、ｆ・ｇ－③区を東西方向に延びるもの(以下、ＡＺ２とする)がほぼ直角に接続するようであり、「Ｔ」字形に近い配置をとる。ＡＺ１は、その横断面形が台形を呈し、比較的残存状況のよい部分で下場幅約50～60㎝、上場幅約20～30㎝、高さ約10～20㎝を計る。また、ＡＺ２は断面が低平な「カマボコ」形を呈し、下場幅約40～50㎝、上場幅20～30㎝を計る。なお、ＡＺ２の北側には、これに接してⅡａ層土を埋土とするごく浅い幅15㎝程の横断面「Ｕ」字形の溝状の落込みが並走し



第25図　Ⅱb層上面検出遺構　（1／150）

ていることが確認されている。これらＡＺ1・ＡＺ２によって調査区内の水田は３面に区分されるが、各水田面において数条の畝が検出されている。畝の幅は約15㎝で、畝間の間隔は約10～20㎝を計る。畝の走向はいずれかの畦畔に平行しており、ＡＺ２の北側の畝がこれに平行する以外は全てＡＺ1に平行する。ＡＺ２の中央部やや西よりには水口と思われる不連続部分が認められるが、これが実際に水口として利用されていたものであるならば、ＡＺ２を挟んで北側の方が南側よりも標高が低いことから、南側からこれらの水田に取水が行われたことが想定される。

円形掘り込み遺構（第26･27図）

基本土層Ⅱａ層を掘り下げ、水田耕土であるⅡｂ層の上面を検出した際に、調査区中央部から東半部を中心に計13基の円形掘り込みが検出された。これらは埋土、断面形、及び底面中央部のピット状柱穴の有無等から２～３タイプに分類することが可能であるが、ここではとりあえず検出順に各遺構について説明を行う。

・ＳＫ１（第26図）

直径約1.8m、検出面からの深度８～10㎝を計り、中央部には直径4.5㎝の柱穴状ピットがみられる。このピットはほぼ鉛直方向に約20㎝の深さに達しており、その先端部は若干細くなっている。遺構の形状は底面がなだらかなレンズ状を呈し、側壁と底面との境は明瞭ではない。遺構の埋土は粒子の微細な濁灰褐色の細砂質シルトであるが、ピット部分に関しては密度の低い軟質の腐食土が認められる。同遺構中から底面に張り付くような状況で長辺７㎝、径２㎝程の棒状の炭化物を検出した。また、遺構周縁部に近い埋土中に用途不明の小鉄片を検出している。

・ＳＫ２（第26図）

直径約1.3～1.4mを計る若干不整な円形を呈する遺構で、検出面からの深度は６～９㎝である。底面中央部には深さ20㎝以上に達する径６㎝の柱穴状ピットがみられる。このピットもＳＫ１のそれと同様に、先端部に向かって径が小さくなる。遺構の底面は一部に凹凸がみられるもののほぼ平坦で、壁面との境界は比較的明瞭である。埋土は灰褐色細砂質シルトで、ピット部分には軟質の腐食土が認められた。

・ＳＫ３（第26図）

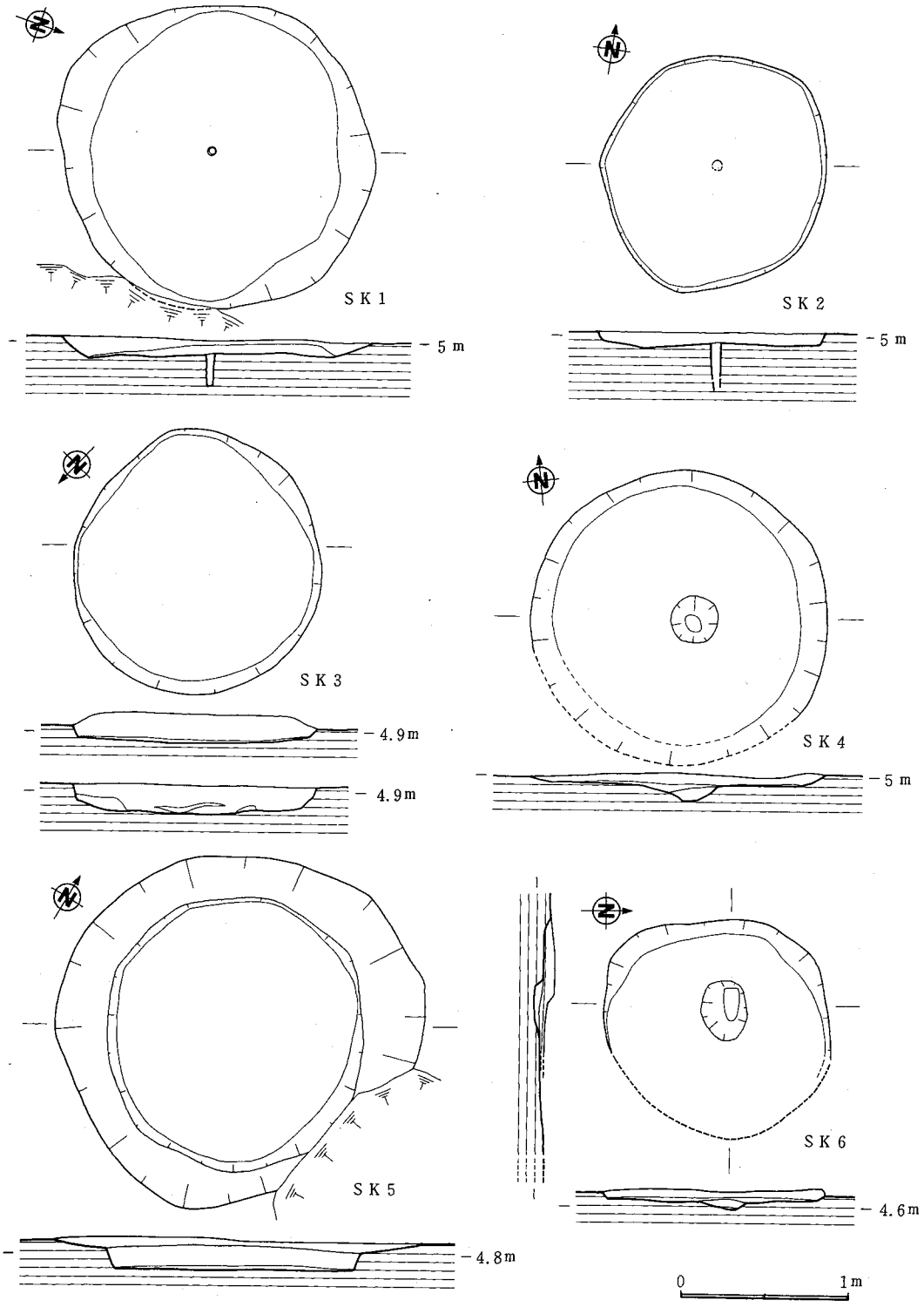
直径約1.5m、検出面からの深度10～20㎝を計るほぼ円形を呈する遺構である。底面はほぼ平坦で、ピット等は認められない。埋土は黄褐色もしくは茶褐色を帯びた濁灰褐色細砂質シルトからなるが、部分的に明灰色細砂質シルトがブロック状に含まれている。

・ＳＫ４（第26図）

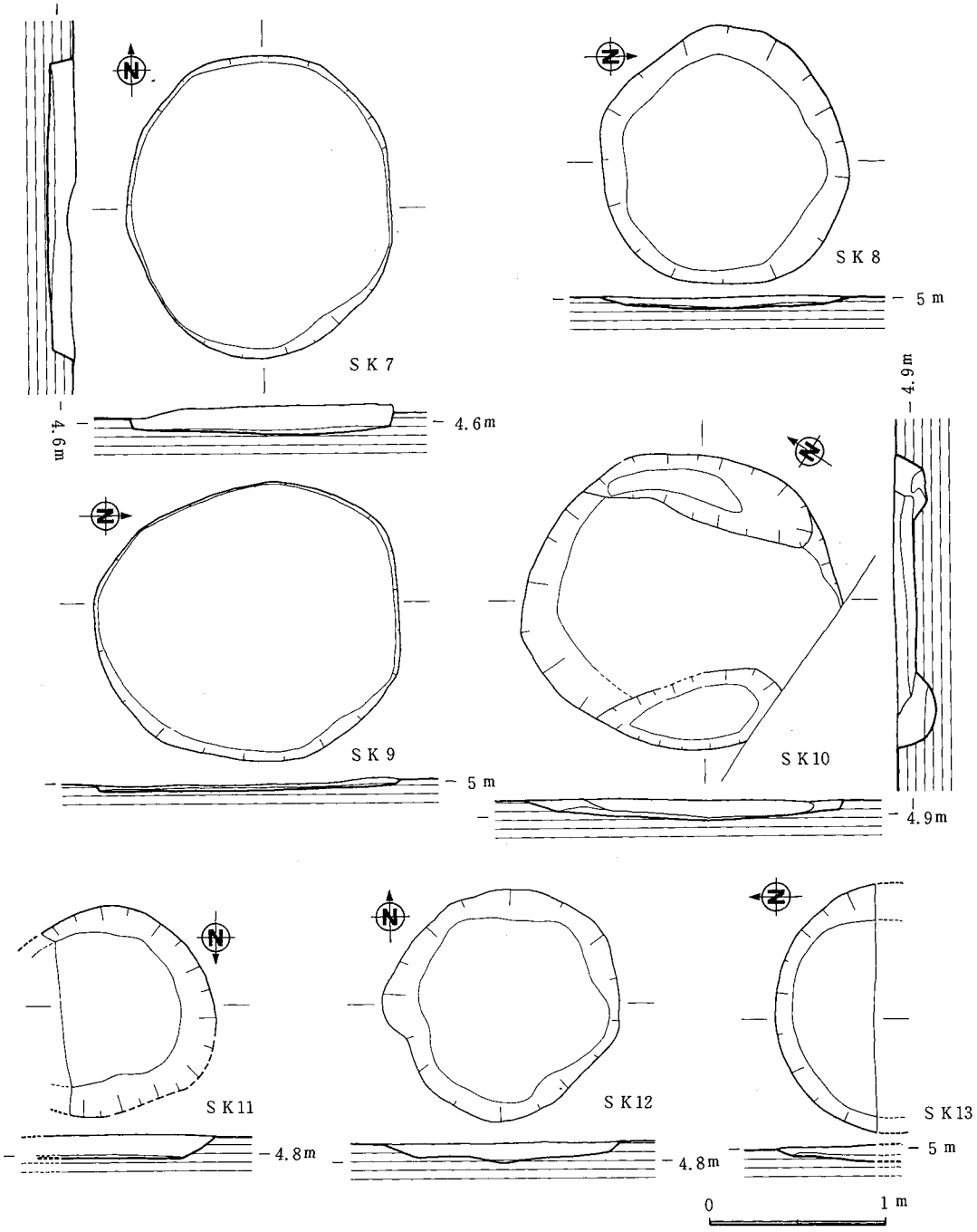
北東部を削平されているものの、直径約1.75mを計り、底面は凹レンズ状を呈する。底面中央部やや北西よりの部分に、直径28㎝、底部径約10㎝、深さ約７㎝程の円形の落込みがみられる。埋土は、濁灰褐色砂質シルトである。

・ＳＫ５（第26図）

本遺構は直径約2.1mの浅い皿状の掘り込みの中央部に重ねて、さらに直径約1.6mの円形掘り込みを行ったもので、この内側の掘り込みはほぼ垂直に掘り下げられており検出面下約20㎝に達している。東側を一部攪乱坑によって切られている。底面はほぼ平坦であり、ピット等の掘り込みは



第26図　Ⅱb層上面検出円形遺構（1）　S＝1／40



第27図　Ⅱb層上面検出円形遺構（2）　S＝1／40

みられない。

・ＳＫ６（第26図）

東半部を削平されたやや不整な円形遺構で、長径約1.35mを計る。周壁の立ち上がりは緩やかで、平坦な底面の中央西寄りには長径35㎝、短径27㎝、深さ５㎝の楕円形の落込みが存在する。北側でＳＫ７を切り込む。

・ＳＫ７（第27図）

長径1.7m、短径1.5mを計る楕円形のやや浅い掘り込みで、周壁の立ち上がりは比較的急である。底面にはピット等はみられずほぼ平坦であるが、中央部が若干深く、検出面からの深度は約13～16㎝を計る。埋土は明灰褐色を基調とする砂質土で、鉄分の浸透も認められるようである。

・ＳＫ８（第27図）

直径約1.4～1.5m、検出面からの深度約６～７㎝を計るやや不整な円形遺構である。浅い皿状を呈しており、周壁と底面との境は不明瞭である。底面にはピット・落込み等は認められず、Ⅱａ層を埋土とする。

・ＳＫ９（第27図）

平面形が若干卵形を呈するもので、長径1.75m、短径1.6mを計る。現存深度は３～５㎝と浅く、周壁の立ち上がりはやや急である。底面はほぼ平坦でピット・掘り込み等はみられず、Ⅱａ層土を埋土とする。

・ＳＫ10（第27図）

最深部で約10㎝程の浅い皿状の円形遺構で、東西両側に若干弧状を呈する長楕円形の掘り込みが設けられている。この二つの掘り込み部分のみが軟質の灰色砂質シルトを埋土とするが、これ以外の浅い皿状部分はⅡａ層土を埋土とする。

・ＳＫ11（第27図）

他の円形遺構よりやや小型で、直径約1.2mを計る。底面の形態も若干スリ鉢底気味を呈する凹レンズ状で、他の例とやや特徴を異にする。埋土は鉄分の浸透が認められる灰褐色砂質シルトである。底面にピットや落込みの存在は認められない。

・ＳＫ12（第27図）

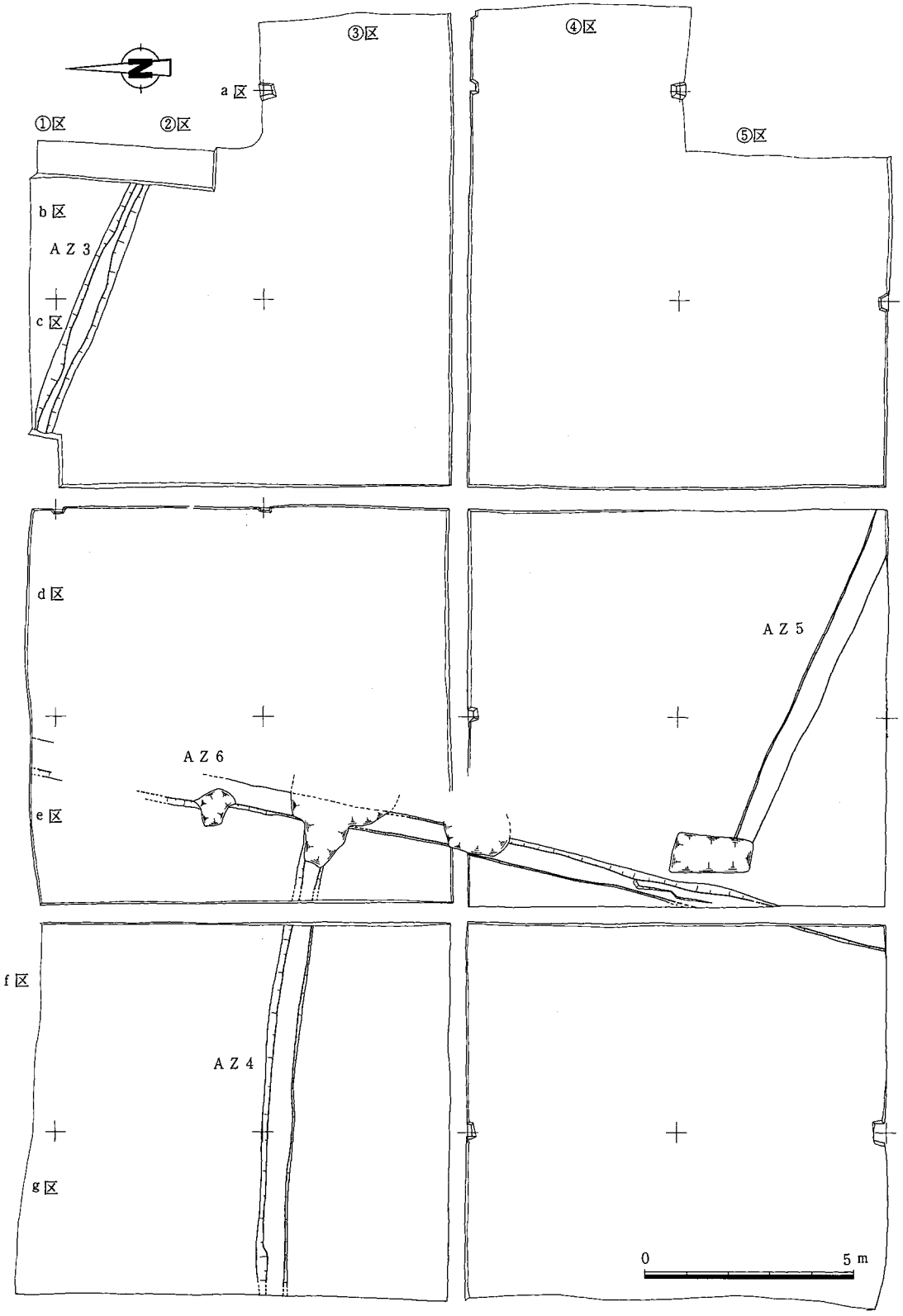
直径1.3～1.4m程のやや不整な円形を呈するもので、底面にも若干の凹凸が認められる。底面の形状は凹レンズ状を呈し、検出面から底部中央付近までの深さは約11㎝程である。底面にピットや落込み等は認められず、軟質の灰褐色砂質シルトを埋土とする。

・ＳＫ13（第27図）

南半部を調査区外に残したままであるが、直径1.2～1.4m程の円形遺構であると考えられる。断面は浅い凹レンズ状を呈し、底面にはピットや落込み等の存在は認められない。埋土は濁灰褐色細砂質シルトで、部分的に茶褐色味を帯びる。

（ｂ）Ⅲａ層上面検出遺構（第28図）

Ⅲａ層上面においては、Ⅲａ層土を耕土とする水田が検出されている。本水田も調査区全域に広



第28図　Ⅲa層上面検出遺構　（1／150）

がり、ほぼ東西方向（以下、北から順にＡＺ３・ＡＺ４・ＡＺ５とする）ないし南北方向（以下、ＡＺ６とする）に設けられた４条の畦畔によって５面に区画されている。これらの畦畔のうち、ＡＺ４とＡＺ６とはそれぞれⅡｂ層上面検出のＡＺ２とＡＺ１とほぼ同じ位置にあり、Ⅱｂ層の水田区画がⅢａ層のそれを踏襲したものであることを推測させる。

ＡＺ３は下場幅40～70㎝、上場幅15～40㎝を計り、断面形が偏平な「カマボコ」形を呈している。おそらく、このＡＺ３は調査区外においてＡＺ6とほぼ直角に接合するものと考えられる。調査区西方から延びるＡＺ４はｅ－③区でＡＺ６とほぼ直角に接するが、これら２条の畦畔によって区画される水田は他の水田に比べ15～20㎝程低い位置にある。ＡＺ４上面と北側水田面との比高は15～20㎝を、南側水田との比高は４～８㎝を計る。ＡＺ５は東方から延びＡＺ６にほぼ直角に接する畦畔であるが、下場幅約50～60㎝、高さ４～５㎝を計る。ＡＺ６は横断面が台形を呈する畦畔で、上場幅30～50㎝、下場幅50～60㎝を計る。これらの畦畔は、ＡＺ６の断面観察から水田耕土であるⅢａ層土を集土して造成されていることが看取された。

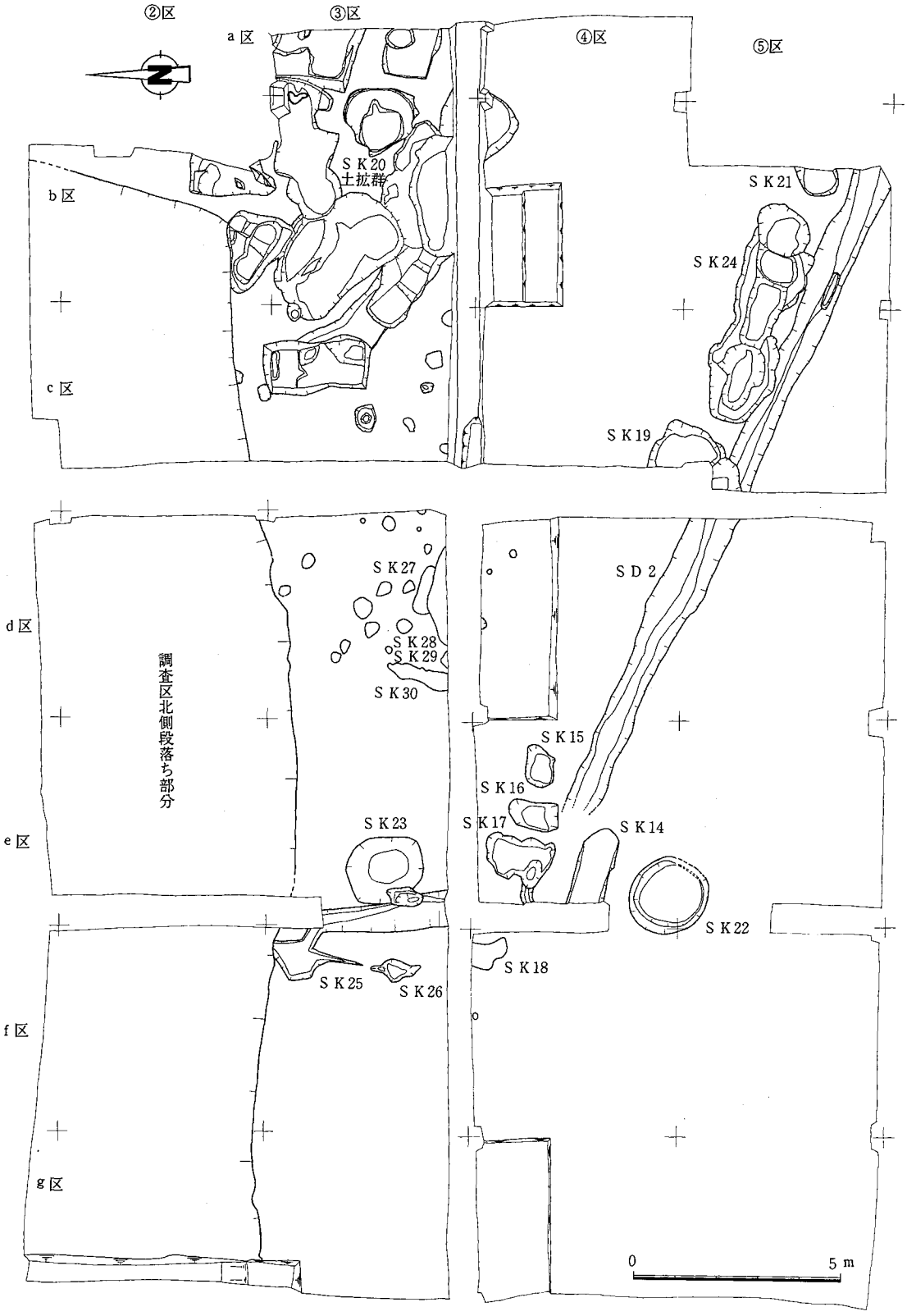
Ⅲａ層上面において検出された５面の水田もやはり各水田の規模については明確にできないものの、ＡＺ４とＡＺ６との接合点が、ＡＺ３及びＡＺ５とＡＺ６との接合点のほぼ中間に位置することから、ほぼ等間隔にＡＺ６から東側と西側に交互に畦畔が延びていたと推定できるならば、南北幅約20ｍで20ｍ以上の東西幅を持つ水田が配置されていたことが想定できよう。

（ｃ）北側段落ち部及び水田（第29図）

Ⅲａ層上面検出遺構の調査を終えⅢａ～Ⅲｃ層の掘り下げを進める際に、ｂ～ｃ区間をほぼ東西に延びる段落ちの肩部ラインを検出した。この段落ち部の北側及び西側は調査区外に広がるが、東縁部の一端はｂ－①・②区内において認めることができる。ｇ－①～③区西壁際に設けたトレンチにおいて段落ち部の深度や埋土の確認を行った結果、まずこの落込みの形成がⅢｂ層堆積後、Ⅲａ層堆積前に生じたこと、及び調査区内において肩部からの深度が約1.5ｍに達することが確認された。かなり急な落込みを示す南壁際から北側には、おそらく人為的な埋め戻しによると考えられる灰色シルトと軽石礫混じりの粗砂との互層（第24図⑲層）が認められ、そのさらに北側には粘質土を中心としたブロック状の土層（第24図⑮～⑱層）が堆積している。これらの堆積土の上方には、直上に灰色の粘質土層（第24図⑬層）が堆積する灰色砂混じりシルト層（第24図⑭層）が存在する。この両層のあり方は、白色の砂層を挟んでさらに上部に堆積する水田層（第24図⑨層）及びその直上の粘質土層（第24図③層）のあり方と類似するものであり、鉄分の浸透が認められることとあわせて、この灰色砂混じりシルト層も水田層であった可能性が高い。

（ｄ）Ⅲｃ層上面検出遺構（第29図）

Ⅲｃ層上面においては溝状遺構１条を検出したが、これをＳＤ１とする。ＳＤ１はｄ－⑤～ｅ－⑤区にかけて検出され、Ⅲａ層上面検出の畦畔ＡＺ４の北側に並走する形で東南東～西北西方向に確認された。検出面での上場幅は30～50㎝を計り断面の形状は「Ｕ」字形を呈する。この溝の西端部分において長辺80㎝、短辺25㎝程のさらに深い落込みが検出されている。



第29図　Ⅲc～Ⅴ層上面検出遺構　(1／150)

（ｅ） Ⅳ層上面検出遺構（第29図）

Ⅳ層上面においては、溝状遺構・土坑・ピット等を検出している。その機能やこれら諸遺構間の有機的関連性などについては残念ながら明らかにできなかったが、ＳＫ20として便宜的に一括した連続的に切り合う方形土坑群や、古銭・陶磁器を伴う円形土坑ＳＫ21等はその性格について検討を要しよう。以下、上記の順に各遺構の説明を行う。なお、遺構の番号は検出順に付したものである。

溝状遺構（第29図）

・ＳＤ２（第29図）

上場幅0.7～１ｍを計る溝状遺構で、ｅ－④区からｂ－⑥区にかけて検出されている。検出面からの深度は最大10㎝程で、横断面形は浅い「Ｕ」字状を呈する。本遺構の底面はｂ－⑤区東端部において、長さ約１ｍ、幅約20㎝の範囲にわたってさらに約10㎝程掘り込まれている。この溝状遺構の走向が、より上層の遺構であるＳＤ１や畦畔ＡＺ５等と平行することは注目される。

土坑（第29～31図）

・ＳＫ14（第29図）

ｅ－④区において検出された浅いトレンチ状の掘り込みで、溝状遺構ＳＤ２にほぼ平行する。幅80～90㎝、再深部での深さ５～8.5㎝を計る。

・ＳＫ15～18（第29図）

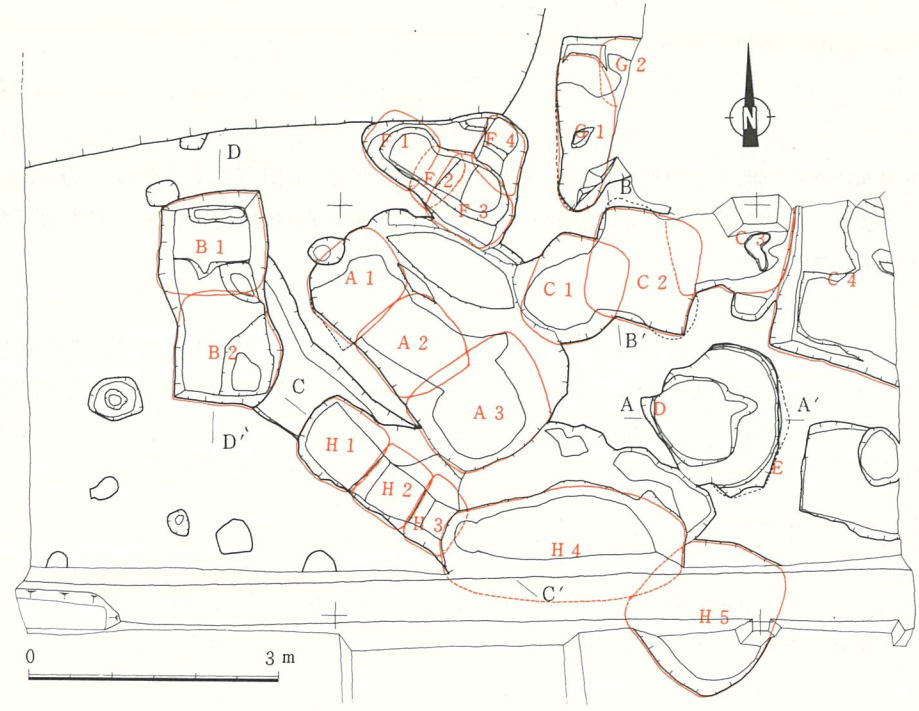
ｅ－④区からｆ－④区にかけてＳＤ２の北側に連続的に並んで検出された土坑を、東からＳＫ15・16・17・18とした。ＳＫ15は長径約１ｍ、短径約60㎝、深さ12～14㎝程度の不整形土坑である。ＳＫ16は長径約1.2m、短径約60㎝の不整形土坑であり、深さ10～16㎝を計る。ＳＫ17も不整形土坑で長径約1.7m、短径約１ｍ、深さ約10㎝を計る。ＳＫ17の埋土は大きく３層に分かれており、最上層は明灰白色シルト質土、その直下に灰色シルト質土と明褐色シルト質土の斑状混入土を認める。ＳＫ18は幅約60㎝程の不整形土坑である。

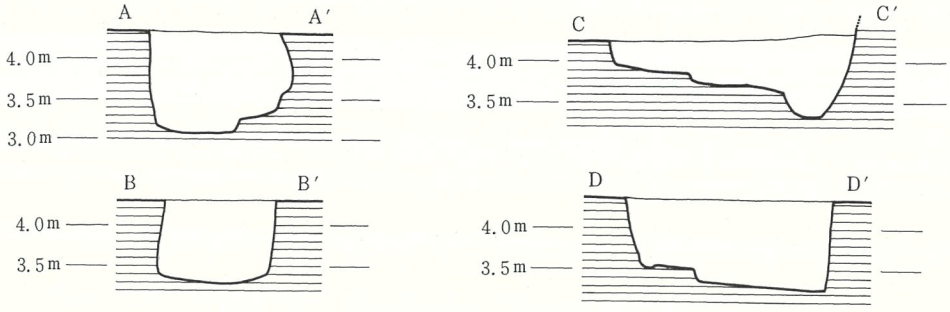
・ＳＫ19（第29図）

ｃ－④区～ｃ－⑤区間にかけて検出された不整形土坑で、南北二つの連続する土坑からなる。土層観察ベルト下の部分については未調査のまま調査を終えたため、南側の土坑については規模等不明であるが、北側の土坑は長径約1.8m、深さ約40㎝を計る。また、検出部における南側土坑の深さは、約30㎝であった。

・ＳＫ20（第30図）

ｂ・ｃ－①～③区において、方形ないし不定形な土坑が連続的に掘り込まれた遺構を検出した。ここでは連続して掘削が行われたと思われる土坑群ごとに便宜的にＡ～Ｈの８小群にまとめ、各群内の土坑にほぼ西から順に番号を付した。以下、この順に説明を行う。なお、これらの土坑群は当初それぞれ単独の土坑であると考え、掘り下げを進めながら埋土の観察等を行った。その結果、これらの土坑の埋土は淡灰白色粘土や黒色粘土のブロックを多量に混じえる混土で、これらが一時に埋め戻されたことが推定された。このため、時間的な制約もあり、これらの土坑を掘り下げるに当たっては埋土の観察を行った後、全域を同時に掘り下げることとしたが、この調査方法の不適切さ





第30図　SK20遺構図　（1／90）

のために、後に単位を抽出することとなった各群内の土坑同士の切り合い関係などについて充分な観察を行えなかった。

A群

A１～A３という３基の土坑からなる群で、検出時には全体で１基の隅丸長方形土坑であると考えられた。埋土も淡灰白色粘土や黒色粘土のブロックを含む濁暗青灰色砂混じり粘質土で人為的に一度に埋め戻されたものと考えられた。これらの土坑は、A１・A２・A３の順に北西から南東に並ぶ。A１は一辺１～1.5mの方形を呈する土坑で、深さ約１mを計る。底面南西隅は西側に張り出し，A２の底面との間に不連続部分を形成する。A１の西壁下半部は袋状に外方に張り出している。A２は三方で他の土坑と重なり合っているため全形など不明確であるが、底面で幅70～80㎝、

深さ約１ｍを計る。Ａ３は各辺が若干外側へ膨らむ一辺約１.５mの隅丸方形を呈する土坑で、やはり深さ約１ｍを計る。

Ｂ群

土坑群の西縁部に位置し、ほぼ同規模のＢ１・Ｂ２からなる。両土坑はともに深さ約１ｍで、平面形が一辺約２ｍの方形を呈する。Ｂ２はＢ１よりごくわずか東に位置しており、Ｂ群土坑底面の中程にＢ２北東隅が観察される。

Ｃ群

Ｃ１～Ｃ４の４基からなる土坑群で、Ａ群の東側にこの順に西から東へ位置する。本土坑群のうちＣ１～Ｃ３については、埋土の観察によってＣ１→Ｃ２→Ｃ３の順に掘り込まれたことが確認された。Ｃ１は一辺１.０～１.３m、深さ約１ｍ程の隅丸方形を呈する土坑で、青灰色粘土を埋土とする。Ｃ２は一辺約１.３～１.４mの方形の土坑で、深さ約１ｍを計る。灰色砂混じりシルト質粘土を埋土とし、土坑下部にはＡ１と同様な袋状を呈する外方への掘り込みが認められる。Ｃ３は灰色粘土及び黄色粘土を混じえる灰色砂混じりシルト質粘土を埋土とする土坑である。東西両側で隣接土坑と重なり合い、また北側が調査区外に存在するため、その規模等については不明である。しかしながら、本土坑の南辺にあたる検出ラインが直線的であったことから推測するならば、他の土坑と同様に方形を呈していた可能性が高いと思われる。

Ｃ４は検出時において南西に一角部を持つ方形の掘り込みであろうと判断し掘り下げを行ったが、埋土の観察や検討が不十分なまま作業を進めたため、底面の観察から本来は２基以上存在したと考えられる土坑を一時に掘り下げてしまう結果となった。底面の凹凸から辛うじて推測するならば、少なくともＣ４の南半部、及び北東半部にそれぞれ１基ずつ存在したと思われる。そして、南半部の土坑については、おそらく方形ないし長方形を呈していたと考えられる。

Ｄ

本土坑は、南北約２ｍ、東西約１.５mを計る不整方形土坑である。径約１ｍの範囲にわたって底面中央部はさらに約15㎝程掘り込まれており、本土坑検出面からこの落込みの最下面までの深度は約１.２mである。この土坑においても下半部が袋状に外方へ向かって掘り込まれている。

Ｅ

調査区東壁際に存在し、東端部は調査区外に存在する。検出部位の形状から推測して、平面形が長方形を呈する土坑であると考えられるもので、ほぼ垂直に掘り込まれている。長辺１.２m以上、短辺約１ｍ、検出面からの深さ約50㎝を計る。なお、本土坑の検出時に、これに上方から掘り込まれた長径約70㎝、短径約50㎝、深さ約20㎝程の楕円形土坑が検出されている。

Ｆ群

Ａ群の北側に位置し、「Ｌ」字形に並ぶ土坑群で、完掘後の土坑の形状から推測して、Ｆ１～Ｆ４の４基の存在が想定される。Ｆ１・Ｆ３は径約75㎝程の不整円形を呈する土坑と考えられるが、Ｆ２・Ｆ４については形状等不明である。これらの土坑は検出面からの深度も約50～60㎝と浅く、総じて他の土坑よりも規模が小さい。しかしながら、Ｆ１～Ｆ３がＡ群土坑と接するような状態で同方向に並ぶことは、他の土坑との関係や本土坑群の性格を考える際に注意するべきで

あろう。

G群

b－②区東壁際で検出された土坑群で、北縁部西半テラス状部分より上部は掘り下げを誤った部分である。掘り下げ終了後の土坑の形状から考えて、西側に幅約60㎝、長さ約２mの長楕円形土坑が存在し、その東側に連続して形状は不明であるがもう１基土坑が存在するようである。便宜的に西から東へ、Ｇ１・Ｇ２とする。Ｇ１の西壁から南壁にかけては、若干外方へ掘り込んでいる。

H群

b－③区南半部でＡ群土坑と南側で接する土坑群である。Ｈ１～Ｈ３は階段状を呈する部分で、これが深度の異なる土坑を連続して掘削したため結果的に生じたものか、意図的にこのような形状を作出したのかは不明であるが、便宜的に各テラス状部分を形成する掘削部をこのように呼称する。Ｈ４は南半部を未掘のまま調査を終了したため、その形状については明確にできないが、長楕円形ないし隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深度は約１mで、Ｈ３の底面との比高は30㎝程であり、先述のＨ１～Ｈ３をＨ４へ出入りするための階段として利用することも可能である。Ｈ４の北側はテラス状に浅く掘り込まれており、Ｈ１とＢ群との間も両者をつなぐように浅く掘り込まれている。Ｈ１～Ｈ３についても、Ｇ群土坑同様にＡ群土坑と配列方向を一つにすることが注意される。Ｈ５は、Ｈ４の南側に位置し、形状についてはＨ５の対角線上を走る土層観察のベルト下の未掘部分を残して調査を終えたが、隅丸方形を呈すると考えられる。深度は検出面から約１．３mで垂直に掘り込まれている。

・ＳＫ21（第29図）

b－⑤区中央南東寄りに位置する土坑で、東半部が調査区外に及ぶ。このため全形を確認することはできなかったが、残存部から考えて不整円形を呈するものと考えられる。径約１m、深さ６～９㎝のごく浅い土坑である。

・ＳＫ22（第31図）

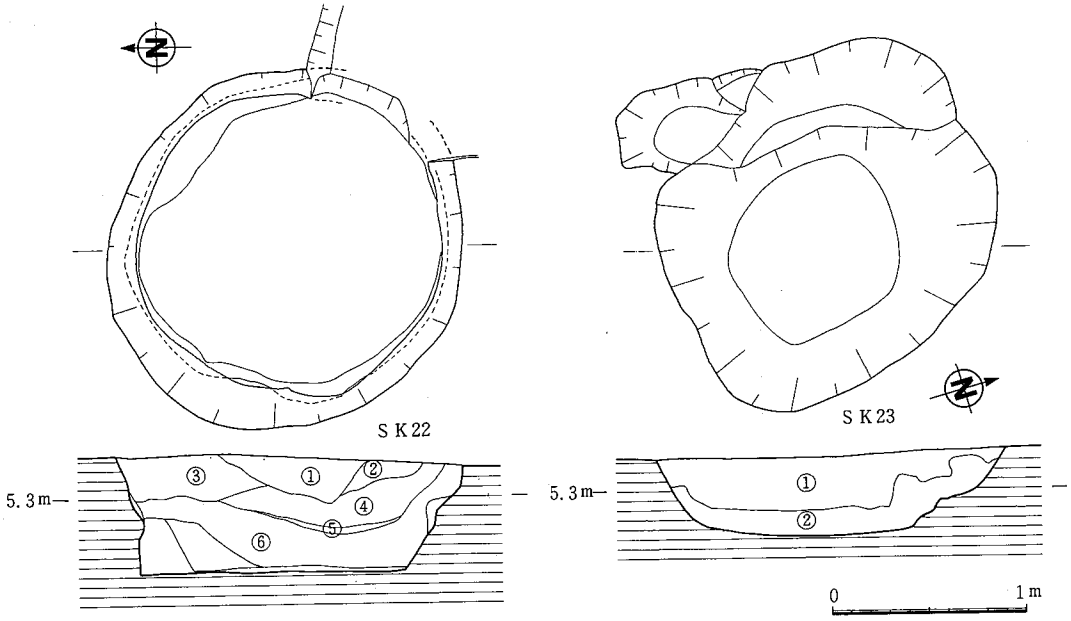
e－④区南西隅に存在する円形土坑で、直径1.85m、検出面からの深さ約60㎝を計る。断面形はほぼ「逆台形」状を呈するが、下半部が外方へ張り出し袋状になる部分もみられる。埋土はａ～ｉの９層に分層されたが、これらはいずれも黄褐色土や赤褐色土等をブロック状に多量に含んでおり、人為的に一時に埋め戻されたものである可能性が高い。本土坑は調査前に設けた土層観察用の試掘坑によって南東部を欠いているが、この試掘坑掘り下げ時に本土坑埋土にあたる部分から陶磁器碗底部片が出土している。

・ＳＫ23（第31図）

長径約1.9m、短径約1.6mを計る深さ45㎝程の楕円形土坑で、ｅ－③区東半部ほぼ中央に位置する。土坑西縁部は深さ20㎝程の小規模は土坑数基によって連続的に掘り込まれ、テラス状を呈している。

・ＳＫ24（第29図）

ＳＫ24は溝状遺構ＳＤ２の北側にあって、これに平行して連続的に並ぶ土坑群である。少なくと



SK22 ① 灰色シルト質砂層（黄灰色の径２～３㎝の土をブロック状に含む。径 0.5～２㎝の白色の軽石を含む。）
② 灰色粗砂混じりシルト質砂層（黄灰色土や赤褐色土をブロック状に多く含む。また，軽石も多数含む。）
③ 灰色砂質シルト層（黄灰色のブロック状の土，軽石小粒（径 0.5～２㎝）を含む。
④ 青灰色粘土
⑤ 灰色シルト質砂層（下部に黄灰色の土をブロック状に含み，白色の軽石小粒を含む。）
⑥ 灰褐色粗砂をブロック状に含む灰色シルト質砂層（白色の軽石を含む。）
⑦ 青灰色粘土層
⑧ 黒灰色土や黄褐色土をブロック状に含む灰色シルト質砂層（粗砂や赤褐色土を縞状に含む。）
⑨ 灰白色粗砂層（軽石小粒を含む。）
⑩ 灰色粗砂層

SK23 ① 淡灰色砂混じりシルトを基調とした層で，基本土層Ⅴ層土をブロック状に含む
② 基本土層Ⅴ層土，灰色砂混じりシルト，及び黄褐色土からなる混土

第31図　SK22・SK23遺構図　（1／40）

も４基以上の土坑の存在が認められ、全長約5.5m、幅1.0～1.8mを計る。北西端の落込みは深さ25～29㎝を計る不定形の土坑で、これと南西側の２基の円形に近い不定形土坑は深さ20～30㎝程の溝状落込みによって連続している。南西側の２基は深さ28～36㎝、直径1.0～1.4mを計る。

・SK25（第29図）

e－③区からf－③区にかけて不定形土坑とそれに連続する溝状の浅い落込みを検出した。土坑の深さは約10㎝と浅く、長径1m程を計る。この土坑に連続して南へ延びる溝状遺構は、幅50～90㎝、深さ約５㎝を計り、SK23に東側縁部を切られる。

・SK26（第29図）

SK25の南側で隣接して検出された浅い土坑で、長径1.2m、短径0.5m、深さ10㎝程の浅い土坑である。

・SK27～30（第29図）

d－③区南半部においてＳＫ27～30の４基の不定形土坑が検出されている。

ピット群（第29図）

４層上面においては、ｃ－③区からｄ－③区を中心に若干のピットが検出された。これらのピットは形状・規模ともにややばらつきがみられたが、直径は10～50㎝を計り、平面形は円形に近い形状を呈するものが多い。

（ｆ）Ⅴ層上面検出遺構

ｄ－④区北半部において、径20㎝前後のピットが数基検出されている。第22図に示した土層図の④層はこのピットの埋土である。

５．まとめ

本調査区においてはⅡａ層上面において畦畔・畝・円形遺構等を検出した他、Ⅱｂ層上面において畦畔、Ⅲｃ層上面において溝状遺構、Ⅳ層上面において溝状遺構・不定形土坑・ピット群、Ⅴ層においてピット群が検出されている。Ⅳ層上面以上の諸遺構はその形成された方向がほぼ同じであり、かなり連続的に形成されたことが推測される。本遺跡出土の遺物群は大きく江戸時代から明治時代のものと平安時代から鎌倉時代のものの二時期に分けることができるようであるが、上記の推測が妥当なものであるならば、Ⅳ層が平安時代から鎌倉時代にかけての遺物包含層であることから考えて、Ⅳ層上面以上で検出された諸遺構はこの前者の時期に比定できよう。ただし、これらの遺構の時期については出土遺物の整理を終えた段階で再検討したい。

鹿児島大学郡元団地においては、宮崎大学農学部藤原宏史助教授によってプラント・オパール分析調査が各発掘調査地点において行なわれ、[1] 構内全域に広く水田址が広がっていることが示されているが、本地域において考古学的に水田が検出されたのは電子計算機室建設地内[2] の調査に続いて二例目である。Ⅱａ層上面検出の水田については畦畔をはじめ畝も検出されている。注目されるのは畦畔の左右で畝の形成された方向に差異が認められる点であるが、これは今回検出した帯状の高まりが確かに水田を区画していたものであり、畦畔として機能していたことを示すものであった。本水田層上面検出の円形遺構についてはその機能・性格等が不明であるが、断面形及び中央部小ピット存在の有無等から、数タイプに分類整理できる。これらの円形遺構は畦畔と重複せず畝を形成する水田上面に掘り込まれている点から考えて、何らかの水田耕作に伴う遺構であることが推測される。水田に伴う円形構造物として指摘し得る代表的な例に「稲積み」があり、南九州においては現在も数種に及ぶ形態が観察される。中でも薩摩半島の北部で圧倒的に多く見られるタイプは中央部に杉の若木等を支持柱として使用しており、鹿児島市周辺でも「吊りコヅミ」と称される懸架式の「稲積み」に関しては支持柱が使用される。今回検出した円形遺構中数基に関しては中央部に柱穴状小ピットを有し、これらとの類似が注目される。ただし現在観察される南九州の「稲積み」の場合、排水用に水田上面に施す掘り込みは円環形を呈し、検出された円形遺構の様なレンズ状の掘り込みは機能上使用され得ない。Ⅱａ層上面検出の円形遺構の性格については、今後類例を待って検討を加えて行きたい。

Ⅱｂ層上面検出の水田址上面においては畦畔ＡＺ３～ＡＺ６が検出されたが、これらによる水田区画の方向は上層のⅡａ層のそれとほぼ同じである。すなわち、ＡＺ１とＡＺ６、ＡＺ２とＡＺ５の位置が若干の方位的なズレを認めるもののほぼ重複しており、時期的に先行して形成されていたＡＺ５・６を有する水田区画上に、この区画をほぼ踏襲してＡＺ１・２が形成されたものと考えられる。Ⅳａ層上面では他にＡＺ３・４が検出されているが、両者ともにほぼ平行しつつ直交に近い状態でＡＺ６に接続しており、全容ではないもののこれらの畦畔に囲まれた水田一区画の規模や形状を示唆するものである。

便宜的にＳＫ19としたⅣ層上面検出の土坑群には連続的に掘り込まれた数基の土坑が数単位密集して存在しており、その性格が注目された。土坑の形状が復元できたものには方形ないし隅丸方形のものが多く、またその規模もほぼ同じである。このＳＫ19として一括した土坑群はＥ群としたものを除いて深さもほぼ同じであるが、このことを土坑の下部において外方へと掘り込むことと併せて考えるならば、これはこのレベル付近の土を取ることを目的としたことの現れとも考えられる。このレベル付近には黒色粘土層、及び黄白色粘土層が堆積しており、上記の想定が妥当なものであれば、次にはこの土の用途が問題となろう。

なお、今回の調査においては、狛犬・神棚・民家・人面・巾着等を型どった型作りの土製品や石鍋・白磁・青磁・黒色土器等多彩な遺物が出土している（図版23～26）。これらの遺物については平成二年度年報に報告する予定である。

註

1）藤原宏志「プラント・オパールの分析結果について」『神川堤第一地点遺跡』鹿児島大学工学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室　1985年

藤原宏志「プラント・オパールの分析結果について」『水町遺跡（鹿児島大学郡元団地内遺跡Ｐ－６・７地点）－鹿児島大学教育学部校舎新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』鹿児島大学教育学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室　1987年

藤原宏志「鹿児島大学農学部温室改築予定地遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果について」『鹿児島大学郡元団地内遺跡（Ｂ～Ｄ・９，10地点）－鹿児島大学農学部温室改築及び実験温室，網室等新設に伴う試堀調査報告書－』鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室　1987年

藤原宏志「鹿児島大学理学部１号館増築予定地（Ｉ・Ｊ－９・10区）におけるプラント・オパール分析について」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ｉ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1986年

藤原宏志「鹿児島大学構内遺跡（郡元団地Ｏ－７区，郡元団地Ｐ－４・５区）におけるプラント・オパール分析」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅳ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1989年

2）昭和58年鹿児島県教育委員会の調査によって地区割りが検出されている。（鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ｉ　第Ⅲ章　参照）

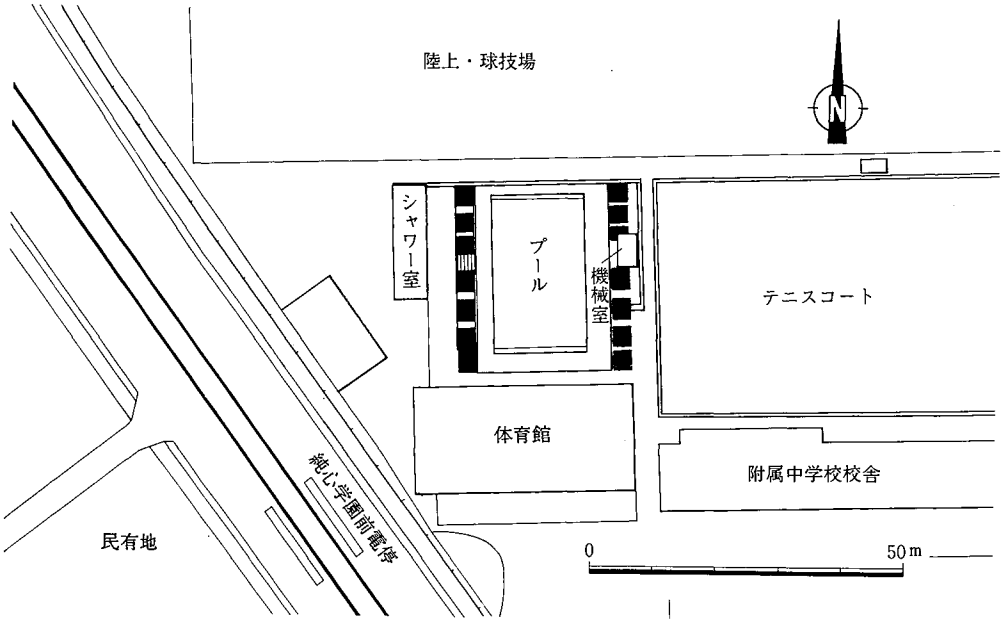
第４章　鹿児島大学郡元団地Ｑ－９・10区における（附属中学校プール上屋取設に伴う）発掘調査報告

１．調査に至る経過

鹿児島大学教育学部附属中学校では、プールに火山灰よけの上屋を設置することとなった。この工事に伴い上屋支柱基礎部分として、14ヶ所が掘削されることとなったが、今回の工事地点は学史上著名な「附属中敷地内遺跡」[1)] の東に隣接して存在しており、古墳時代「成川式」期の集落址が一帯に広がっていることが容易に予測される地域である。このため本工事が計画された当初から埋蔵文化財への影響が強く懸念されていたが、発掘調査中の施設部との協議の結果、遺構検出面より上位において本工事に伴う掘削をとどめるよう工事計画を変更することとなった。

２．調査体制

本調査は、下記の体制で平成元年12月18日～26日まで行なった。



第32図　調査地点位置図　（１／1,200）

調査主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　上村俊雄
調 査 担 当　鹿児島大学埋蔵文化財調査室
室長　上村俊雄
室員　松永幸男・砂田光紀・中村直子
発掘調査作業員
石谷サチコ・岩戸エミコ・金子千穂枝・狩集ミエ子・坂口ミエ子・寺光ミツコ・東條フミ・名越ヒデ子・福永花江・野下チリ子・野下萬理子・野下ヨシエ・野下ヨブ子・前田スガ・盛満アイ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子

3．調査の経過

先述のように、本調査地域は昭和38年に河口貞徳氏によって調査が行なわれた附属小学校敷地内遺跡の東に連続して位置する。今回の調査対象地は3ｍ×２ｍ程の長方形区画14ヶ所であったが、このような調査を行なった場合、当該地域に広範に存在することが予想される集落址を虫食い状に調査することになる。このため、可能であるならば、将来この地域が全面的に調査される場合に備えて、掘削が遺構検出面に及ばないような措置が講ぜられることが望まれた。

調査にあたっては第32図に示したように、調査トレンチに№.１～14の番号を付し、遺構検出面以下の保存を検討するための資料を得るため、まず№.２・５・７トレンチを他に先行して調査することとした。これらのトレンチの調査は本工事に必要とされたプールサイド面下約2.5mの深さまで実施したが、この結果、最下面付近において砂層が検出され、またその直上に成川式土器を多量に含む厚さ60㎝程の遺物包含層の存在が確認された。この砂層は、河口貞徳氏による調査の際に「遺跡形成時の地表面をなしたものであろう」と判断された砂層にあたると考えられ、同氏による調査の際には本砂層に掘り込んだ不正円形住居址が検出されている。以上の所見を得た段階で、遺構の保存を第一に施設部と協議した結果、当初の工事計画より掘削深度を約50㎝あげるよう設計変更が行なわれることとなった。

今回の調査に伴って、Ⅴ層を中心として多量の遺物が出土している。中でも成川式土器の出土量は小面積の調査にもかかわらず、パンコンテナに10箱程に達している。これらの遺物については立会い調査の際に採集した遺物と併せて来年度年報において改めて報告を行なう。

なお、今回の調査において設定された14ヶ所の調査トレンチには側溝やフェンス等の上部構築物が存在するため調査が実施できない部分が存在したが、これらについては工事中に立合調査を実施することとした。

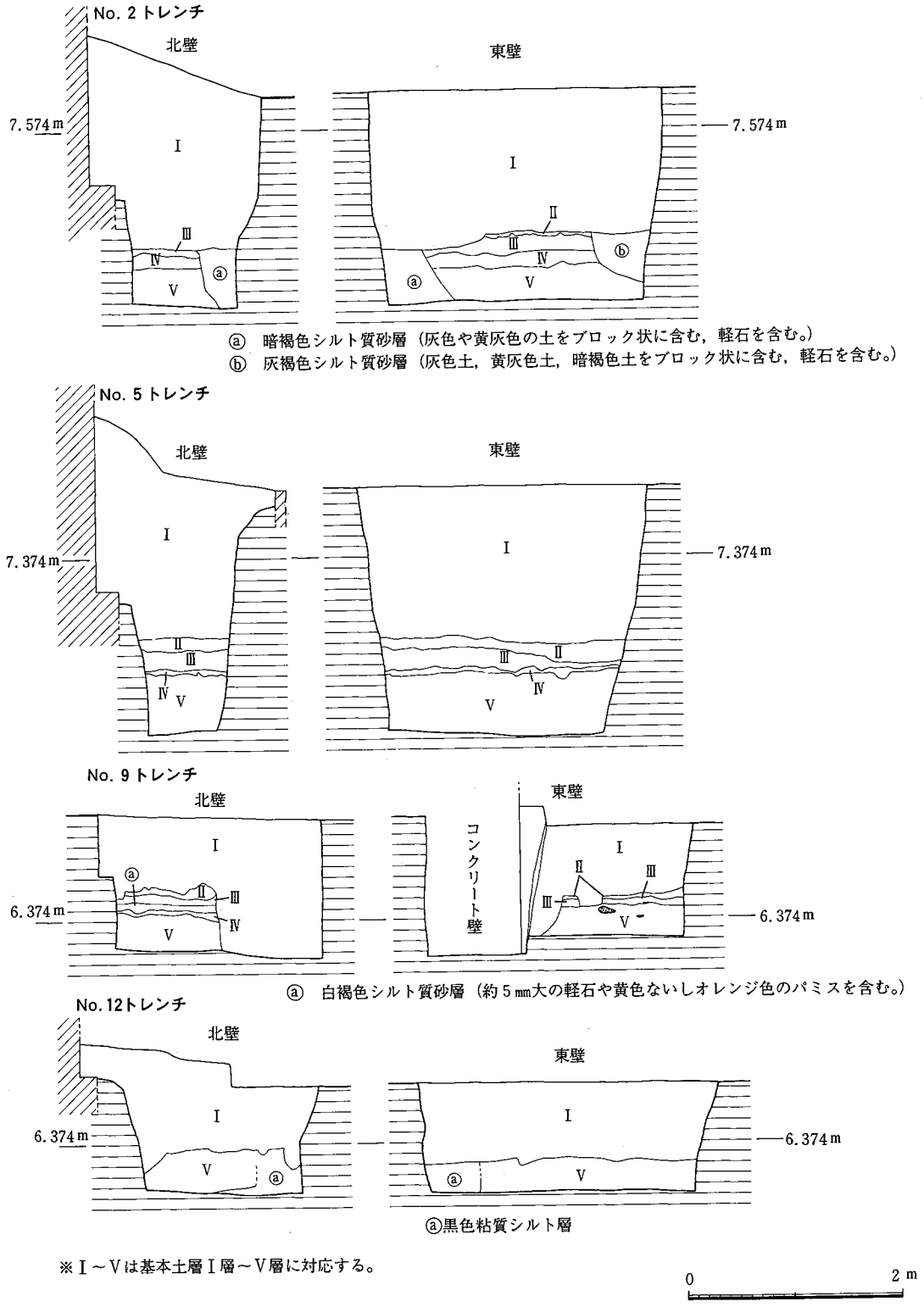
4．基本層序（第33図）

今回の調査においては、以下の６層を基本土層として認めることができた。

Ⅰ層：盛土

Ⅱ層：灰色シルト質砂層（１㎝大の軽石を含む）

Ⅲ層：黄灰色シルト質砂（１㎝大以上の大きさの軽石を含む、黄色やオレンジ色のパミスを含む）



第33図　No. 2・5・9・12トレンチ土層図　（1／60）

Ⅳ層：茶褐色シルト質砂（１㎝大以上の大きさの軽石を含む、黄色やオレンジ色のパミスを多く含む）

Ⅴ層：暗褐色シルト質砂層（軟質で２～３㎝以上の大きさの軽石を含む、黄色やオレンジ色のパミスを含む）

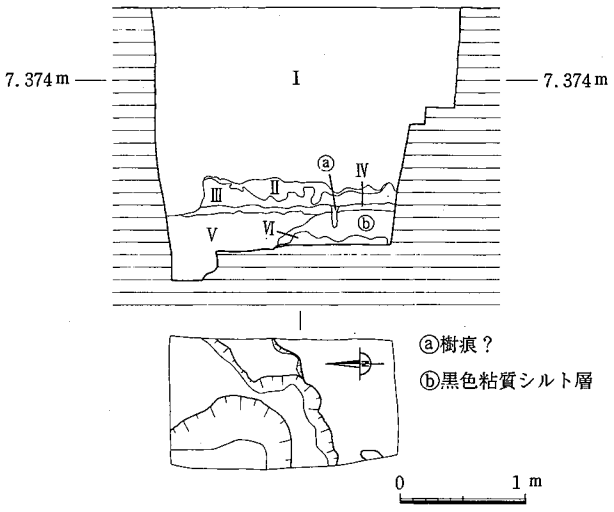
Ⅵ層：淡褐色砂層（軽石礫を多量に含む）

Ⅱ～Ⅳ層からの遺物の出土は希薄であったが、成川式土器をはじめとして須恵器・青磁等各時期の遺物が出土している。これに対してⅤ層は現在のところ成川式土器の単純層と考えられるが、本層からは成川式土器が極めて多量に出土している。ただ、このⅤ層出土の成川式土器には磨滅した小片が多数含まれており、何らかの要因によって二次的に移動した可能性も考えられる。また、Ⅴ層中においては黒色土と濁褐色土との非常に不明瞭なラインの存在が認められた。今回の調査は下部に存在する遺構に影響を与えないようにプールサイド面下２ｍで調査を終えたこと、及び調査トレンチ一単位の面積が狭いことから、このラインの性格については明らかにすることができなかった。なお、No.６トレンチにおいてはプールサイド下２ｍより上位で砂層に達し、この面において黒色土の落込みを検出している。

５．遺構（第34図）

No.９トレンチにおいて白色の大粒パミスを多量に含む黒褐色粘質土を埋土とする落込みが、Ⅵ層上面で検出されている。検出部東側には、検出面から浅い位置にテラス状部分が形成されており、また落込み底面は北西に向かって若干傾斜している。検出面積が非常に狭いためこの落込みの平面形や規模等については不明であるが、検出レベルから考えて河口貞徳氏による調査の際に検出された住居址とほぼ同時期の所産と考えて大過ないであろう。

本遺構の検出面より上部においてⅤ層を掘り下げる途中、この落込みの検出ラインとほぼ同じ位置において黒色粘質シルトとⅤ層土との不明瞭なラインの存在が確認された。上記の落込みはこのラインの精査に伴う掘り下げの結果検出されたものであった。この黒色粘質シルトは、No.６トレンチの他に、No.３・11トレンチにおいてもⅤ層掘り下げの際に検出されている。Ⅴ層土との上下関係をトレンチ壁面の観察によって検討したところ、No.11トレンチ北壁においては黒色粘質シルトの上にⅤ層土が堆積していると判断されるような状況が観察された。この所見が妥当なものであるならば、本地域においてはこれまでの調査所見から予想された砂層上面より



第34図　No.６トレンチ検出遺構及びNo.６トレンチ東壁土層図（１／60）

も上位のレベルから遺構が掘り込まれていたことになり、その場合に遺構掘り込み面となる黒色粘質シルトが部分的にしか残存していないことはかなりの密度で諸遺構が存在していることを示唆するものと考えられる。

6．まとめ

今回調査を行なった教育学部附属中学校プールの所在地は、昭和38年に河口貞徳氏によって古墳時代成川式土器を伴う不整円形住居址が検出された地点の東に隣接する地点である。この古墳時代の住居址は今回の調査地にも存在することが容易に推測され、以前よりこの地域における開発行為が生じた際の対応については困難な状況が生じることが予想されていた。

調査の結果、当初の予想通り成川式土器を多量に包含する層が検出され、調査が砂層にまで及んだトレンチにおいては砂層上面ないしそれより上方からと考えられる落込みの存在も確認された。これらの所見からこの地域にⅤ層中あるいはⅥ層上面から掘り込まれた住居址をはじめとする何らかの遺構が存在することが再確認された。このⅤ層はプールサイド上面を基準としたとき、その約1.7m以下に存在するが、このレベルは現在のプール底面よりも30cm程下位にあたる。また、プールの底面下がさらにどのくらいの掘削を受けているかについては不明であるが、河口氏の調査によって住居址が検出された砂層（Ⅵ層）上面とプール底面との間には90cm程の比高差があり、本地域に諸遺構が残存していた場合、それらの遺構はプールの建設工事による影響をほとんど受けていないと考えられる。

今回の調査は小規模なものであったが、その結果は教育学部附属中学校一帯に理学部から教養部にかけての地域とともに古墳時代の大規模な集落址が存在する可能性の高いことを示している。附属中学校近傍の中郡小学校から一の宮神社にかけても古墳時代の集落址が検出されており、河口氏は附属中学校敷地内遺跡がこの「一ノ宮遺跡より継続したもので広範囲にわたる地域をしめる遺跡の一部である」[2] ことを早くから指摘している。この見解についても、今後、両遺跡出土遺物の比較等を通して検討していく必要があろう。また、北側に位置する教養部から理学部一帯の集落址との関係も注目されるところであろう。

註

1）河口貞徳「付編Ⅰ．教育学部附属中学校敷地内遺跡」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室　1987年

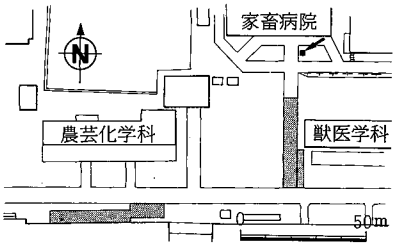
2）註1）に同じ。

第５章　平成元年度（平成元年４月～平成２年１月）鹿児島大学構内における立合調査報告

平成元年４月～平成２年１月においては下記の工事に伴い、立合調査を実施した。

農学部２号館西側及び５号館北側駐車場舗装工事（平成元年４月６・７日、郡元団地Ｃ－６、Ｄ－６～８区）
学生部掲示板取設工事（平成元年４月19日、郡元団地Ｆ－４区）
大学院連合農学研究科校舎建設予定地内フェニックス移植工事（平成元年７月26日、郡元団地Ｅ・Ｆ－４区）
教育学部グランド東側樹木移植用掘削工事（平成元年８月17日、郡元団地Ｏ・Ｐ－８区）
農学部附属家畜病院紫友之碑建立工事（平成元年11月２日、郡元団地Ｃ－６区）

以下、順に説明を行う。



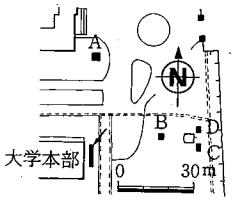
第35図　農学部２号館西側及び５号館北側駐車場舗装工事地点・農学部附属家畜病院紫友之碑建立工事地点位置図　（１／3000）

農学部２号館西側及び５号館北側駐車場舗装工事に伴う立合調査

２号館西側においては約250㎡、５号館北側においては約170㎡が工事の対象となった（第35図）が、いずれの掘削も10～15㎝の深度にとどまり、埋蔵文化財包含層への新たな影響はみられなかった。

学生部掲示板取設工事に伴う立合調査

本工事によって、掲示板取設のための基礎工事として大学本部東側隣接地において、９ｍ×１ｍの範囲を深さ12ｍほど掘削することとなった（第36図）。掘削部においては70㎝ほどの客土の下に厚さ30㎝ほどの栗石からなる層が、さらにその下には金属コーティングを施したコード状製品が検出された灰茶褐色シルト層が堆積していることが確認された。これらの所見より、本掘削部分は全て現代の客土もしくは攪乱部と判断された。



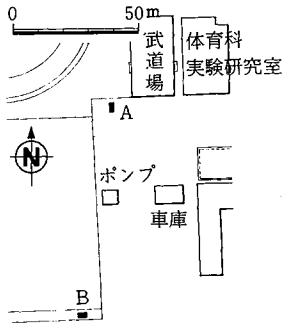
第36図　学生部掲示板取設工事・大学院連合農学研究科校舎建設予定地内フェニックス移植工事地点位置図
（１／3000）

大学院連合農学研究科校舎建設予定地内フェニックス移植工事に伴う立合調査

本工事に伴い、第36図Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４地点において掘削が行われた。Ａ地点においては地表下約１ｍまで掘削が行われ、60㎝ほどの客土直下の黄褐色土層から、白薩摩などの陶器小片が若干

出土している。B地点は移植するフェニックスの抜取りに伴う掘削地点であり、樹根が障害となり充分な土層の観察ができなかったものの、1mほどの客土の下に淡灰褐色砂質シルト層が堆積していることが確認された。この層は色調は若干異なるが、上記の学生部掲示板取設工事地点において確認された灰茶褐色シルト層とほぼ同質の土層であり、両地点が近接していること、及び両土層がほぼ同様な深度で確認されていることから考えて同一層である可能性が高い。残るC・D地点については掘削が客土内にとどまっており、埋蔵文化財包含層への影響はなかった。

今回の工事地点は埋蔵文化財包含層に関する資料が全くと言って良いほど残されていない地点に当たるが、今回地表下60cmほどの比較的浅い部分から白薩摩などの陶器片が出土していることは当該地域における開発事業の実施にあたっては、埋蔵文化財への充分な配慮が必要であることを示すものであろう。



第37図　教育学部グランド東側樹木移植用掘削工事地点位置図　(1／3000)

教育学部グランド東側樹木移植用掘削工事に伴う立合調査

本工事に伴い、第37図に示したA・B二地点において掘削が行われた。当該地点は昭和63年3月に試掘調査を行った教育学部福利厚生施設建て替え予定地に近接しており、本試掘調査時に検出された遺物包含層への影響が懸念された。

A・B両地点とも地表下1.1mまで掘削が行われたが、A地点においてはプライマリーな層には達しなかった。B地点においては上から順に、盛土（Ⅰ層、層厚約75cm）・粗砂混じり淡濁灰色シルト層（Ⅱ層、やや粘性を帯びており、下半には鉄分の浸透が見られる、層厚約20cm）・灰色粘質シルト層（Ⅲ層、軽石礫及び若干の砂を含む）が認められ、Ⅱ層からは土師器坏底部片をはじめとして土器小片が数片出土している。

以上の立合調査結果は、上記の試掘調査の結果検出された遺物包含層がかなり広範に広がるものであり、この地域においてなんらかの開発事業が実施される場合には、埋蔵文化財への充分な配慮が必要であることを示すものである。

農学部附属家畜病院紫友之碑建立工事に伴う立合調査

本工事においては、盛土部分を30cmほど掘り下げた（第35図矢印部分）。埋蔵文化財への新たな影響はなかった。

鹿児島大学構内遺跡調査要項

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

（設　　置）

第１条　本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（審　　議）

第２条　委員会は、本学の施設計画を円滑に行なうため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

(1)　基本計画の策定に関すること。

(2)　調査結果に基づく対策に関すること。

（組　　織）

第３条　委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1)　学長

(2)　各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長

(3)　事務局長

(4)　学生部長

（委 員 長）

第４条　委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（議　　事）

第５条　委員会は、委員の３分の２以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の３分の２以上をもって決する。

（委員以外の者の出席）

第６条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことが出来る。

（調査委員会）

第７条　委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行なうため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第８条　調査委員会は、次の事項を審議する。

(1)　調査実施計画に関すること。

(2)　第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。

(3)　第13条に規定する調査室の予算に関すること。

(4)　その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第９条　調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

(1)　各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選任された者各１名

(2)　第15条２項に規定する調査室長

2　前項第１号の委員の任期は２年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条　調査委員会に委員長を置き、前項第１項第１号の委員の中から互選により選出する。

2　委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条　調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条　調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

（調 査 室）

第13条　調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行なうための埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

第14条　調査室は、次の業務を行なう。

(1)　調査実施計画の立案

(2)　発掘調査、分布調査及び確認調査

(3)　調査報告書の作成

(4)　その他必要な事項

第15条　調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2　室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3　室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4　室長の任期は２年とする。ただし、再任を妨げない。

5　主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6　主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7　職員は、調査室の業務に従事する。

（その他）

第16条　埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行なう。

付　　則

1　この規則は、昭和60年４月18日から施行する。

2　この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第９条第２項及び第15条第４項の規定にかかわらず、昭和62年３月31日までとする。

3　鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則（昭和51年１月22日制定）は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員（平成元年４月１日現在）

委員長　井形　昭弘（鹿児島大学学長）

委　員　五味　克夫（法文学部長）　　浅地　　明（教育学部長）

　　早坂　祥三（理学部長）　　松本　　啓（医学部長）

仙波　輝彦（歯学部長）　立川　正夫（工学部長）
植木　健至（農学部長）　岩切　成郎（水産学部長）
荒川　　譲（教養部長）　伊藤　三郎（連合農学研究科長）
朝倉　哲彦（医学部附属病院長）　税所　俊郎（附属図書館長）
河野　岩造（学生部長）　野井倉武憲（歯学部附属病院長）
伊藤才一郎（事務局長）

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成元年4月1日現在）

委員長　難波　直彦（農学部教授）
委　員　髙尾　達哉（法文学部助教授）　安藤　　保（教育学部教授）
稲田　浩一（理学部講師）　秋山　伸一（医学部教授）
徳永美知子（歯学部教授）　入佐　俊幸（工学部教授）
中村　　薫（水産学部助教授）　新田　栄治（教養部助教授）
上村　俊雄（調査室長併任　法文学部教授）

・鹿児島大学埋蔵文化財調査室（平成元年4月1日現在）

室長（併）　法文学部教授　上村　俊雄
主任（併）　法文学部助手　松永　幸男
技術補佐員　砂田　光紀
技術補佐員　中村　直子

受贈図書目録（1989年2月1日～1990年1月31日）

書　　名	発行機関	発行年
単行本		
大阪の埴輪窯	財団法人大阪文化財センター	1989年
大阪市の文化財	財団法人大阪市文化財協会	1989年
祇園精舎	関西大学	1989年
山口大学埋蔵文化財資料館要覧	山口大学埋蔵文化財資料館	1989年
佐賀県遺跡概要図	佐賀県教育庁文化課	1987年
記録并聞書扣帳	別府大学付属博物館	1989年
おもちゃの歴史　第５回特別展図録	大分市歴史資料館	1989年
川内市歴史資料館資料目録(４)[美術・工芸]	川内市歴史資料館	1989年
定期刊行物・雑誌		
調査年報Ⅰ　昭和63年度	財団法人北海道埋蔵文化財センター	1989年
年報８　昭和63年度	財団法人茨城県教育財団	1989年
歴史人類　第17号	筑波大学歴史・人類学系	1989年
君津郡市文化財センター年報No.６－昭和62年度－	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
君津郡市文化財センター年報No.７－昭和63年度－	財団法人君津郡市文化財センター	1989年
神奈川県立埋蔵文化財センター年報８	神奈川県立埋蔵文化財センター	1989年
金大考古　第16号	金沢大学考古学研究室	1989年
金大考古　第17号	金沢大学考古学研究室	1989年
福井県立博物館紀要　第３号	福井県立博物館	1989年
ふくいミュージアム　No.16	福井県立博物館	1989年
長野県埋蔵文化財センター年報５	財団法人長野県埋蔵文化財センター	1988年
長野県埋蔵文化財ニュース　No.27	財団法人長野県埋蔵文化財センター	1989年
名古屋市博物館研究紀要　第12巻　昭和63年度	名古屋市博物館	1989年
名古屋市博物館だより　67	名古屋市博物館	1989年
名古屋市博物館だより　68	名古屋市博物館	1989年
名古屋市博物館だより　69	名古屋市博物館	1989年
名古屋市博物館だより　70	名古屋市博物館	1989年
名古屋市博物館だより　71	名古屋市博物館	1989年
滋賀埋文ニュース　第112号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第113号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第114号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第115号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第116号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第117号	滋賀県埋蔵文化財センター	1989年
滋賀埋文ニュース　第118号	滋賀県埋蔵文化財センター	1990年
京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度	京都大学埋蔵文化財研究センター	1989年

京都府埋蔵文化財情報　第31号	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	1989年
京都府埋蔵文化財情報　第32号	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	1989年
京都府埋蔵文化財情報　第33号	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	1989年
枚方市文化財年報Ⅸ	財団法人枚方市文化財研究調査会	1989年
ひらかた文化財だより	財団法人枚方市文化財研究調査会	1989年
ひらかた文化財だより	財団法人枚方市文化財研究調査会	1990年
東大阪市文化財協会ニュースVol. 4, No. 2	財団法人東大阪市文化財協会	1989年
東大阪市文化財協会ニュースVol. 4, No. 3	財団法人東大阪市文化財協会	1989年
八尾市文化財調査研究会年報　昭62年度	財団法人八尾市文化財調査研究会	1988年
大阪市文化財情報　葦火　20号	財団法人大阪市文化財協会	1989年
大阪市文化財情報　葦火　21号	財団法人大阪市文化財協会	1989年
大阪市文化財情報　葦火　22号	財団法人大阪市文化財協会	1989年
大阪市文化財情報　葦火　23号	財団法人大阪市文化財協会	1989年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 6　1988年度	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1989年
岡山理科大学蒜山研究所研究報告　第14号	岡山理科大学蒜山研究所	1988年
広島県立歴史博物館ニュース　創刊号	広島県立歴史博物館	1990年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅶ	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	1989年
徳島県博物館紀要　第20集　昭和63年度	徳島県博物館	1989年
九州文化史研究所紀要　第34号〔考古学関係抜刷集〕	九州大学文学部九州文化史研究施設	1989年
福岡市歴史資料館研究報告　第13集	福岡市歴史資料館	1989年
福岡市歴史資料館年報　No.16　昭和62年度	福岡市歴史資料館	1989年
宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1988年
USA SITE MUSEUM NEWS　No.18	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1988年
USA SITE MUSEUM NEWS　No.19	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1989年
別府大学付属博物館だより　No.33	別府大学付属博物館	1989年
別府大学付属博物館だより　No.34	別府大学付属博物館	1989年
大分市歴史資料館年報　1988	大分市歴史資料館	1988年
大分市歴史資料館ニュース　4	大分市歴史資料館	1989年
大分市歴史資料館ニュース　5・6	大分市歴史資料館	1989年
大分市歴史資料館ニュース　7	大分市歴史資料館	1989年
人類史研究　第7号	人類史研究会	1988年
南九州縄文研究通信　No. 2	南九州縄文研究会	1989年
川内市歴史資料館年報　昭和63年度	川内市歴史資料館	1989年
南太平洋研究　Vol. 9, No. 1・2	鹿児島大学南太平洋海域研究センター	1988年
鹿児島大学南太平洋海域研究センター南太平洋海域調査研究報告16	鹿児島大学南太平洋海域研究センター	1989年
鹿児島大学南科研資料センター報告　第42号	鹿児島大学南科研資料センター	1989年
県立博物館総合調査報告書Ⅵ－与那国島（よなぐにじま）－	沖縄県立博物館	1989年
沖縄県立博物館紀要　第15号	沖縄県立博物館	1989年

沖縄県立博物館年報　No.22	沖縄県立博物館	1989年

調査報告書

釧路市材木町5遺跡調査報告書	北海道釧路市埋蔵文化財調査センター	1989年
主要地方道茨城・鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書（梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳）	財団法人茨城県教育財団	1988年
主要地方道土浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書（神明城跡）	財団法人茨城県教育財団	1988年
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18 南三島遺跡3・4区（Ⅱ）	住宅整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団	1989年
一般国道6号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　奥谷遺跡・小鶴遺跡（上）・（下）	財団法人茨城県教育財団	1989年
一般国道4号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2（結城地区）本田遺跡・善長寺遺跡・小田林・遺跡	財団法人茨城県教育財団	1989年
常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1沢田遺跡	財団法人茨城県教育財団	1989年
境No.2遺跡	財団法人君津郡市文化財センター	1985年
永末台遺跡群	東急不動産株式会社・財団法人君津郡市文化財センター	1985年
千葉県富津市岩井作横穴墓群	株式会社鋸南実業・財団法人君津郡市文化財センター	1985年
箕輪富士塚群	財団法人君津郡市文化財センター	1987年
金谷城跡	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
四留作台古墳群第1号墳	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
明石口遺跡／中金谷遺跡	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
蓮華寺遺跡	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
小浜遺跡群Ⅰ　俵ヶ谷古墳群	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
花山遺跡	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
東天王台遺跡	財団法人君津郡市文化財センター	1988年
千葉県君津市臼井台北遺跡	株式会社亀山カントリー倶楽部・財団法人君津郡市文化財センター	1988年
千葉県袖ヶ裏町打越岱遺跡	出光興産株式会社中央研究所・財団法人君津郡市文化財センター	1989年
千葉県袖ヶ裏町　境遺跡　第2次調査	袖ヶ裏町・君津郡市文化財センター	1989年
千葉県君津市星谷上古墳・畑沢遺跡（第2次調査）	株式会社アトス・財団法人君津郡市文化財センター	1989年
東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1　東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点	東京大学遺跡調査室	1989年
神奈川県埋蔵文化財調査報告31	神奈川県教育委員会	1989年
神奈川県文化財調査報告書　第48集	神奈川県教育委員会	1989年

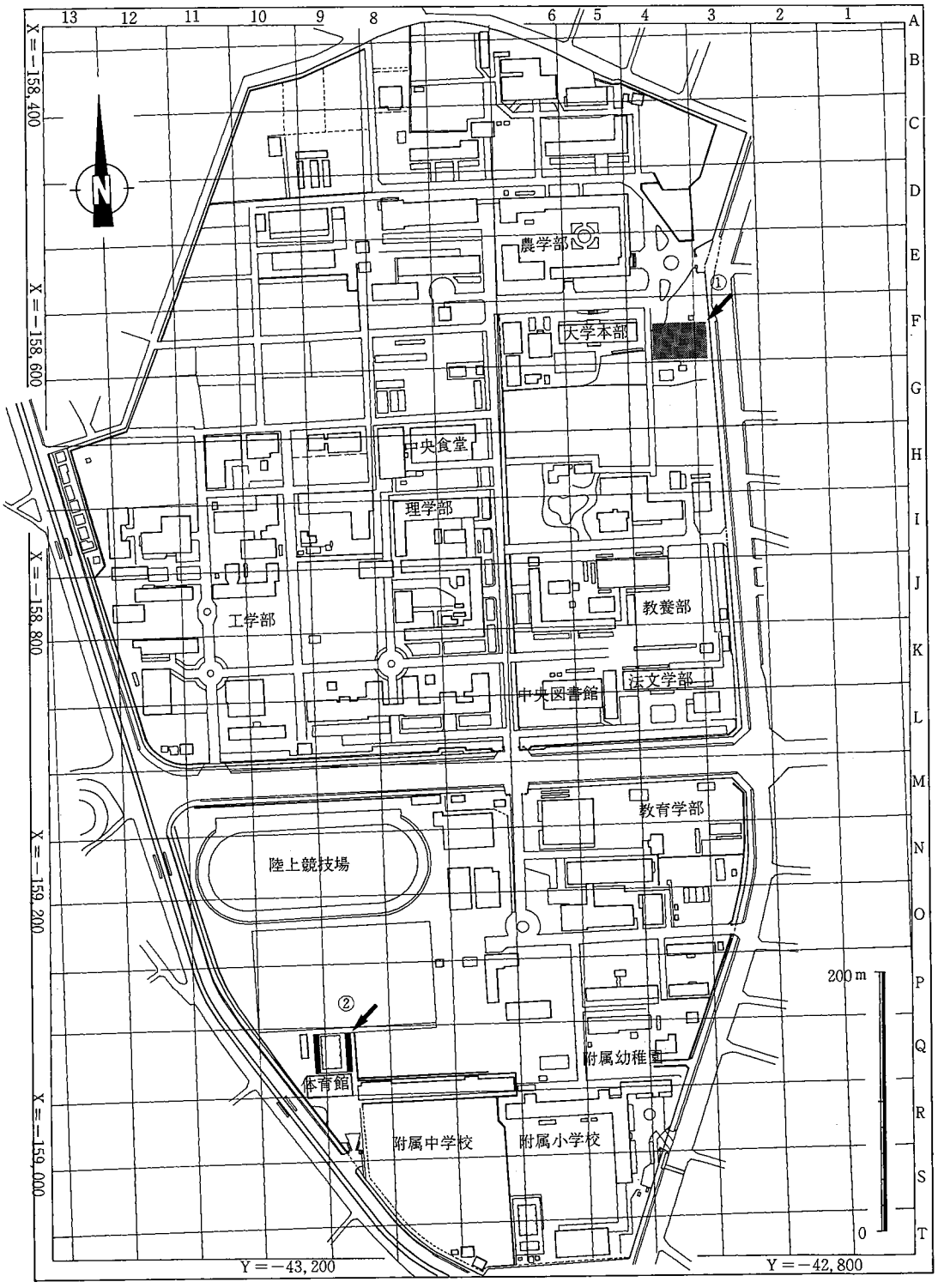
草山遺跡Ⅱ	神奈川県立埋蔵文化財センター	1989年
砂田台遺跡Ⅰ	神奈川県立埋蔵文化財センター	1989年
下鶴間甲一号遺跡	下鶴間甲一号遺跡調査団	1988年
下鶴間甲一号遺跡　第２次調査	下鶴間甲一号遺跡調査団	1989年
神奈川県大和市下鶴間甲一号遺跡－Ⅲ・Ⅳ地区の出土遺物－	下鶴間甲一号遺跡調査団	1989年
神明久保遺跡－第３地区－	神明久保遺跡調査団	1989年
海老名本郷（Ⅶ）	富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団	1989年
角間　金沢大学総合移転用地内埋蔵文化財調査報告	金沢大学総合移転地実施特別委員会遺跡調査委員会	1989年
鴨谷東１号墳第２次発掘調査概報	立命館大学文学部	1989年
平城京東市跡推定地の調査Ⅶ　第９次発掘調査概報	奈良市教育委員会	1989年
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和63年度	奈良市教育委員会	1989年
嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要13	高槻市教育委員会	1989年
東大阪市文化財協会概報集　1988年度	財団法人東大阪市文化財協会	1989年
神並遺跡第12次発掘調査概報	財団法人東大阪市文化財協会	1988年
若江遺跡第29次発掘調査報告	財団法人東大阪市文化財協会	1989年
西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡－西ノ辻遺跡第６次・第７次・第８次調査・鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書－	東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会	1988年
鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告	財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会	1988年
鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告	東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会	1988年
小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整備事業に伴う発掘調査－	財団法人八尾市文化財調査研究会	1989年
八尾あれこれ　文化財講座記録集２	財団法人八尾市文化財調査研究会	1989年
八尾南遺跡第２地点の旧石器　付.大阪府八尾南遺跡の堆積物の検討	財団法人八尾市文化財調査研究会	1989年
昭和62年度　大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書	大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会	1989年
国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（夫敷遺跡）	建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会	1989年
国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（石台遺跡）	建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会	1989年
朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区３）	島根県教育委員会	1989年
草戸千軒町遺跡－第37～39次発掘調査概要－	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1987年
京都府平尾城山古墳	山口大学人文学部考古学研究室	1990年
鷹子・樽味遺跡の調査	愛媛大学埋蔵文化財調査室	1989年

三間高校校庭遺跡の調査	愛媛大学法文学部考古学研究室	1989年
小郡中尾遺跡	小郡市教育委員会	1988年
大板井遺跡Ⅷ	小郡市教育委員会	1988年
三国の鼻遺跡Ⅲ	小郡市教育委員会	1988年
津古生掛遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1988年
稲吉元矢次遺跡	小郡市教育委員会	1988年
横隈狐塚遺跡Ⅳ	小郡市教育委員会	1988年
小郡遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1988年
横隈北田遺跡	小郡市教育委員会	1988年
鈴隈１号墳	小郡市教育委員会	1988年
小郡堂の前遺跡	小郡市教育委員会	1989年
三沢京江ヶ浦遺跡	小郡市教育委員会	1989年
津古・空前遺跡	小郡市教育委員会	1989年
北松尾口遺跡Ⅰ地点	小郡市教育委員会	1989年
大崎井牟田遺跡	小郡市教育委員会	1989年
小郡遺跡Ⅲ	小郡市教育委員会	1989年
小郡若山遺跡・干潟遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1989年
干潟遺跡Ⅲ	小郡市教育委員会	1989年
洞ノ上遺跡群Ⅰ	中津市教育委員会	1988年
相原廃寺	中津市教育委員会	1989年
車坂・山下遺跡	宮崎市教育委員会	1989年
蓮ヶ池横穴群　保存整備事業概報Ⅱ	宮崎市教育委員会	1988年
蓮ヶ池横穴群　保存整備事業概報Ⅲ	宮崎市教育委員会	1989年
松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	都城市教育委員会	1989年
母智丘原第１地点・県指定志和池１号墳	都城市教育委員会	1989年
昭和63年度遺跡発掘調査概報　大岩田村ノ前遺跡・久玉遺跡・松原地区第Ⅳ遺跡都城本丸跡・貴船寺跡（尾崎第１遺跡）	都城市教育委員会	1989年
都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内北東部)	都城市教育委員会	1989年
奈留地区遺跡　開尾遺跡・留ヶ宇戸遺跡	串間市教育委員会	1989年
村山闇谷遺跡発掘調査報告書	人吉市教育委員会	1988年
史跡人吉城跡Ⅲ	人吉市教育委員会	1988年
史跡人吉城跡Ⅳ	人吉市教育委員会	1989年
一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅱ）	鹿児島県教育委員会	1989年
奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅰ　昭和62年度	鹿児島県教育委員会	1989年
和田川及び波見川局部改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　下伊倉城跡・下伊倉遺跡	鹿児島県教育委員会	1989年
榎木原遺跡Ⅱ	鹿児島県教育委員会	1989年
鹿児島市中世城館跡	鹿児島市教育委員会	1989年

大畑平遺跡	鹿屋市教育委員会	1989年
岡泉（Ⅰ）遺跡	鹿屋市教育委員会	1989年
岡泉（Ⅱ）遺跡	鹿屋市教育委員会	1989年
神野牧遺跡	鹿屋市教育委員会	1989年
谷平遺跡	鹿屋市教育委員会	1989年
法ヶ崎遺跡	霧島町教育委員会	1989年
界子仏遺跡・高天原遺跡	牧園町教育委員会	1989年
上屋久町の埋蔵文化財－遺跡分布調査報告書－	上屋久町教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学研究室	1989年
横峯遺跡	屋久町教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学研究室	1989年
具志頭村玻名城地区の遺跡分布	具志頭村教育委員会	1989年
溝原貝塚	名護市教育委員会	1989年

図　　版

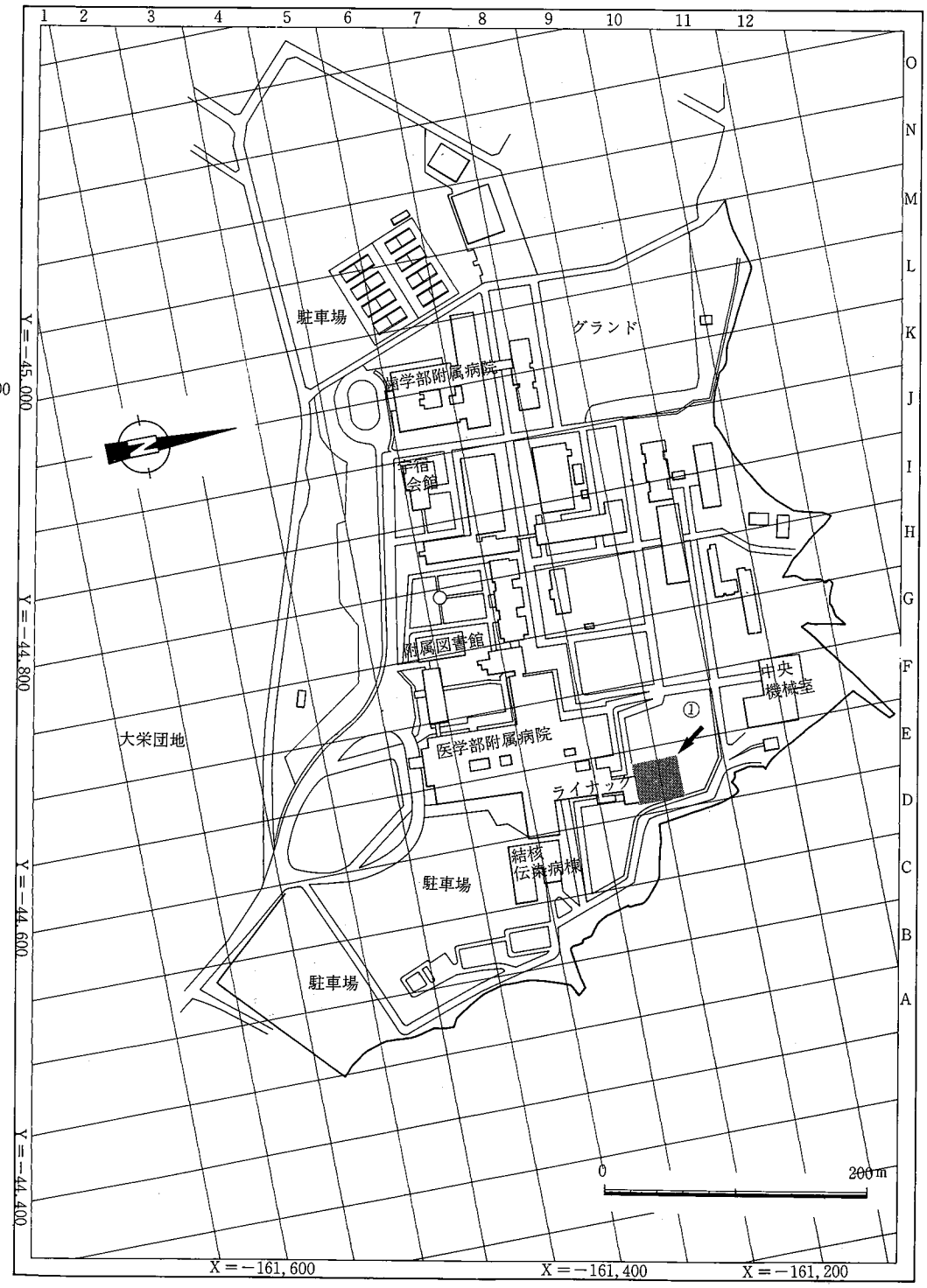
図版1　鹿児島大学郡元団地構内図（1/5000）



① 郡元団地Ｆ－３・４区（農学部大学院連合農学研究科棟建設予定地）発掘調査地点

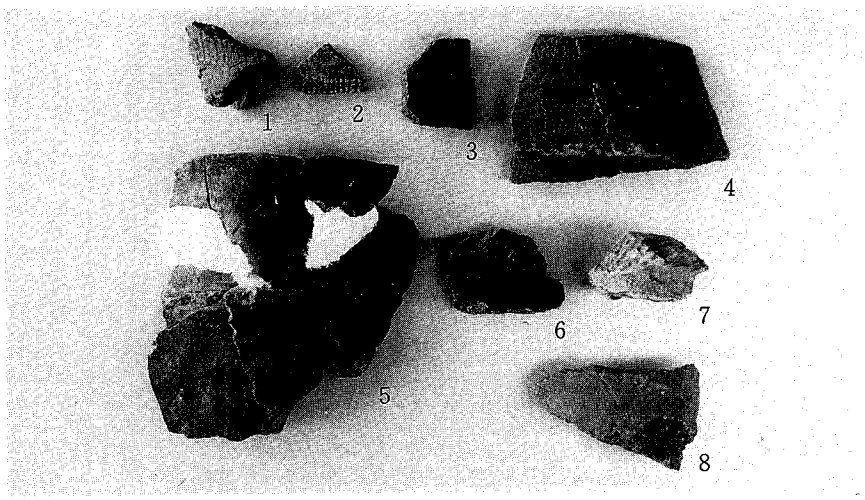
② 郡元団地Ｑ－９・10区（教育学部附属中学校プール上屋新設予定地）発掘調査地点

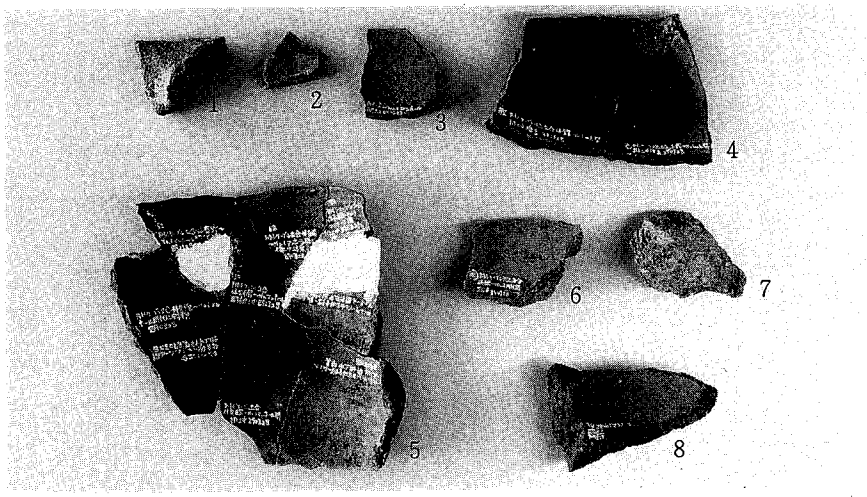
図版2 鹿児島大学宇宿団地構内図（1/5000）

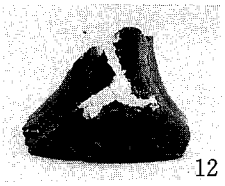


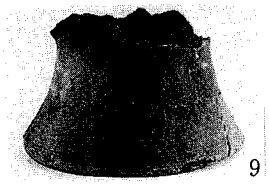
① 宇宿団地Ｅ－８・９区（医学部附属病院ＭＲＩ－ＣＴ棟建設予定地）発掘調査地点

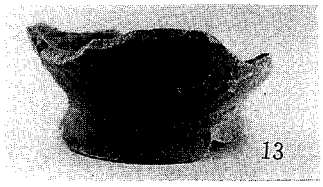
図版3　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点出土遺物（1）

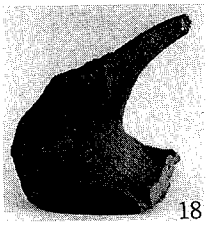


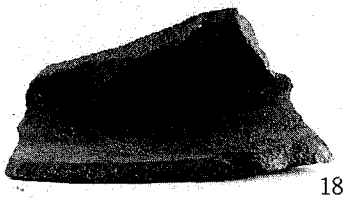






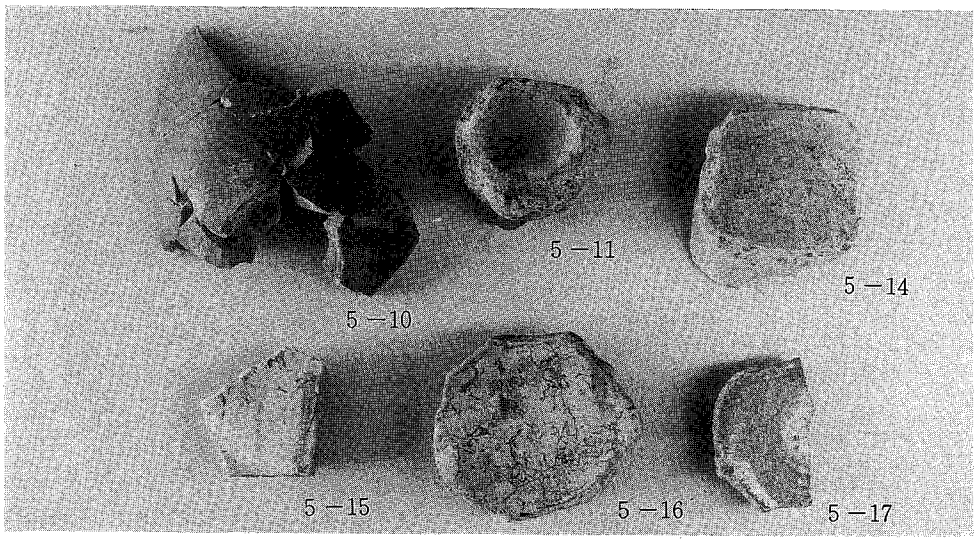


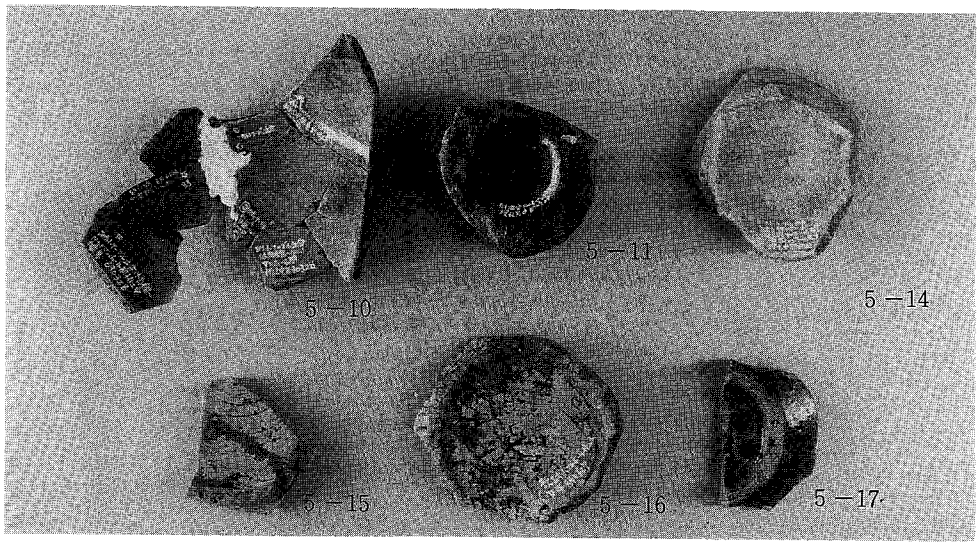


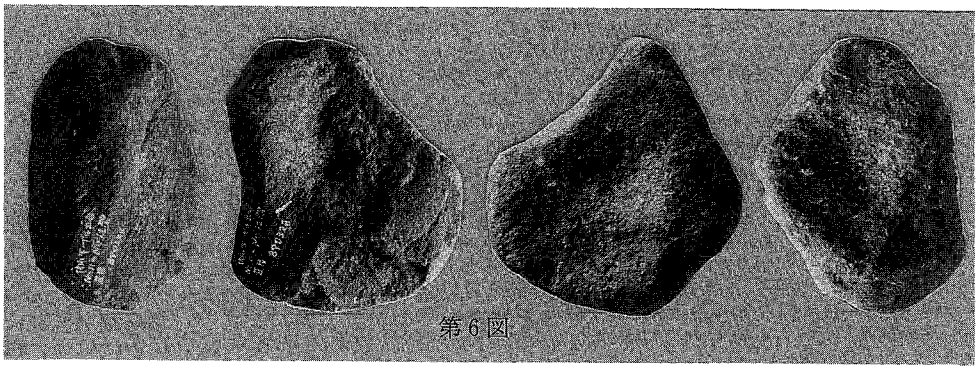


番号は第5図中のそれに一致

図版4　教育学部附属小学校体育館電気引込ケーブル取替工事地点出土遺物（2）

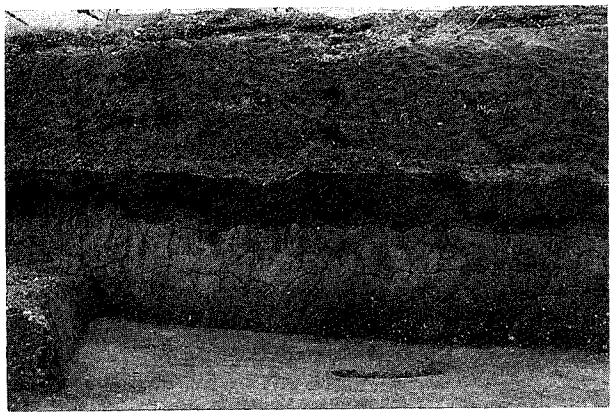






第6図

図版5　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（1）



①

②

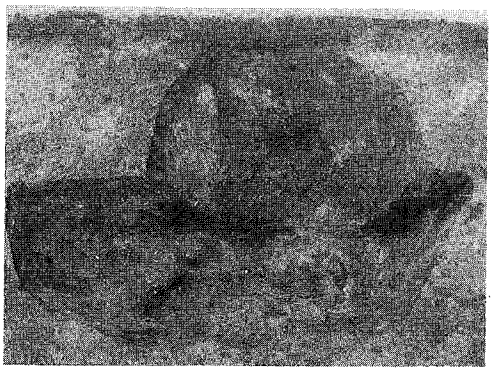
③

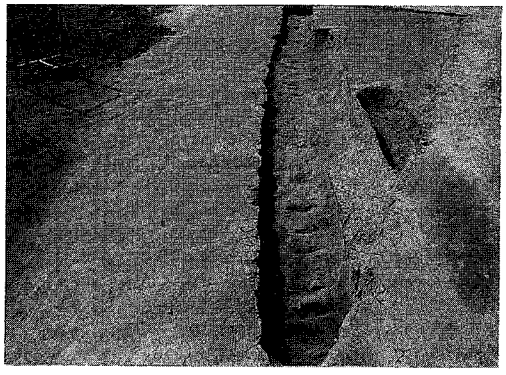
① 調査区西壁土層

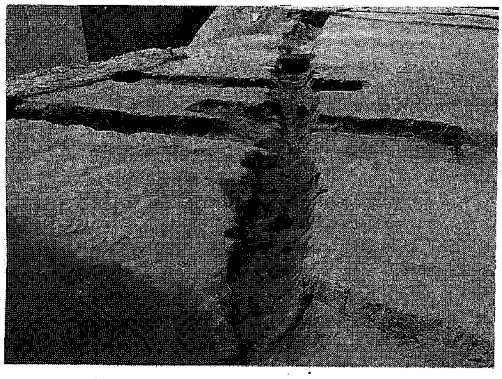
② 調査区北壁土層

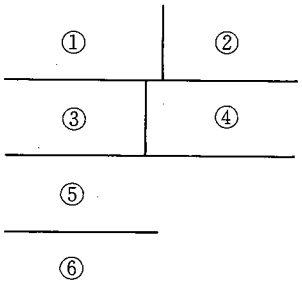
③ 調査区東壁土層

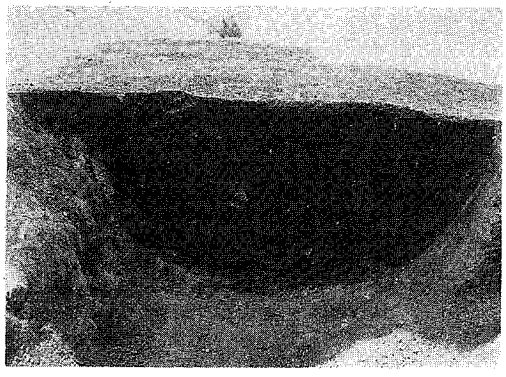
図版6　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（2）





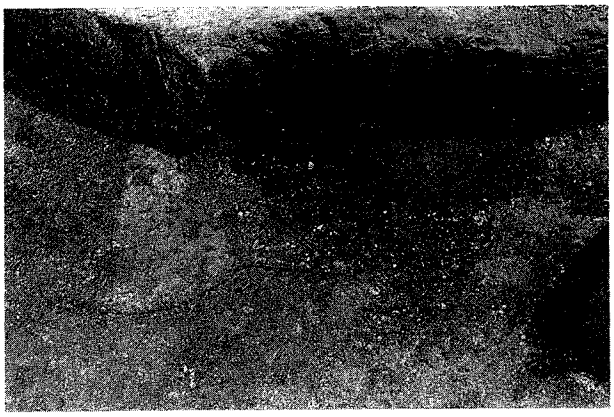


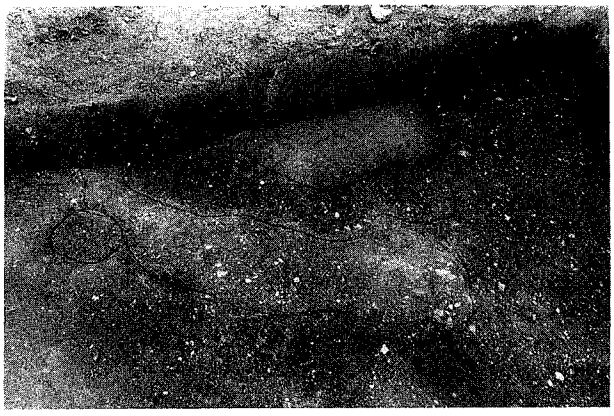




① Ⅱ層上面検出状況（南東から）
② ＳＫ３完掘状況（北から）
③ 現代攪乱坑（北から）
④ ＳＤ17完掘状況（東から）
⑤ ＳＤ４完掘状況（東から）
⑥ ＳＤ４埋土

図版7　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（3）





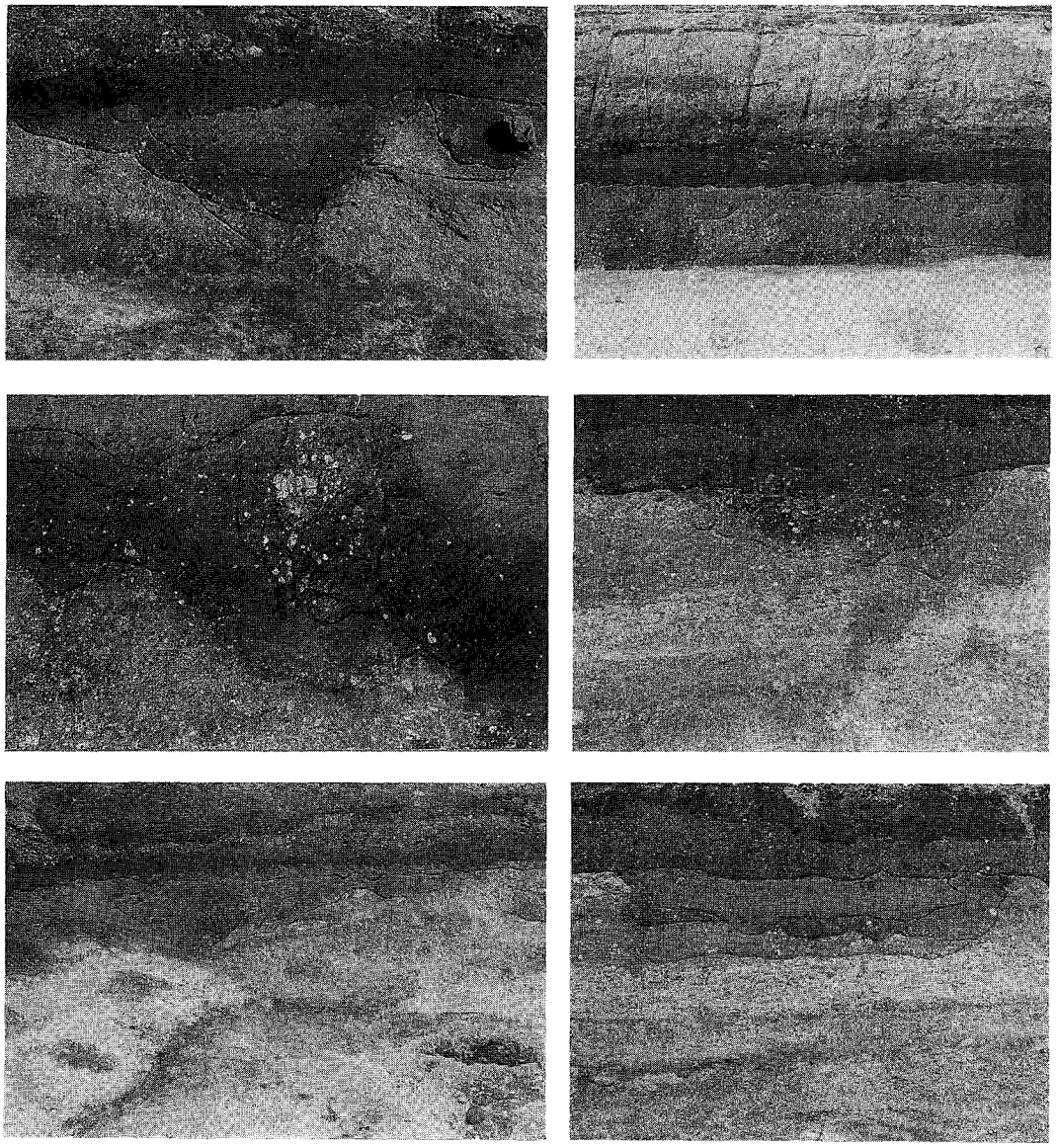
①

②

③

① ＫＤ１（北から）　② ＫＤ２（北から）　③ ＫＤ３（南から）

図版8　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（4）



①	②
③	④
⑤	⑥

① e —③区北壁検出局部断層

② g —①区西壁検出局部断層

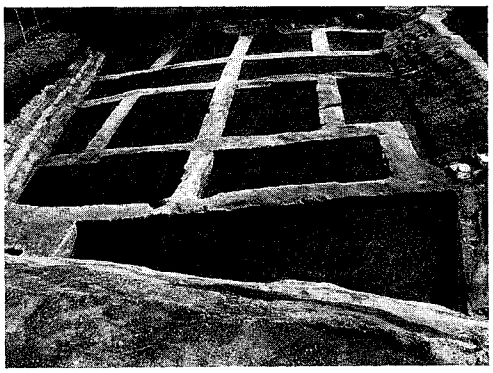
③ g —②・③区西壁検出局部断層

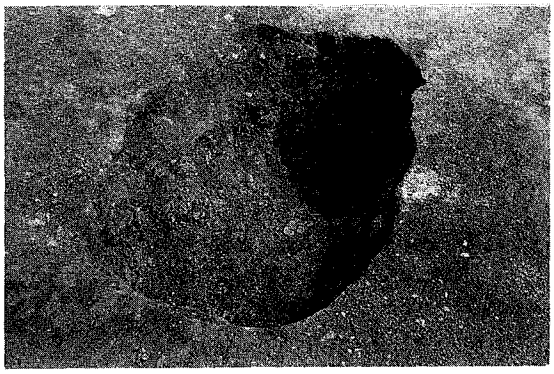
④ d —⑨区東壁検出局部断層

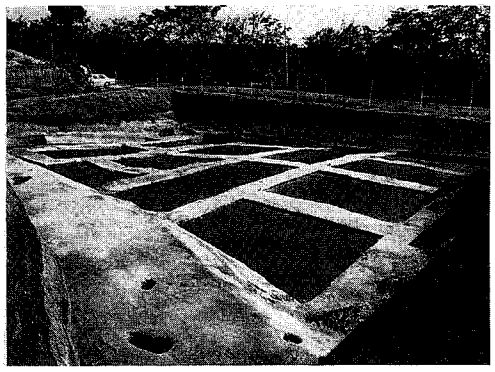
⑤ d —②区東壁検出局部断層

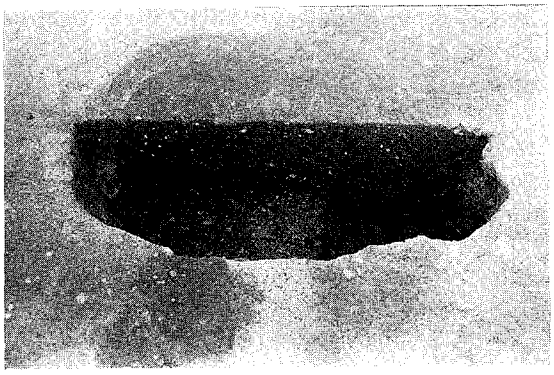
⑥ d —⑧区東壁検出局部断層

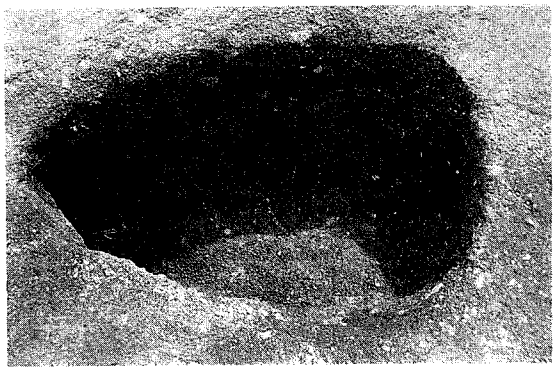
図版9　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（5）











①	⑤
②	⑥
③	
④	

① Ⅳ層上面検出遺構（南から）

② ＳＫ４完堀状況（西から）

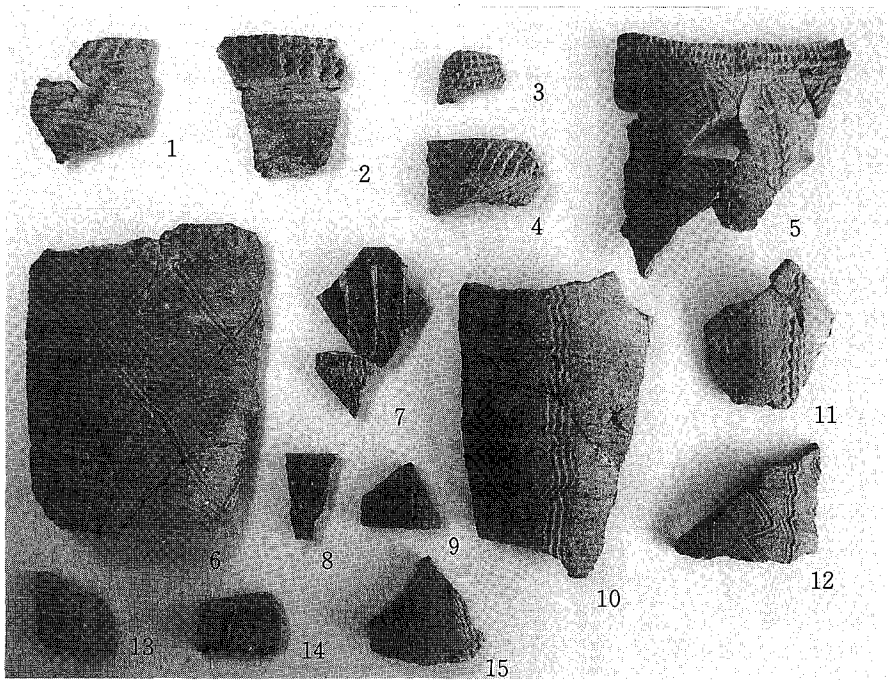
③ ＳＫ４埋土

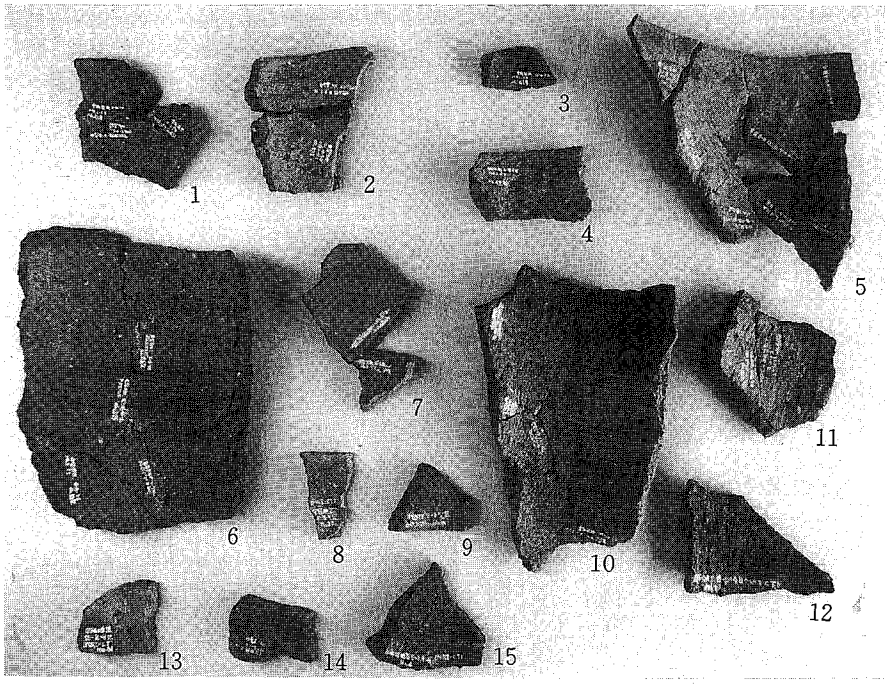
④ ＳＫ５完堀状況（北東から）

⑤ Ⅴ層掘り下げ状況（北から）

⑥ Ⅴ層掘り下げ状況（南西から）

図版10　鹿児島大学宇宿団地E—8・9区（6）



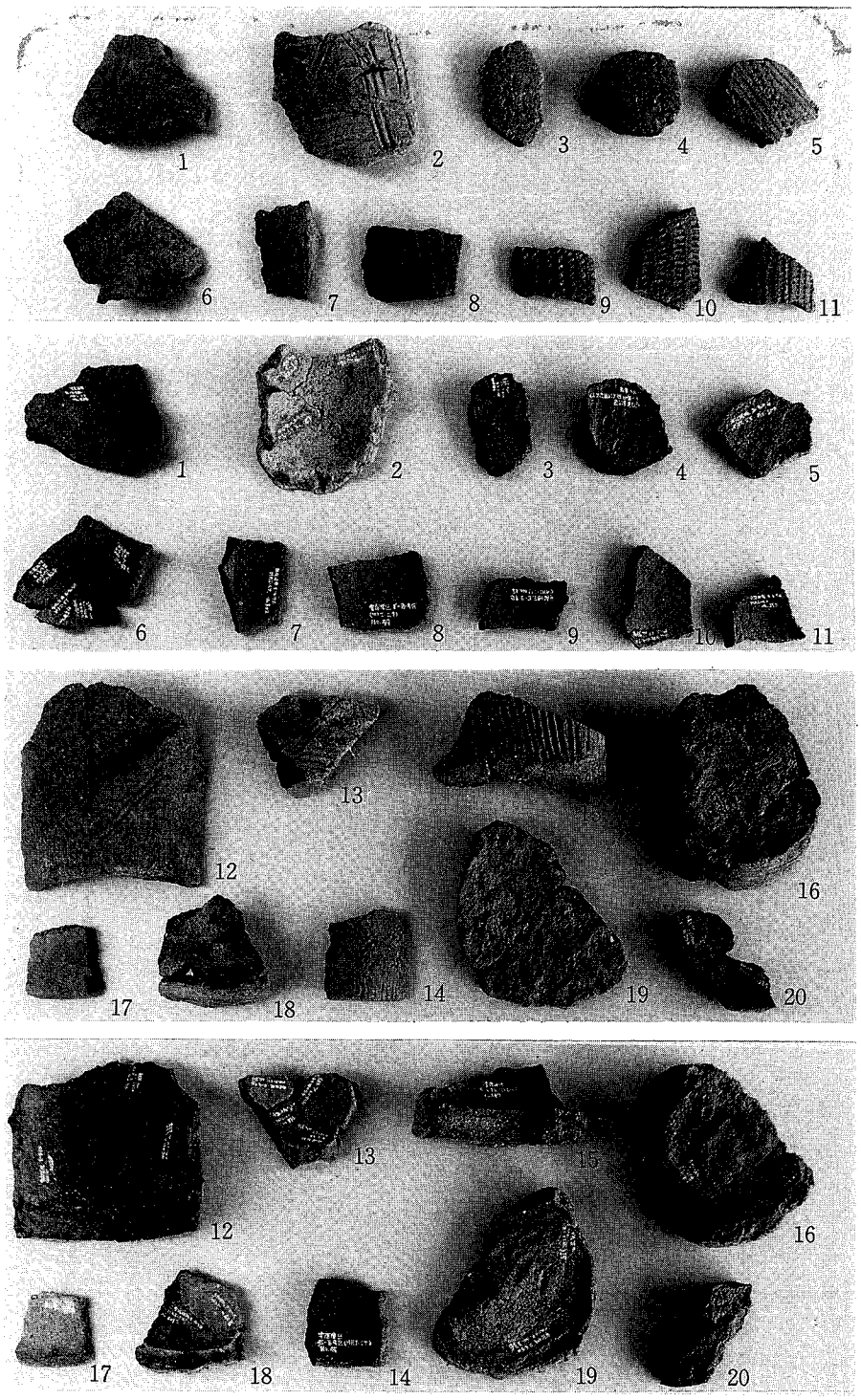


①

②

① 第19図　1～15(外面)

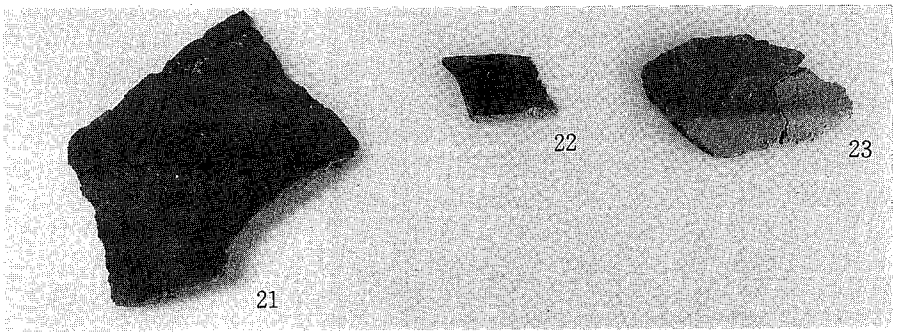
② 第19図　1～15(内面)

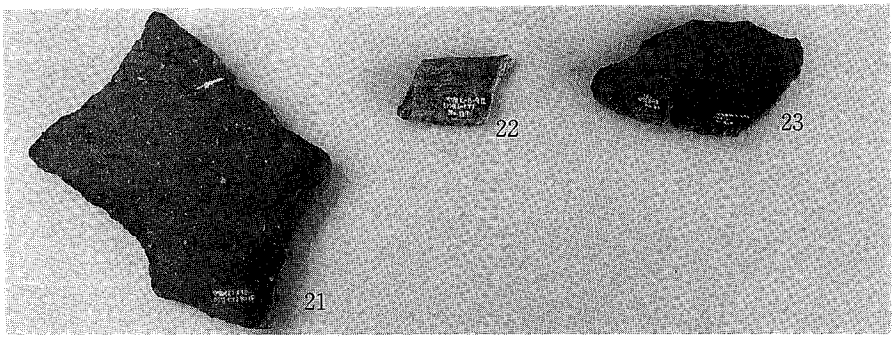


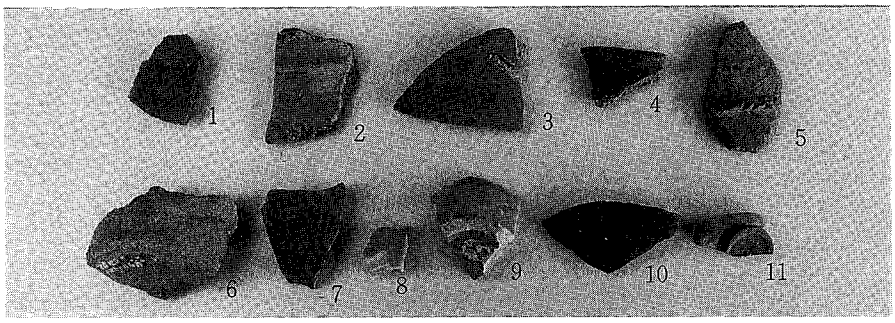
①
②
③
④

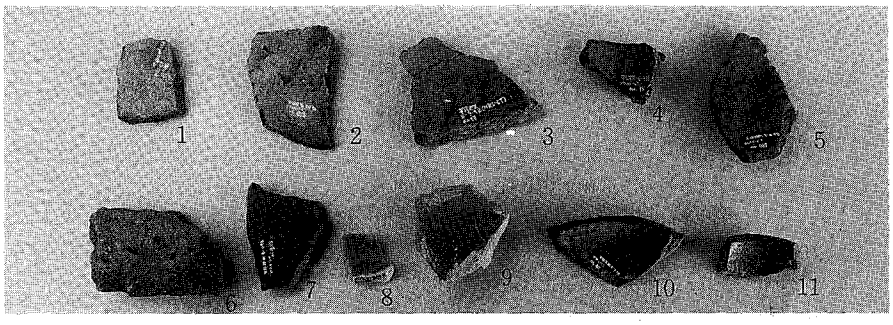
① 第20図　1～11（外面）　② 第20図　1～11（内面）

③ 第20図　12～20（外面）　④ 第20図　12～20（内面）









①

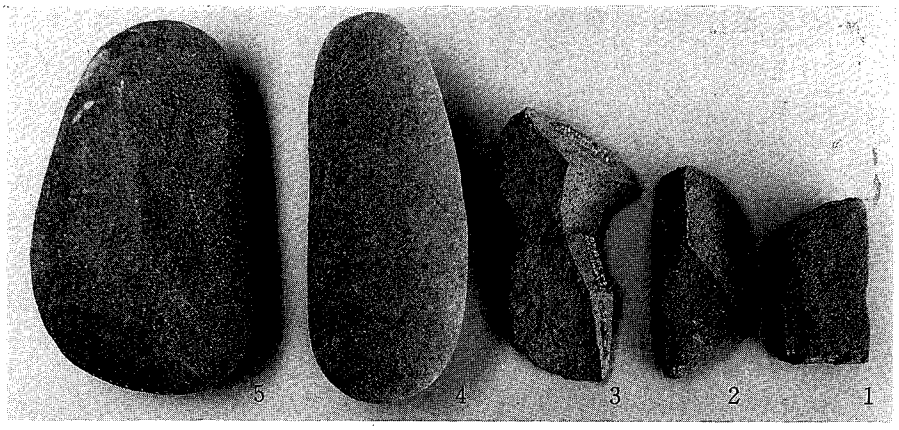
②

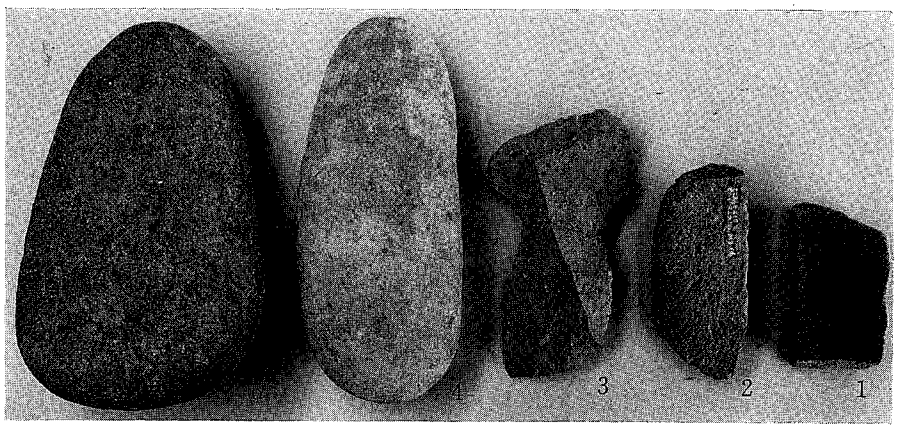
③

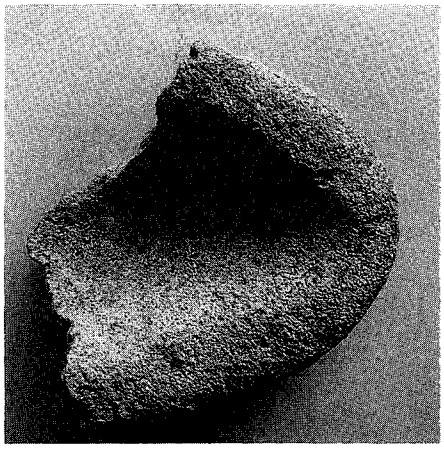
④

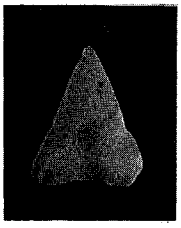
① 第20図　21～23（外面）　② 第20図　21～23（内面）

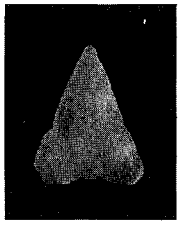
③ 第21図　1～11（外面）　④ 第21図　1～11（内面）

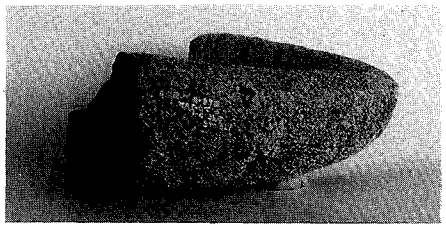


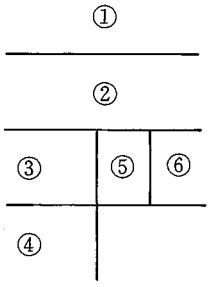












① ②第22図　1～5

③ ④第22図　6

⑤ ⑥第23図　2

図版14　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（1）

①

②

③

④

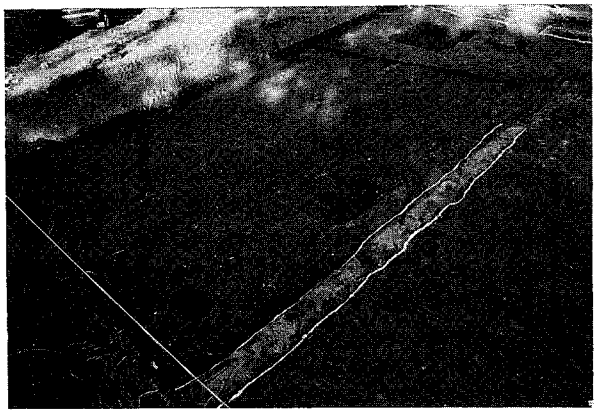
① b—④区北壁土層

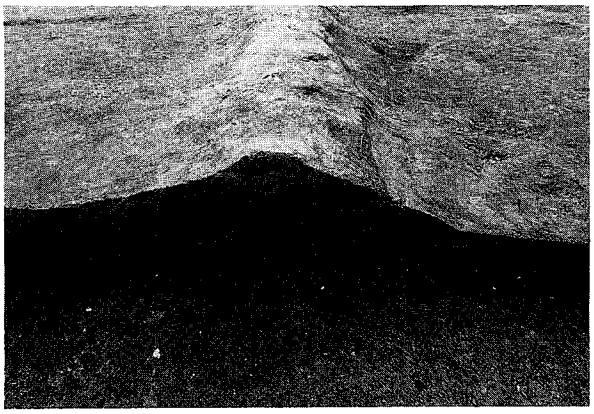
② g—④区西壁土層

③ g—②・③区西壁土層

④ g—②区西壁土層

図版15　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（2）





①

②

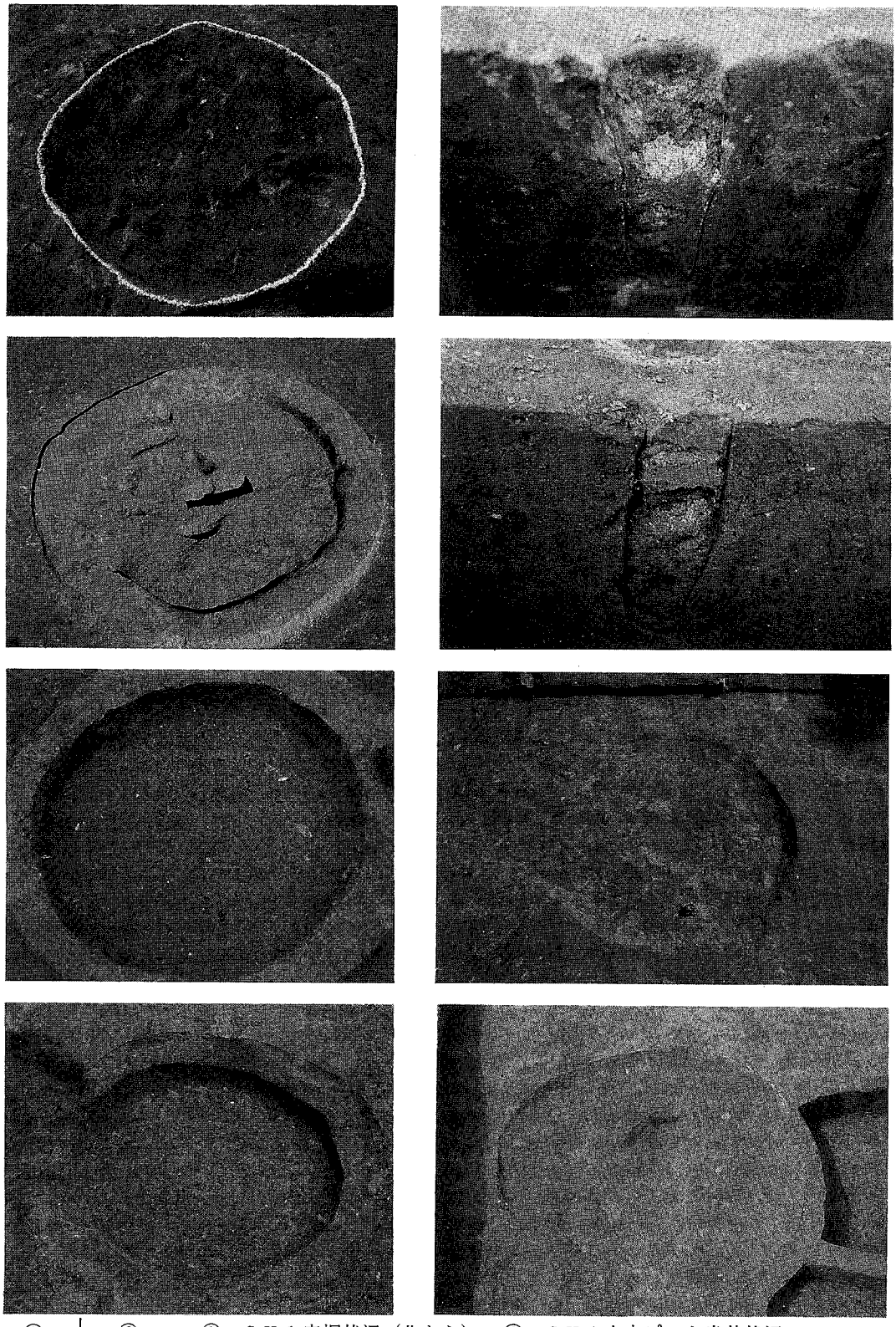
③

① Ⅱｂ層上面検出状況（西から）

② Ⅱｂ層上面検出畦畔（ＡＺ２）及び畝（南西から）

③ Ⅱｂ層上面検出畦畔（ＡＺ１）横断面

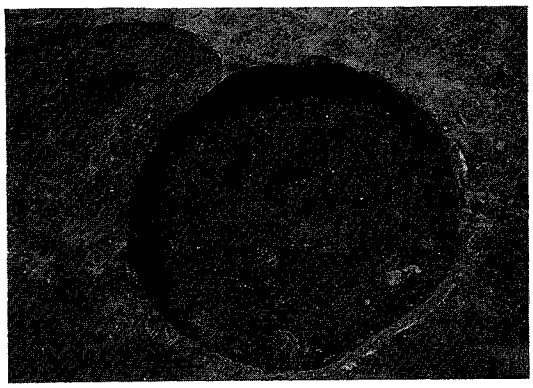
図版16　鹿児島大学郡元団地F－3・4区（3）

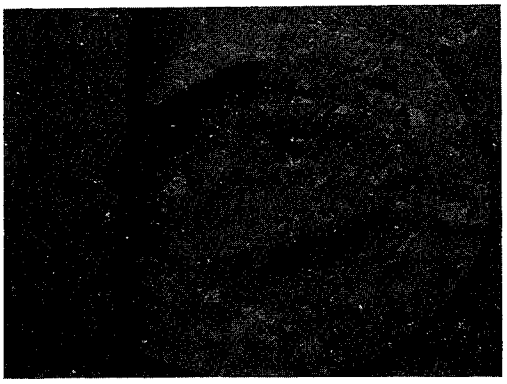


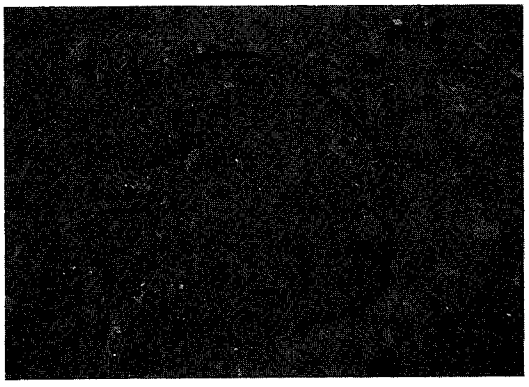
①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

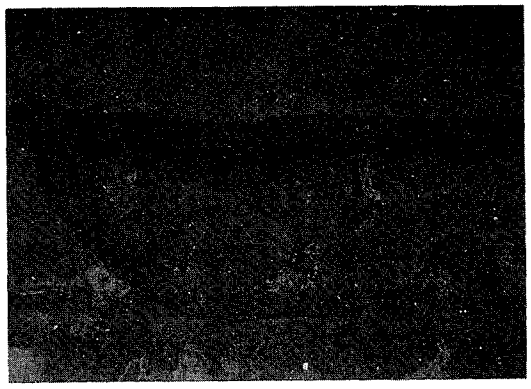
① ＳＫ１完掘状況（北から）　② ＳＫ１中央ピット半截状況
③ ＳＫ２完掘状況（南から）　④ ＳＫ２中央ピット半截状況
⑤ ＳＫ３完掘状況（西から）　⑥ ＳＫ４完掘状況（東から）
⑦ ＳＫ５完掘状況（北から）　⑧ ＳＫ６完掘状況（西から）

図版17　鹿児島大学郡元団地F－3・4区（4）





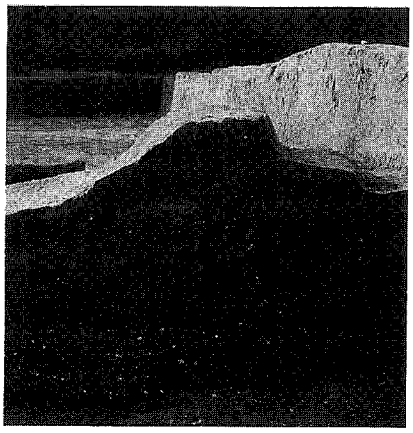


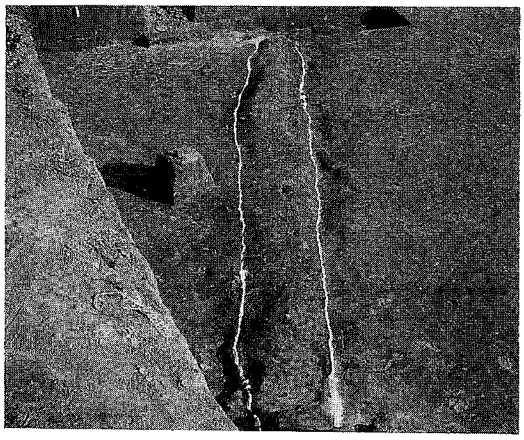


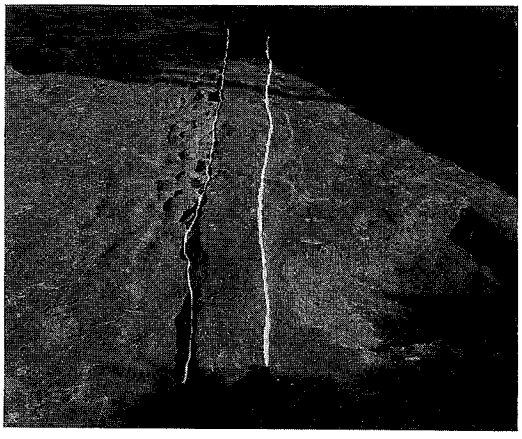
①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	

① ＳＫ７完掘状況(西から)
② ＳＫ８完掘状況(南から)
③ ＳＫ９完掘状況(北から)
④ ＳＫ10完掘状況(東から)
⑤ ＳＫ11完掘状況(西から)
⑥ ＳＫ12完掘状況(南から)
⑦ ＳＫ13完掘状況(北から)

図版18　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（5）





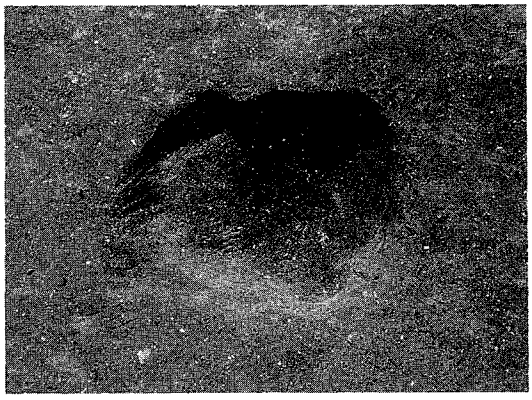


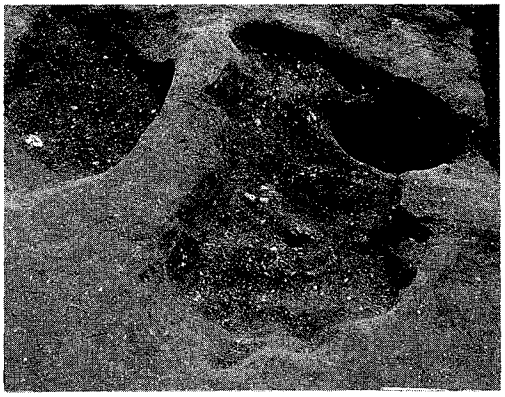
① Ⅲａ層上面検出遺構（西から）　② Ⅲａ層上面検出畦畔（ＡＺ６）横断面

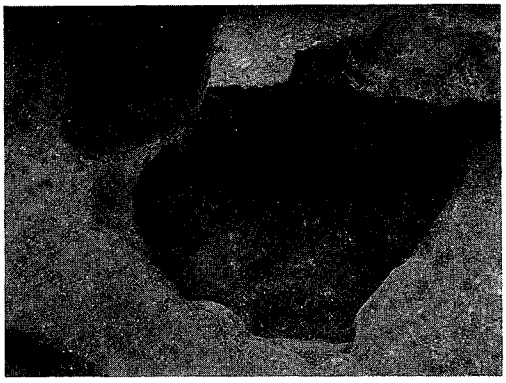
③ ＡＺ３（北西から）　④ ＡＺ５（東から）

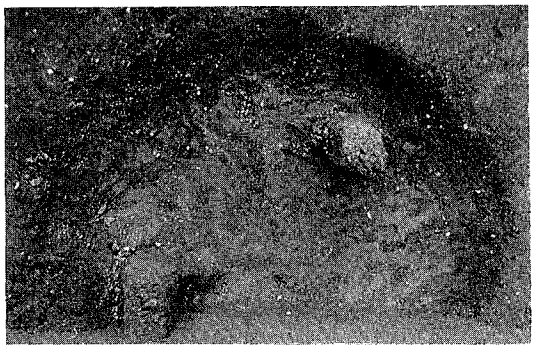
⑤ ＡＺ５（西から）　⑥ ＡＺ６（北から）

①	②
③	④
⑤	⑥





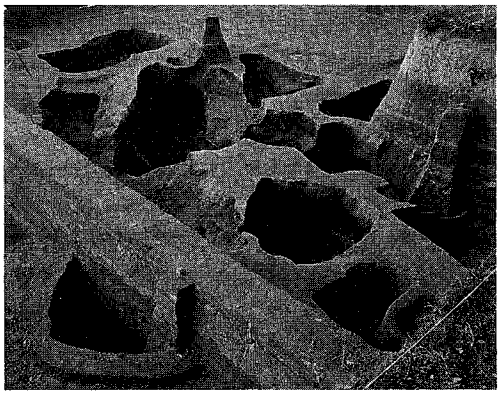




①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	

① 調査区北側段落ち部検出ライン（東から） ② Ⅲc層～Ⅳ層上面検出遺構（東から）
③ ＳＫ15完掘状況（北から） ④ ＳＫ16・ＳＫ17完掘状況（北から）
⑤ ＳＫ24完掘状況（東から） ⑥ ＳＫ19完掘状況（東から） ⑦ ＳＫ21完掘状況(東から)

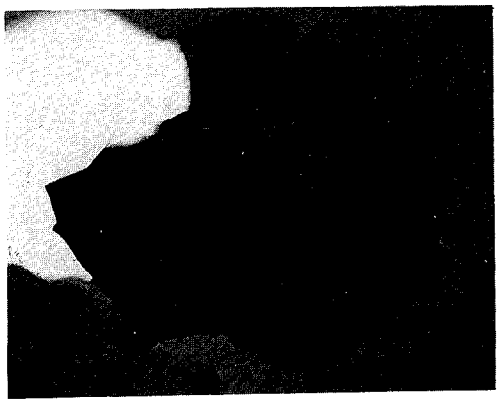
図版20　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（7）

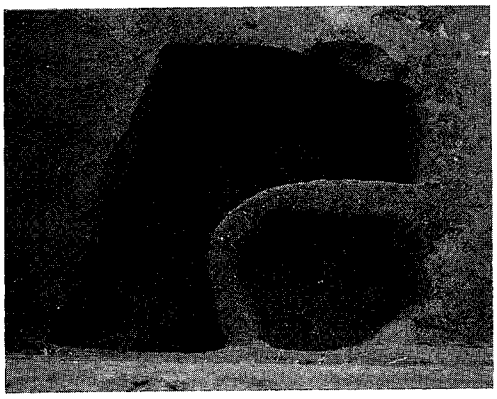


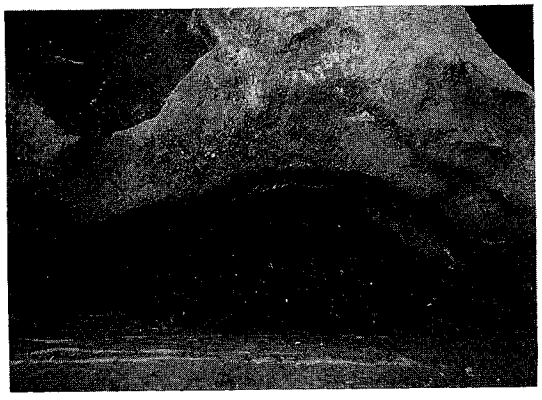
①	④
②	⑤
③	⑥

① ＳＫ20全景（南東から）
② ＳＫ20全景（東から）
③ ＳＫ20Ａ群（東から）
④ ＳＫ20Ｂ群（西から）
⑤ ＳＫ20Ｃ群（Ｃ１～Ｃ３）（北から）
⑥ ＳＫ20Ｃ群（Ｃ４）（東から）

図版21　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（8）







①	③
②	④
⑤	⑥

① ＳＫ20Ｄ（南から）

② ＳＫ20Ｅ（東から）

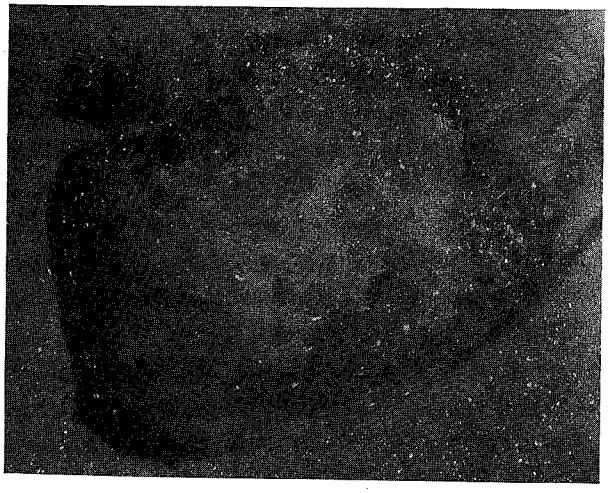
③ ＳＫ20Ｆ群（北から）

④ ＳＫ20Ｇ群（東から）

⑤ ＳＫ20Ｈ群（Ｈ１～Ｈ３）（南から）

⑥ ＳＫ20Ｈ群（Ｈ４）（南から）

図版22　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（9）



①

②

③

④

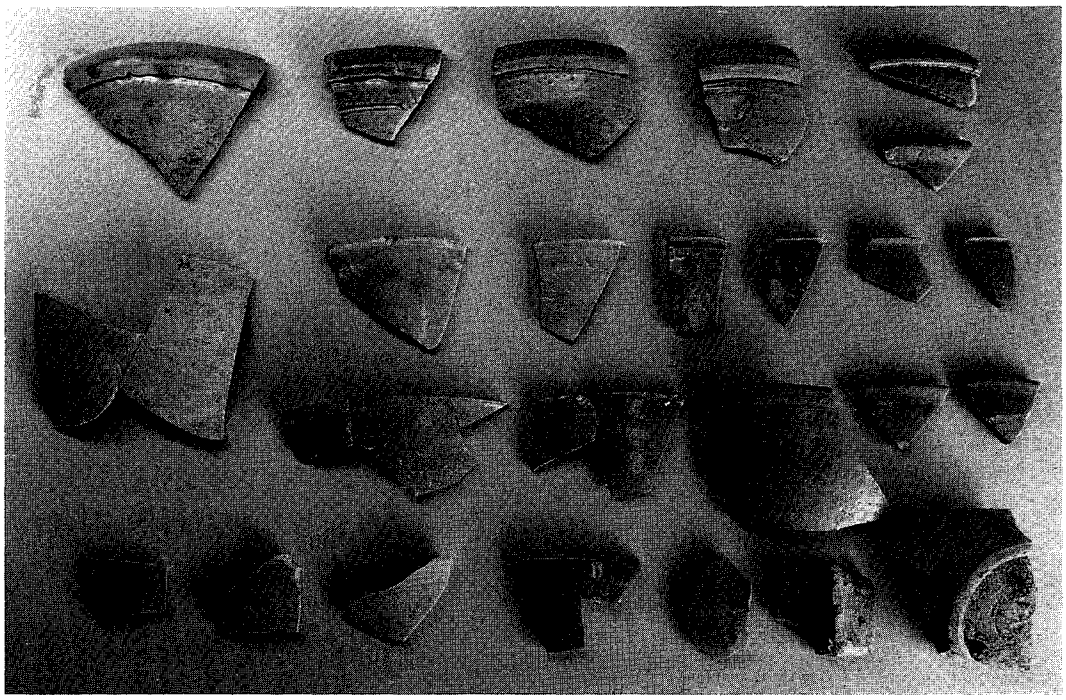
① ＳＫ22完掘状況（東から）

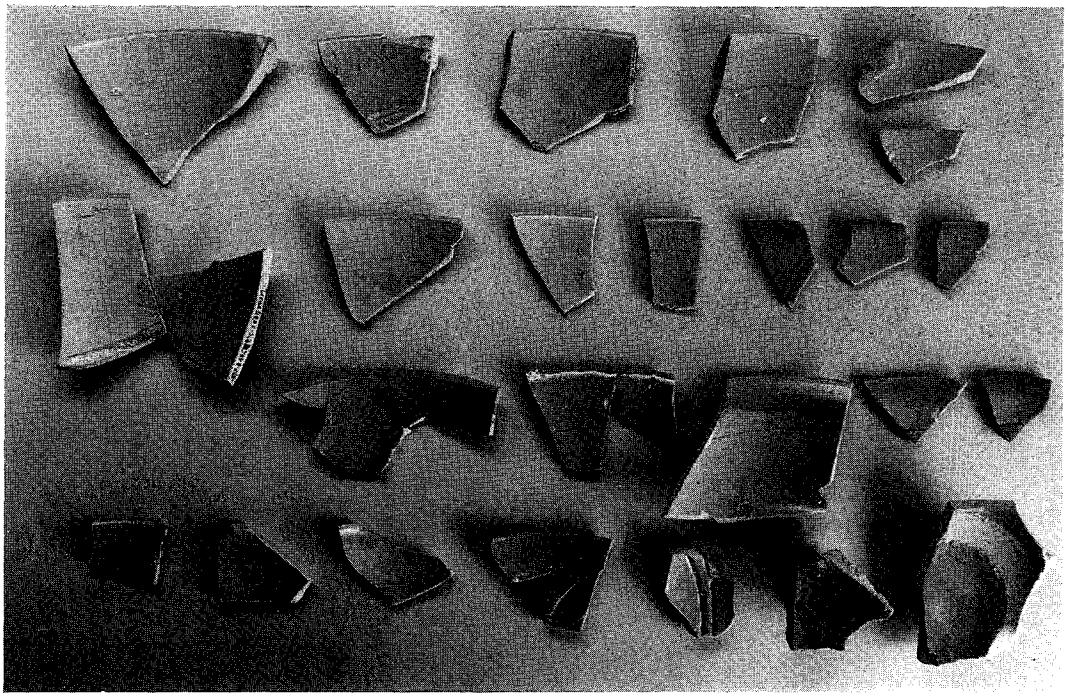
② ＳＫ22埋土

③ ＳＫ23完掘状況（東から）

④ ＳＫ23埋土

図版23　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（10）



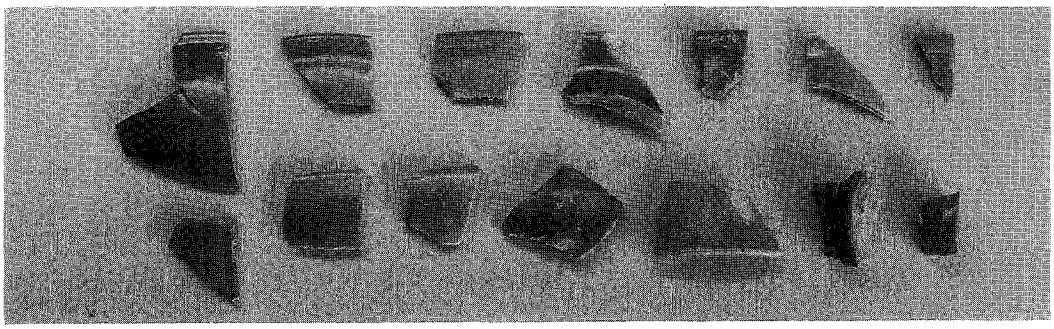


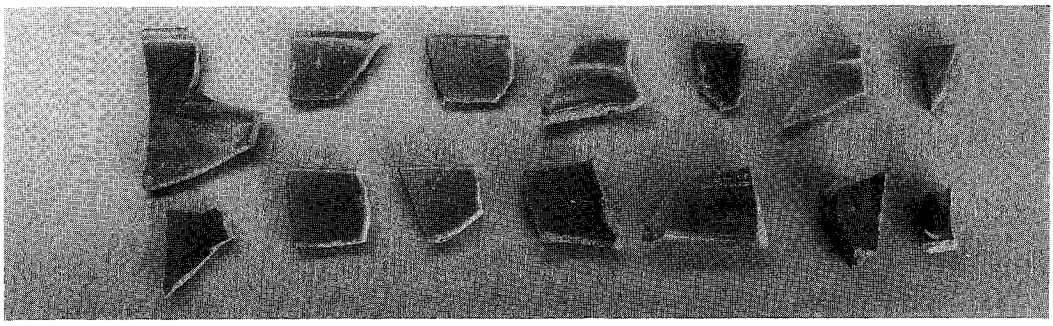
①

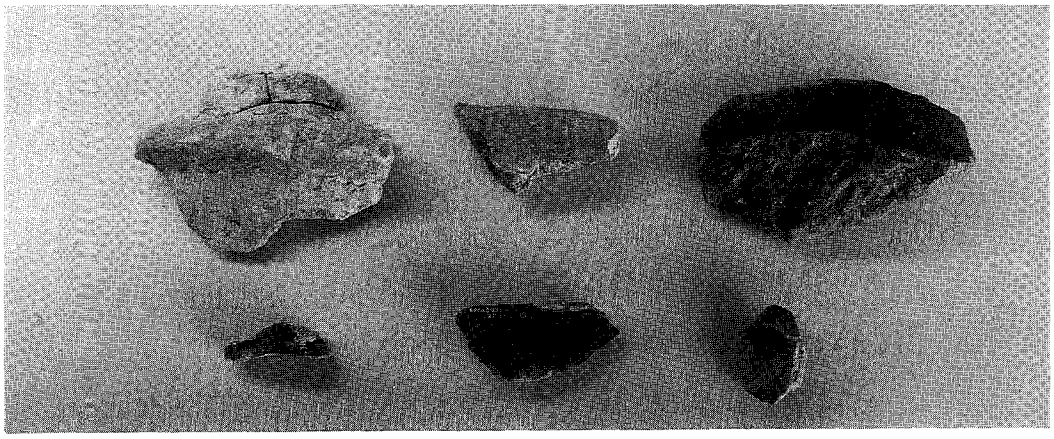
②

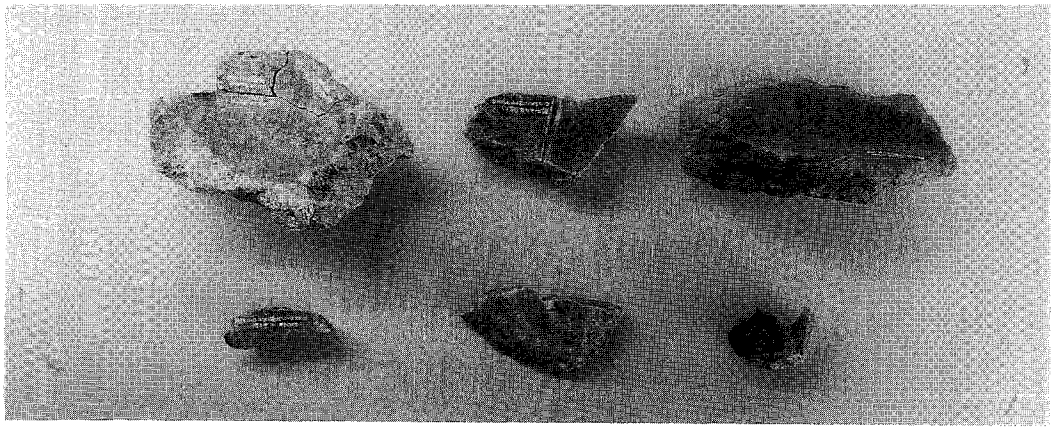
①②　出土陶磁器（1）

図版24　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（11）



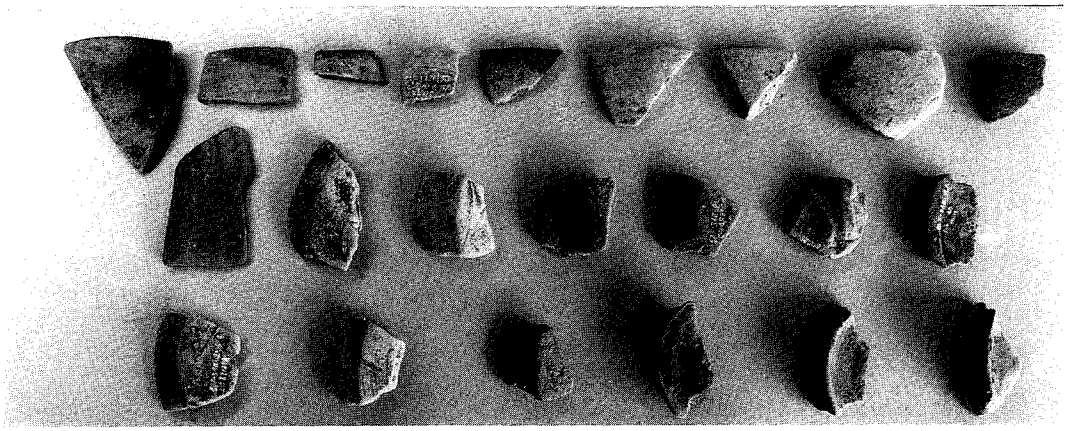


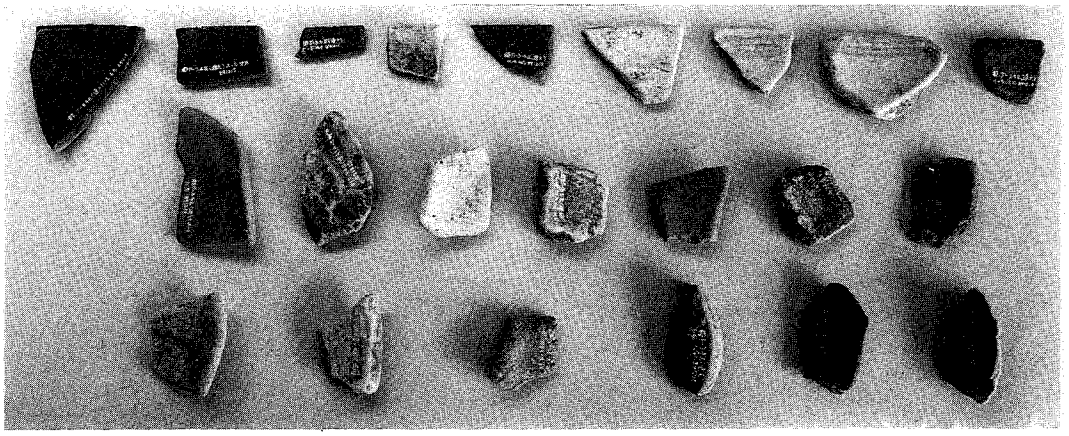


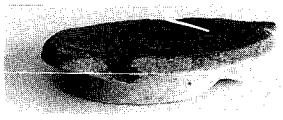


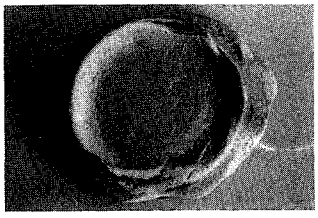
①
②
③
④

①②　出土陶磁器（2）　　③④　石鍋









①

②

③

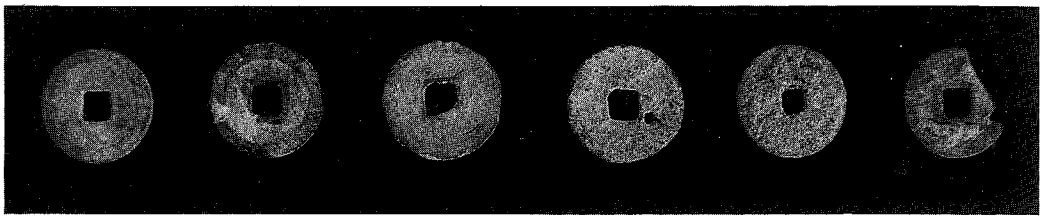
④

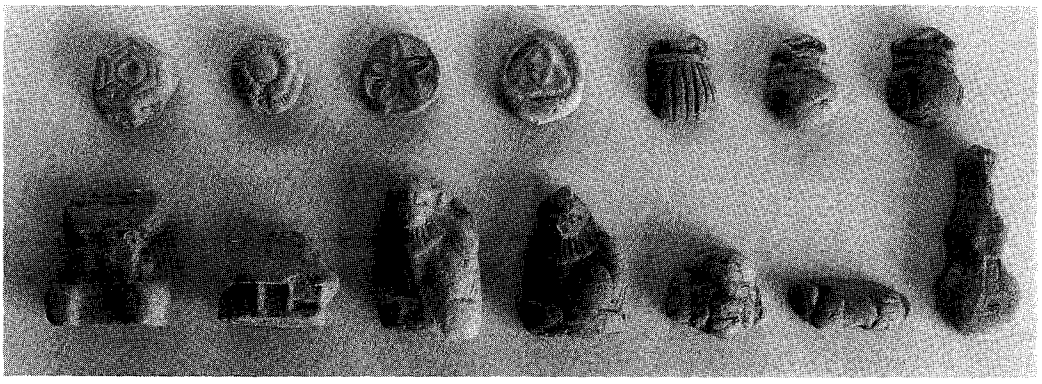
⑤

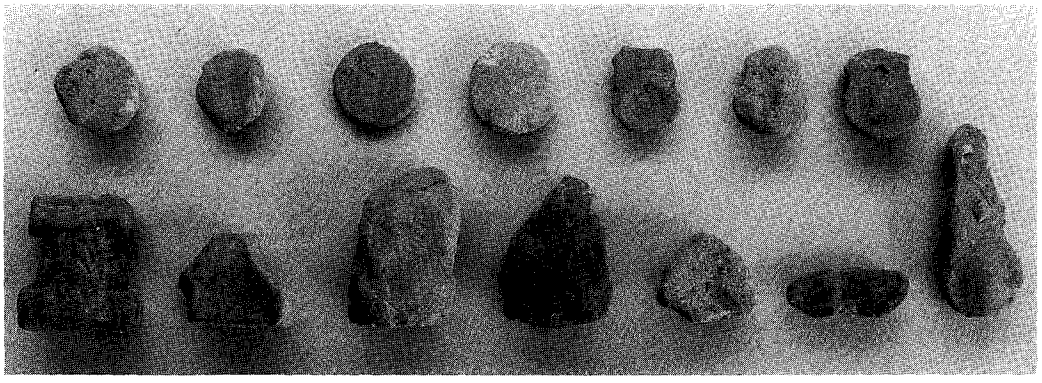
①② 出土土師器・黒色土器（1）

③④⑤ 黒色土器（2）

図版26　鹿児島大学郡元団地F—3・4区（13）







①

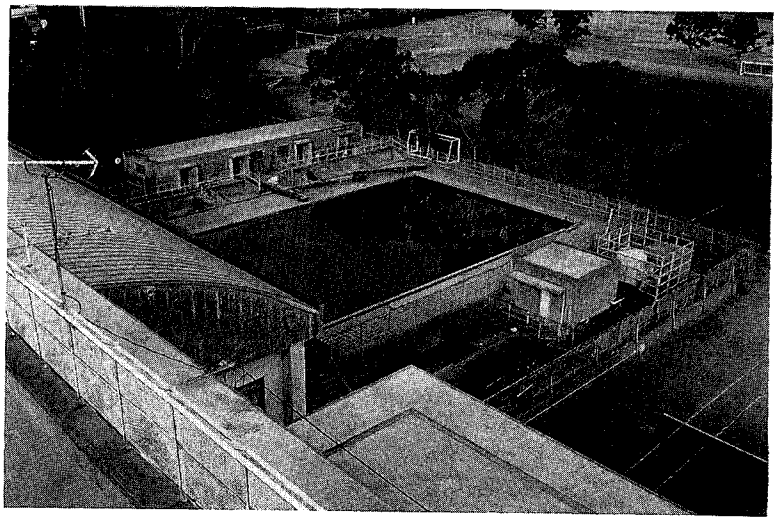
②

③

④

①②　出土銭貨　　③④　出土土製品

図版27　鹿児島大学郡元団地Q—9・10区（1）



①

②

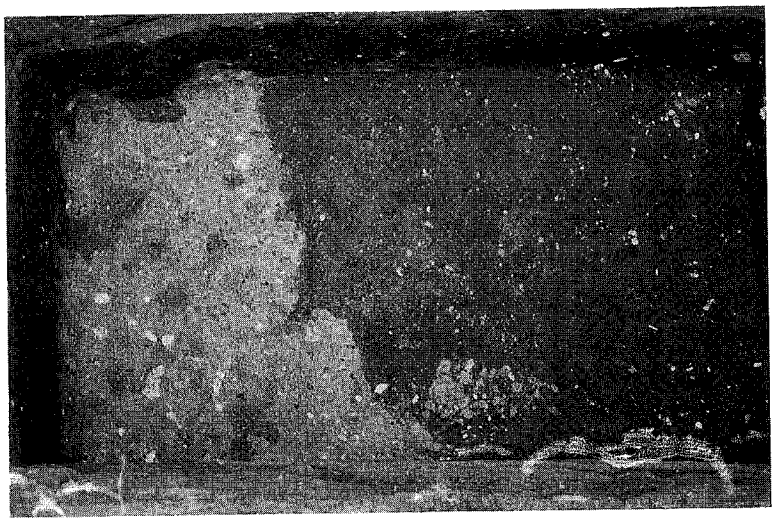
③

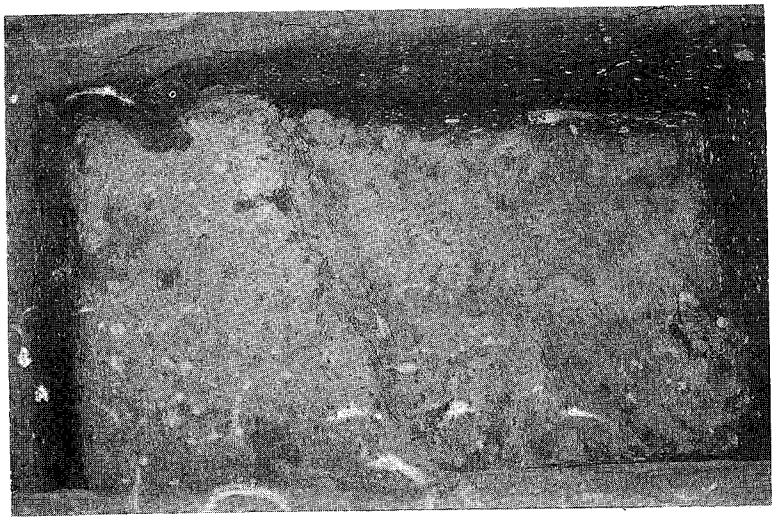
① 調査区全景（南東から）

② No. 5 トレンチ北壁

③ No. 5 トレンチV層
遺物出土状況（北から）

図版28　鹿児島大学郡元団地Q—9・10区（2）





①

②

③

① No. 6 トレンチⅥ層上面遺構検出状況（東から）

② No. 6 トレンチ検出遺構完掘状況（東から）

③ No. 3 トレンチⅤ層中検出ライン（東から）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ

1990年３月

編集　鹿児島大学埋蔵文化財調査室
発行　鹿児島市郡元一丁目21－24

印刷　㈲　朝　日　印　刷
鹿児島市上荒田町854－１